朝鮮部落調査豫察報告

第一册

朝鮮總督府


UNIVERSITY OF MICHIGAN
3 9015 05609 2706



朝鮮部落調査豫察報告

第一冊

本府は大正九年八月より囑託小田内通敏をして朝鮮部落の調査に從はしめしが、大正九年八月及同十年十月より同年十二月に亘つて調査せる報告茲に成れるを以て、今回庶務部調査課に於て之を印刷に附し、頒布する事とせり。

大正十二年三月二十日

朝鮮總督府

序言

余は命に依り、大正九年に始めて八月一ヶ月間、翌十年に再び十月より十二月にかけて三ヶ月間、朝鮮部落の調査に從事した。部落の數は十六で其の所在は咸鏡北道を除き各道に亘つてゐる。本報告は其の調査を綴つたもので、特に豫察報告と名づけたのは、踏査の日數が京畿道の麗陵里に四日を費した外は、日程の關係上何れの部落も二日又は一日に過ぎなかつたからである。

元來調査すべき部落は、其の部落の存立する土地の地勢及氣候と產業との關係と、部落の構成・生活及敎化等の特色から見て、全鮮を通じ標式的のものを選むを理想とするけれども、此の調査に於ては、種々の都合上、其の標準に據る事を得なかつたのは已むを得ない所である。

本報告書に載せた部落圖及住家平面圖の原圖は、總督府及各道郡廳吏員の手に成つた者で、住家各部の命名は中樞院所屬諸君の手を煩はした。部落及住家の寫眞は悉く余の撮影したものである。住家平面圖の作製及寫眞の撮影に對して、朝鮮の方々がよく調査の目的を諒とし、住家の內部をも研究の爲に示された事は、余の感謝措く能はざる所である。

朝鮮郡別人口密度圖は、大正九年十月一日施行された臨時戶口調査の報告に基き、余の調製したもので、各地文化發達の差異を比較する基準たるものであるから、特に

卷首に挿入することとした。

余は創めて企劃された此の調査報告を公にするに當つて、朝鮮總督男爵齋藤實閣下・前政務總監水野錬太郎閣下・現政務總監有吉忠一閣下並に余を推輓された前總督秘書官遠藤柳作氏及常に本調査の成長に努められた庶務部長守屋榮夫氏と余の所屬たる中樞院書記官長小田幹治郎氏延いては關係各部局(文書課・調査課・内務局・殖産局)の諸君に深厚の謝意を表する。諸部落の調査に就いては、京畿道社會事務囑託吉田正廣氏は當初から盡力せられ、又當該道郡廳及面事務所當局者は隨時便宜を與へ、其の作業を助けられた事を感謝する。

大正十二年三月

東京朝鮮部落研究室に於て

囑託　小田内通敏

目次

圖版目次

朝鮮部落調査豫察報告　第一冊

囑託　小田内通敏

第一章　部落調査

第一節　部落調査の意義

地方生活の研究と部落調査

何れの國に於ても、一群の民衆が一定の地區に集團定住して生活を營むに當つて、其の部落の存立する土地の自然的條件卽ち地勢・氣候等が其の生産に影響する結果、其の住民は居住地の周圍から仰ぐ生活資料を限定せられ、爲に住民の生業は地方的に特殊化される。又其の部落を構成する住民は、姓系上・經濟上・社會上の關係及宗教・教化の盛否等によつて、文化の程度を異にし富の分配に少なからざる差異を生ずる。だから地方生活の研究には、常に其の地方の概相を明にすると共に、其の土地の自然的條件と歷史的發達とを基調とする標式的部落を選定調査する事が最も合理的な方法である。

余の朝鮮に於て行ひつゝある部落調査は、此の立場から行ふものであつて、其の調査の單位研究の對象を行政上の面に取らず、其の一部たる洞や里のうち、十數戶乃至數十戶の集團部落に限つたのは、如上の理由からである。余は朝鮮固有の部落調査から、進んで內地農民の移住部落の調査にも及び、以て其の接觸の實相を明にしようと思ふ。

第二節　部落調査の經過

北鮮と南鮮の部落

大正九年八月、余は部落調査の囑託を受け、東京より往復一ヶ月の日程を以て、先づ風土・産業及生活の異れる北鮮と南鮮とを比較し得べき部落を選んで調査した。生活様式の最も簡單な部落を調査する事は、朝鮮部落の概念を得るに最も捷徑であるから、山麓に位する京畿道利川郡新屯面長洞里（圖版第一・第二・第六四）に就き調査したが、自足自給の純農村丈に住民は純朴で生活は甚だ簡素であつた。（部落の特相第一）次いで同郡栢沙面道立里（圖版第一・第二）を調査したが、儒生嚴氏の隱棲した部落丈に住民の態度の親切優雅（圖版第六）なるはいふ迄もなく、部落を圍んでゐる山々は樹木繁つて如何にも豐かな感じを起さしめた。（部落の特相第二）



市場に於ける婦人（咸興）

それから余は京城に歸り、遙に江原道の高原地帶の寂しき光景を車窓より眺め、咸鏡南道の咸興に至つて其の邑内の市場を見、其の盛んな事と殊に婦人の出市の夥しいばかりでなく其の風采の堂々たる事とは、前に見た南鮮利川邑内に於ける市場に婦人の出入の稀なのと對照の著しいのに驚いた。咸興附近では李太祖を祀つてある本宮の賦役に服した宮西里（圖版第六五）を調査したが、特別保護のなくなつた今日では戸數著しく減じ生活の程度も一般農村より反つて困難であつた。しかし家構は南鮮の部落に比べて一般に大きく、屋根の葺き方窓の大さなども目立ち、屋後に自然木の煙筒を据え付けあるなど、すべて大まかな

氣分の溢るゝ心地した。調査した民家（圖版第一一・第一二）はさつぱりと掃除が行屆き、宅地内に林檎や葡萄など果樹の多い事を見たが、後に宣教師と聞いて成程と首肯いた。

部落の類別

大正十年三月から四月にかけ、余は部落調査立案の爲に京城に赴き、部落を左の如く類別し、經費の充足と共に漸次其の調査を遂行する事を企てた。

朝鮮人固有の部落

一、經濟上の類別

普通農業（穀菽）特殊農業（養蠶・煙草・棉花・牧畜・人蔘等）副業（農產製造・木工・織物・製紙・製絲・金屬工業・窯業・釀造業其の他手工業）の行はるゝ部落　林業・漁業・鑛業・工業・開墾・灌漑・水害・市場・都市其の他交通機關の影響を蒙れる部落　最も富める部落　最も貧しき部落

二、社會上の類別

兩班・士班の多き階級部落　姓の單純又は複雜なる部落　地主及小作人關係圓滿ならざる部落

三、敎化上の類別

儒敎・佛敎・基督敎・天道敎・侍天敎・巫卜其の他特殊信仰の盛んなる部落

四、內治上の類別

規約のよく行はるゝ部落　紛爭の絕えざる部落　敎化の殊に低き部落　飲酒・賭博等風紀の宜しからざる部落

五、歷史上の類別

開發年代の殊に舊き又は新しき部落　城・寺・宗廟・兵營其の他史蹟の存在が部落の構成及現狀と密接の關係ある部落

内地人關係の部落

居住年代の舊き部落　居住年代の新しき部落（内地人のみの部落　朝鮮人と雜居せる部落）

外國人關係の部落

支那人の居住せる所で、經濟上・社會上内鮮人に影響の大なる部落

歐米人の居住せる所で、經濟上・社會上内鮮人に影響の大なる部落

なほ各道廳に對し、左の類別に基き簡單な調査要項を示して其の回答を求めた。是各道廳に於てよく之を諒解し、進んで其の調査を行ふようになる事を望んだからである。（各道廳報告「朝鮮」大正十一年・十二年掲載）

一、納税の成績良好なる部落及良好ならざる部落

二、農業及商業の發達したる部落及發達せざる部落

三、歴史上の代表部落

四、内地人の雜居（舊き又は新しき）部落

大正十年十月より同十二月まで約三ヶ月間、余は各道の地方生活の概觀をなし、なほ道内一二部落の豫察を試みた。茲に其の經過の大要を述ぶる事にする。

京畿道

十月七日先づ京畿道廳に赴き、内務部長佐藤七太郎氏及廳員諸氏に就いて、京畿道が漢江の以北と以南とが農業經營上著しき差異ある事、江華島が文化上特色が多いから、部落調査にも適地の多い事、水原郡が經濟上優越の地歩を占めてゐるばかりでなく教化が進んでゐる事、開城郡の開城は全鮮文化の一中心で、其の住民は夙に經濟的に自覺し全道に行商をなし、爲に「松房」の名高き事などを聞き得た。京畿道内に於ては開城に近い王といふ同姓族の集團してゐる中

開城人の經濟的自覺と行商

太祖陵洞

西面麗陵里太祖陵洞（圖版第二八・第二九・第七〇）を調査する事に決し、十月十日から四日間之に從事した。（部落の特相第九）

米國宣敎師の根本的經營

其の間開城の北部滿月臺に高麗の故都を弔ひ、米國宣敎師の經營せる松都高等普通學校を訪ひては、資力の乏しい學生に給費の傍精巧なる機械を用ひて綿織物を織り、且之を材料としワイシャツを製作して日本・支那・南洋等に居住する外人に供給しつゝある經營の根本的なるに感じた。

宗敎家の朝鮮人觀

十月十四日京城に歸り、外人の朝鮮地方生活の研究談を聞かんと思ひ、佛國天主敎會に長く咸鏡道方面に居られたラッボー氏を訪ひ其の意見を徵したが、氏は「同じ物事でも人によつて見方が違ふものだから、貴下は自からの研究法でやらるゝがよい」といつて意見を口にするを避けられたので、余は日本人に會つて朝鮮人の事を聞くと其の欠點ばかりいふ人が多い。たゞ舊友京都市外花園妙心寺專門道場主平元德宗氏ばかりは、余が朝鮮研究の要諦はと質した時に、朝鮮人の美點を見る事を心掛ける事が肝心だといはれたから、貴下のように布敎にたつさはつてる方に質したら、美點を聞かれようと思つて伺つた次第だといつたら、氏は會心の笑を浮べて「それはよい考である。朝鮮語を話し得る日本人でよく朝鮮の方々と接觸してゐる種々の職業の人々に就いて調査するように」といはれた。なほ朝鮮に就いての所見を叩いたら「一二時間の談話丈ではそれから類推する誤解に陷り易いから、箇條書にして問合はされると答へませう」といはれた。其の用意の周到な事には敬服した。

越えて十五日、余は曩きに麗陵里を共に調査した本府農務課技手安秉春氏を伴ひ、內鮮の兩人が相共に全道の部落調査に從事せんと樂んでゐたが、同氏は公務の都合上突然同行する事が

出來ぬようになつたから、本府殖産局から通譯者を伴ふの外、各道廳にて隨時農業の調査及住家の製圖をなすべき人々の同行を請ひ、豫定の調査を遂行する事とした。又仁川觀測所に赴いて中村技師に就き朝鮮の氣候の特色―内地の東海道附近を標準とすれば、朝鮮の氣候は概括して、冬は二季夏は一季春と秋と合せて一季といひ得る。冬は十一月から三月まで丶四月になると遽に春らしくなるのは大陸的氣候の特色で、春は天氣がよく乾燥し、夏には豪雨が多い。梅雨の徵候は慶北の大邱以南にある。咸南北部の高原地帶は概ね海拔千米以上だから、長津・三水・甲山三郡附近は寒氣最も早く來り、古き記錄には七八月頃に霜雪の下つた記事さへある。又脊梁山脈は北から半島の中央に連つてるから、京元線に沿へる江原道の平康・鐵原二郡附近は夏猶冷涼たる氣候である事などを明にした。

朝鮮の氣候の特色

越えて十六日、余は始興郡廳の舊址に警察署長を訪ひ、此の附近の犯罪狀態―竊盜は減じたれど詐欺取財が增し、殊に迷信によつて醫療しようとする犯罪の多い事を明にした。又昔仁政を布いた名郡守の善政碑が、一般の善政碑は町端に群立してある例に反して、邑內に建てられてあるのを床しく見た。

犯罪狀態



名郡守の善政碑

十八日、余は總督府に於て、內務部長會議の爲に各道より來會せる廳員に就き、調査の順路を左の如く定め即夜義州に向つて出發した。

調査順

一、平安北道　二、平安南道　三、黃海道　四、江原道

五、咸鏡南道　　六、忠清北道　　七、忠清南道　　八、全羅北道
九、全羅南道　　一〇、慶尙北道　　一一、慶尙南道

平安北道

十九日、新義州から義州に向つたが、一路平坦な兩側は鴨綠江に沿ふた廣い平野で、殆んど玉蜀黍の田ばかりである。農夫は其の收獲に忙しく、處々に散點せる民家の低く貧弱な樣子は殊に目を惹いた。義州に着いて直ちに道廳に赴き後丘の統軍亭に上つたが、鴨綠江を隔てゝ滿州の九連城・鳳凰城を望む大觀は、義州の「海東第一關」たる形勝を首肯せしむる。余は道廳に於て道知事飯尾藤次郎氏に就き、對岸滿洲は無警察の狀態だから不穩な人々の集團が多い事、古

義州と其の對岸

來支那との交通が繁く、冬は鴨綠江が凍るので殊に兩岸の交通を便ならしむる事、從つて此の附近の住民の發音は支那音に類する事、對岸から密輸入をする恐多い事などを聞いた。更らに義州面長鈴木氏からは、田舍の方は物騷なので近年地主が多く義州に移住し、從つて住宅の不足を來す事、內地人は支那人や朝鮮人に比して生活の程度が高いから、同一の商業では彼等と競爭の出來ぬ事を聞いた。二十日には各課長と會し、部落調査を行ふべき部落を、基督敎の盛んなる宣川郡內に於て求むべき事とし、直ちに新義州を經て宣川に向つた。約二十年前米國宣敎師の宣川に來つて布敎するや、先づ病院を建て、穀物の種子を多く持ち來つて其の耕種を敎

宣川と基督敎

へ鷄・豚・果樹殊に葡萄などを奬勵した。是信者の增した原因で、附近の農事も爲に進むに至つたとは、我々の大に顧みるべき事と思ふ。たゞ氣候との關係を研究しなかつたから、數年來農民は漸く府や道の奬勵指導を受くるものが多くなつたといふ。

二十一日、余は宣川郡廳に赴き基督敎の盛んな部落を調査する豫定で相談したが、日程の關

仁豆洞

係上已むなく、附近の深川面仁豆洞圖版第一七・第一八・第一九・第二〇・第六七、部落の特相第六を調査した。二十二日には宣川邑内に米國宣敎師の經營せる信聖中學及聖經學院を參觀した。信聖中學は廣い敷地内に、普通校舍の外洋式と朝鮮式の寄宿舍あり、なほ鐵工及木工を敎ゆる工藝部と、農牧を營む農場があつて、木工を卒へたるものに宣川邑内に之を營業とするものあり、牧場より搾取される牛乳は遠く安東や平壤に賣出される。聖經學院は女子部であるが、十年前より此處に敎鞭をとれるステヴン孃は朝鮮語を操る事自國語の如くである。宣川邑内でも附近の農村でも、信者の多い處は日曜は家族の大部分が敎會に集り、商人は其の業を休み、敎儀を嚴守するほど盛んである。

平安南道

雲鶴里

平安南道に於ては、道順の關係上二十三日より二十四日にかけ、安州郡新安州面雲鶴里圖版第二一・第二二・第二三・第六八、部落の特相第七を調査し、二十五・二十六兩日は平安南道々廳に於て道の大勢を聽いた。雲鶴里は安州邑内から移住した大地主李氏と其の小作人から成立つた部落で、李氏は小作人に對して殊に施設する事もないようである。

李氏の住宅

李氏の一族李寅彰氏圖版第二二・第二三は早稻田大學出身で現に道評議員だが、其の家構の工合や宅地内に多くの花卉果樹を、宅地圍りにポプラを防風林に植えあるなど、將來朝鮮の住宅改良の好資料と感じた。道廳に於ては、道知事篠田治策氏から山間

火田民

部に住んでゐる火田民が所有權の觀念に乏しく且共同的作業に適しないから、其の指導に最も困難なる事を聞き、學務課にては私立宗敎學校及敎會分布圖により、大同・江西・龍岡・平原・中和

基督敎關係の學校及敎會

諸郡に基督敎關係の學校及敎會の多き事を知り、又天道敎は孟山・寧遠・成川・江東諸郡の山地に盛んなる事を知つた。

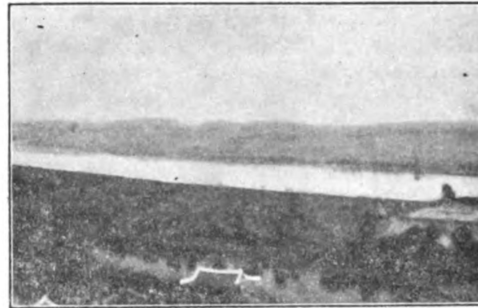
田中氏の朝鮮談

長く朝鮮人敎育に從事してゐる田中高等普通學校長とも談じたが、其の談話中若い朝鮮人が非常に進歩した事、實力養成を自覺しての向學心の盛んになつた事、共學

	學校數	教會數
大同郡	二七	七八
江西郡	九	四六
龍岡郡	八	四一
平原郡	七	三八
中和郡	三	三九

問題・民家の改善談など最も余を首肯かしめた。

十月二十六日、余は平壤を去るに臨みて、平壤の故址を訪ひ先づ浮碧樓に入りて其の古雅な建築に憧れ、更に上りて乙密臺より北東に大同江と陵羅島と浮碧樓の展開する光景を下瞰し、轉々古朝鮮の面影に見とれた。二十七日は、平壤より汽車にて沙里院に出て、沙里院より自動車にて海州に赴く途上、載寧より新院の間に於て、載寧江の支流とも覺しき一小流の岸に沿ひてポプラの黄葉と柳の綠葉とが並び立てる風景は、朝鮮の田舍ならでは見がたい景趣であつた。余は朝鮮觀光の人々に對して、朝鮮の風物及人文に就いての觀察は、汽車の沿道のみに限られるような慣例を破られたい事を切望するものである。



平壤乙密臺よりの下瞰
（大同江・陵羅島と浮碧樓）



載寧より新院への途上

二十八日、黄海道廳に赴き、道知事朴重陽氏を始め各課長に就き谷山・遂安・新溪三郡に於ける火田民の狀況、道內にて長淵郡の殊に富の平均せるは、地味よく田畓相半し且土地が偏つてゐて、交通の衝に當つておらぬ爲に自足自給の處が多いからで、道內を自作及小作の分布上から

見ると、山地の多い遂安・谷山二郡は自作多く、畓の廣い安岳・延白二郡は小作多く、載寧・鳳山・長淵・松禾四郡は其の中間に位する事などを聞いた。

栗谷先生

二十九日、兪參與官外廳員と共に海州邑內から北西約四里ある高山面に、郷約で名高い栗谷先生の遺址を訪ね、それから附近の席洞面蓮根里龜石洞を調査した。栗谷先生は三十五才の時すべて官を辭して海州に歸られたが、四方から來り學ぶものが多かつた。一日學生と共に石潭川の峽流九曲に遊び、其の景を賞して各曲に命名し、五曲の隱屏右岸崖上に聽溪堂を築き、對岸には隱屏精舍を建てゝ隱遁された。隱屏精舍には先生の遺著で諺文で註釋された中庸が藏せられ、先生の常に居られた聽溪堂には先生の作か左の絕句が聯となつてある。

面水依山一小堂　土床風榭可溫凉
門無外客心無事　玉軫韋編味正長



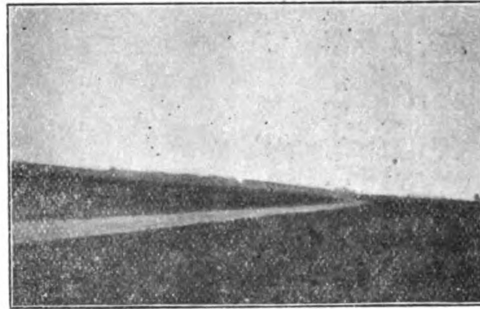
栗谷先生の遺著（自筆）

先生が中庸を諺文で註せられたのは、其の見識のある所を見るべきである。たゞ兩家共に荒廢し、郷約の面影も傳つてゐないのは頗る遺憾である。先生から十二代の孫李種文氏亦あまり富んでゐない。

龜石洞

龜石洞は小さな部落ではあるが、現に道評議員をしておられる吳國東氏と其の一族及小作人の居る處とて、まとまつた落付いた部落である。（圖版第二四・第二五・第二六・第二七、部落の特相第八）

越えて三十日、余は廳員と共に海州郊外の名勝を探り、それから自動車で青丹・延安を經、禮成江を渡り土城驛に出て汽車にて京城に歸つたが、海州から延安に赴く一等道路が傾斜緩かな



海州から延安に赴く一等道路

田畓の中を、砥のように平かに通つてゐるのは實によい感じがした。

自動車の利用と道路

朝鮮に於て汽車の通じない處で自動車が相當に利用し得らるゝのは、此の一等道路が開かれた御蔭である。

支那商人の經濟的發展

延安では支那人の商店及料理店を開くもののあるのを見た。支那商人がかく到る處に根據を有して、市場から市場に、部落から部落に行商する忍苦は驚くべきもので、かくして經濟的發展は成し遂げられる。

支那との航通關係

海州から延白までは自動車で通過したに過ぎないが、内地の瀨戸内海岸を通るような感じがした。本道海岸は古來支那との航通が多かつた所だが、今日でも其の來往繁く、椒島の如き保安上重要視されてゐる事に徴しても、本道海岸に於ける支那關係の研究調査は重要な事である。

江原道

十一月三日、余は京城より春川に向つたが、楊州郡から加平郡に入ると山漸く險しく、殊に加平邑内から春川邑内に赴く間は、兩岸山峙ち其の間を流るゝ北漢江は流急に、其の右岸に沿ふて通せる新道を過ぐる時などは、眞に山國に入るの想があつた。京城から春川に赴く山路の多い此の旅は、昔徒歩では三日路であつたが、今は自動車で十時間程で行く事か出來る。

江原道廳に於ては農務課と地方課に於て本道の地方的特色を明にする事を得たが、其の地理的位置が北鮮と南鮮の間に位し、且高い脊梁山脈が其の東部を北西から南東に縦走してゐるか

全鮮の交叉狀態

ら、全鮮の北と南、東と西との交叉狀態を見出す事が出來る。即ち嶺東の日本海岸は地勢上狹く長くて北部の通川・高城・襄陽の三郡は咸鏡南道に、南部の江陵・三陟・蔚珍の三郡は慶尚北道に類してゐる。竹林の分布から見ても中央の襄陽郡は日本海岸の北限界となつてゐる。

嶺東と嶺西

嶺西は嶺東に比すれば面積廣く、臨津江と北漢江と漢江との上流域に分れてゐるが、北部臨津江の流域に位する鐵原は平安南北道の人々の居住多く、南部漢江の支流蟾江の流域にある原州は、昔から兩班の多く居住する點に於て南鮮の邑内に類してゐる。春川は鐵原と原州との中間に位し、北漢江と昭陽江との會合點にあるので、京城との航通最も利便に、從つて京城とは昔から關係が深い。



北漢江に沿へる山路

小中心地が多い

道を通じて山地多く二十一の郡廳所在地は其の間に介在する小平野の中心となつてゐるから、經濟上からいつても敎化上から見ても、本道には大中心地が出來得ない。麟蹄郡は道内で最も山地の多い處で、蜂蜜の良質なる事全鮮第一の賞あるは、蜂が高山植物の蜜を吸ふからで、其の優秀な北面百潭里の產は、昔から李王家の御買上品となつてゐるといふ。麟蹄郡と襄陽郡の郡境附近の國有林は、全鮮でも有名な大森林であるが、それは韓國時代から「封山」として伐採を禁ぜられてゐたからである。

火田民

かく山地が多いから火田民も多く、傾斜の六十度内外の處を牛を使つて耕作してゐる狀態は巧なもの、之を副業とするものは定住してゐるが、專業とするものは漂泊的であるから、爲に山林の荒廢する事夥しい。火田民の事は平安南道々廳で詳しい調査書のあるのを見たが、今後總督

各道の火田面積

府としても十分に調査の必要があると思ふ。今各道の火田面積を比較すれば左の如くである。

各道火田面積表（大正十年十二月末）

咸鏡南道	五九、四〇三八反	全羅南道	四九三〇反
平安北道	四四、二四八一	慶尙北道	四八七六
江原道	一五、一八五三	忠淸北道	三七七二
平安南道	一〇、五三六八	忠淸南道	三四七二
黃海道	七、二四六二	全羅北道	二〇四一
咸鏡北道	三、二八一九	慶尙南道	四四七
京畿道	二、四一九六		
合計	一四四、二七五五反		

錦山里

余は全鮮の上から見て特色ある本道に於て、標式的の部落を調査する事を欲したけれども、日程の關係上已むなく春川邑內に近い山村西下面錦山里內の葛屯里（圖版第七・第八・第九、部落の特相第三）を調査する事にした。

注目すべき地方改良事項

なほ江原道廳に於て得たる材料で附記すべきは、同地方課にて各郡に照會して地方改良事項ともいふべきものを二十二項に分ちて報告させつゝある事である。今之を摘記すると、

一、巷間に多くの讀者を有する朝鮮小說

二、俗謠（農夫歌）

三、珠聯に使用せらるゝ語句

四、俚諺

五、迷信の種類

六、忠臣・義僕・孝子・節婦の典型として衆人の話題に上る古人の事蹟

七、現存せる旌門・碑閣・書院の事蹟

八、現存せる篤行者の事蹟並に現況

九、契・組合の種類

一〇、救恤・慈善・隣保・共助等に關する社會事業的施設

一一、小作慣習

一二、小作制度改善に關し、地主に於て特に施設せるものあらば其の狀況

一三、農民の常食並水害・旱魃に際し、食料とするもの〻種類及其の料理法

一四、農侶(下男又は作男)雇傭の慣習

一五、良風・美俗並に惡風の種類

一六、御大典紀念として施設せる事業の現況

一七、部落共同事業に對する違反者及其の懲罰方法

一八、孝子・節婦・篤行者・高齡者の表彰慰安をなす地方あらば其の方法

一九、山川・草木にして產業上又は風敎上特に歷史的若くは神秘的のものあらば其の緣由

二〇、內鮮人融和機關の設置せる地方あらば其の現況

二一、社會事業として緊急施設を要すと認むるあらば其の意見

二二、從來の宣傳册子又は宣傳ビラに對する民衆の感想並に將來に對する意見

これは十餘年間本道に在勤せらる〻大塚屬の立案であるが、二十二項の中で朝鮮固有の民俗・

慣習・趣味を勉めて知らうとしてる事と、宣傳に關する民衆の感想を聞かうとする事は、本道に限らず牧民にたつさはる者の必ず心得べき事で、よき事項であると余は感じた。

八日、余は春川を發し鐵原に向つたが、春川に近い昭陽江と北漢江を渡つて華川邑内に入ると、四圍の山相益々高山の趣を呈して五葉松の木立漸く多く、華川から金化に出る馬峴の新道の險しさは、手に汗を握るほどであつて、其の南麓山陽里附近には火田民の寂しき住家さへ見られた。其の夜鐵原に一泊したが、加茂谷庶務主任からは、朝鮮人の旅行は内地人よりも遙に簡單で、大正元年頃江原道の蔚珍邊から間島に移住する婦人でも夜旅するのに何とも思はなかつた例や、又鐵原在住の内地人は二府二十七縣の本籍を有せる丈に、中々融合上困難であるとの話を聞いた。

咸鏡南道

九日、余は元山に赴き、十日元山から咸興に行き、道廳に於て道知事李圭完氏に會つた。氏は咸興の女子が近頃著しく自覺し來つて、中年の婦人が若き婦人と共に夜七時から十時まで開

咸興婦人の自覺

かるゝ講習會に出席するばかりでなく、更に婦人青年研究會の設立に熱心なるを語り、一旦よしと思へばどこまでも實行する咸興人の氣風に徴して其の有望なるを語られた。昨年咸興市場に於て婦人の活動の盛んな事を見た余は、それが智識的に目覺めた此の運動にも必ず實現さるゝ事を疑はない。咸興面長定野氏に會つた時に氏は面としては益々發展するけれども、内地人の

内地人の歸國

實業界に成功せる主立つた人々が、四五年間に内地に引上げたもの四人もあるのは、此の地の冬を嫌ふからで將來移住政策上注目すべき事であるといつておられた。

越えて十一日、余は内務部長三田善喜氏に就き道の大勢を聞いた。本道は地勢・氣候及生産等

の立場から、元山・咸興・北青・端川を中心とする海岸の小さな四區と、外に甲山・三水・長津・豊山四郡と新興郡の一部に亘つてゐる高山地帶の大きな一區ある事、而して此の高山地帶は未墾地殊に廣く、爲に他から年々移住する者が多い。作物の主なるものは燕麥・馬鈴薯であるが、いくら澤山出來ても運搬不能の爲に生産地より外に出す事は出來ない。又一戸の耕地は四町歩以上もあるのは、氣候の關係上作物の生育期間が短いので廣い耕地に粗放な農業をやるからである。

高山地帶の生活

從つて部落の數も極めて少なく、國境方面の警備に當つてゐる警官の如き、一日八九里を巡羅して僅かに一二の小部落を見る事を得るのは稀でないといふ。藤原警察部長が警官の趣味心を養ふ爲に、内地の小學兒童の書いた繪書と草花の種子とを贈る計畫を語られた事は、今でも床しい事であると思つてゐる。かゝる山地に火田の多い事は前掲火田面積表に本道が其の主位を占めてゐる事で明かである。

國境方面警備の苦心

本道に於ては、此の高山地帶の山民部落を調査するのが最も適切であるが、日程の關係上咸興郡州北面富民里（圖版第一三・第一四・第一五・第一六・第六六、部落の特相第五）を調査して、其の模範里たる實況を究め、水稻の栽培及藁細工の成績優良なる事を知つた。

十一月十三日、余は咸興から直行京城に歸つたが、元山から京城まで「元山發達史」の著者高尾氏と同車する事を得たのは好都合であつた。氏は明治三十七年から元山に來て居られ、當時大阪朝日の通信をしておられたが、咸鏡南北・江原諸道の邑誌其の他の史書をも渉獵し、朝鮮語に巧に且實地を踏査して居られるから、君の如きは朝鮮の地方生活研究の好適者である。朝鮮人の移動性に富んでゐるのは古來大陸から脅威を受けたからで、日本海岸に防備の行屆いて居つ

高尾氏の地方研究

た事は烽燧臺の多いのでもわかる。慶尙北道の迎日灣附近には島根・山口二縣からの漁夫の來住者が多いが、よく朝鮮人と融和してゐるなど語つた。君の朝鮮談は暗示に富み且肯綮に當つてゐる所が多い。

忠淸北道

十七日、余は京城から鳥致院に赴き、それより自動車にて忠淸北道淸州に至り、十八日道廳にて米田道知事を始め各課長に就きて本道の特色を質したが、面積が小さいので地方的差異少なく、主要農産物たる大豆など何れの郡でも産し、京城に近いので古來重要なる物資の供給地であつた。殊に忠州は要路に當つて居るばかりでなく、京城と舟運の便ある漢江にも近いので、よく京城に供給された關係上工産物なども發達した。京城に近い本道は文武兩班の後裔の居住多く、殊に槐山邑內には集團し、漢江沿岸には點在してゐる。余の調査した漢江左岸に臨める忠州郡可金面樓岩里（圖版第四八・第四九・第五〇・第五一）の如きも、兩班鄭氏が此處に隱棲したのが部落構成の原因となつてゐる。今左表を見るに兩班の數は淸州・永同・陰城・忠州諸郡に多く、姓別上からは李・金・

京城への物資供給地

兩班の居住が多い

兩班人數郡別表（大正九年二月現在）

淸州郡	四、〇二二人	沃川郡	七四四人
永同郡	一、六四四	鎭川郡	六七六
陰城郡	一、五四九	報恩郡	五三〇
忠州郡	一、四八一	槐山郡	四八三
堤川郡	八五二	丹陽郡	一一四

合計 一二、〇三三人

呉・鄭の四姓最も多く朴・申・權・柳・趙などの諸姓之に次いで多い。又古來儒教の盛んだつた所丈に、今日でも北論と南論の確執から互に結婚を好まぬ所もあるといふ。

淸州と內地人

二十餘年來政治の中心となつて居る淸州は、今日全鮮中內地人の來住多き都會の一つであるが、內地人は明治三十四年九月から來住し始め、今は朝鮮人の七百四戸に對し、內地人は五百六十戸に達し、所有家屋棟數及坪數から見ると、朝鮮人は棟數四百七十九戸、坪數一萬二千六百三十五坪、內地人は棟數三百七十七戸、坪數六千百四十坪となつて居る。

樓岩里

十九日、余は可金面樓岩里を調査すべく、淸州から陰城を經て忠州に行つたが、二十餘年前まで觀察府を置かれた面影が今猶郡廳々舍に偲ばれた。調査した樓岩里は漢江の左岸に臨んだ風光のよい所で、鄭氏の此處に隱棲したのも之を貴してとあつたが、鄭氏の凋落と共に今は見る影もない貧村（部落の特相第一三）となつており、僅かに鄭尙源氏（圖版第五〇）に其の名殘を見た。

忠淸南道

二十日、余は忠州から淸州に歸り、二十一日烏致院を經て午後忠淸南道の公州に赴き、道廳に於て道知事金寬鉉氏・內務部長松本誠氏・警察部長關水武氏等から道の大勢を聞いた。本道は農業經營上から見ると、大地主が多い結果小作農は農業者の五割を占め、地方的には南部に自作農北部に小作農が多い。又兩班が多い關係上階級的の觀念強く、爲に基督教信者の數も他道に比して少ない。

兩班と階級思想

特産は舒川郡の苧布最も知られ、韓山を中心として産するから韓山苧布の名高く、附近の扶餘・保寧・靑陽三郡と共に道內の年産額は七十萬圓に達する。主として鮮人の周衣に用ゐられるが、全道を通じて九割は本道産を原料とする。兩班の居住部落としては論山郡魯城面魯城の尹氏か連山面連山の金氏を擧げられたけれども、日程の關係上公州邑內から交通の

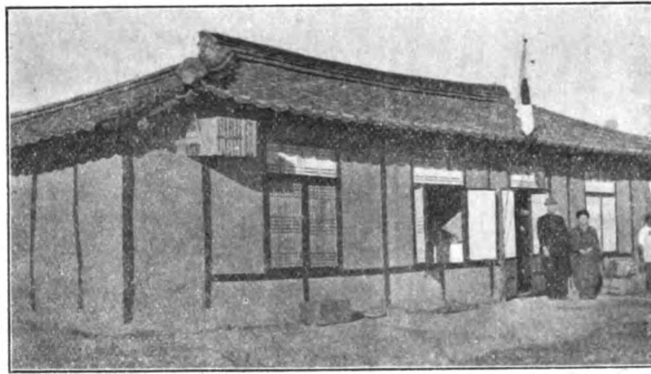
便のよい新上面維鳩里を調査する事とし、尙最近迷信の關係上諸道から新移住者の多い俗に新都內といはるゝ所にある部落を調査する事にした。

維鳩里

二十二日、余は公州から北西四里餘に位する兩班の多く居住する維鳩里圖版第三九・第四〇・第四一・第七二、部落の特相第四一一を調査したが、同行の通譯者潘氏の話に、家構は勿論住民の態度や言語までも京城風なりといつておられた。たゞ姓は單一でない爲に意見が一致せず、爲に部落としての活動が思ふようにゆかぬといふ。此處では兩班韓氏を訪れたが、宅地內には樹木花卉を植え、兒女の爲には家庭敎師を置かれ、萬事中々行屆いて見えた。

住よき折衷家屋

二十三日、公州から自働車で論山に向つたが、途中魯城面を通過する時に、右方に朝鮮在來の民家に比べ構造の異つてる一家を見た。余は下車して之を見ると、それは小學校長相島氏の住宅で、在來の朝鮮家屋と日本家屋とを折衷して住よく建てたもので客室と次間には疊を敷き入口を入るとすぐの茶間を溫突にし、又浴場や厠は全く內地風である。客室と次間の窓は朝鮮在來のものより丈も巾も廣いから室內は非常に明るい。是等は內地人の移住家屋としては好資料であらう。氏は明治四十四年渡鮮以來敎職に從ひ、此の住家を造るに百圓を以て畓の中に地形をつくり、七百圓で建築し、なほ畓十斗落を小作して永住的生活を營んでゐる。



校長相島氏の住家

新都内の移住部落

二十四日、余は汽車にて論山驛から豆溪驛に出て、南西約一里半ある新都内の移住部落に赴いたが、部落近くになると田の中に簡單な民家がポツ〳〵新築されてるのを見た。新都内で余の調査した部落は論山郡豆磨面夫南里（圖版第五八・第五九・第六〇・第六一・第六二・第六三、部落の特相第一六）であつたが、六十戸に近い此の新部落が一年も經たぬ間に出來たと聞いて驚いた。これは一種の迷信で遠くは平安南北道から來るが、最も多いのは黄海道からである。雪は降り寒氣は烈しく、爲に長時間の調査を遂ぐる事は出來なかつたが、朝鮮人の心理的傾向を研究するには實によい部落である。此處に最も多く信徒を有する侍天教主金演局氏の邸宅（部落の特相第一六）は、新築の最中だつたが全く貴族の邸宅の如く壯大なものである。豆溪驛では粟を入れた澤山の袋や家具を積んであるのを見たが、それは何れも移住民が郷里から持ち來るので、黄海道廳の如き極力移住を止むる方針を取つてるけれど、移住者は家財や食料品を先に送り、自分は京城見物などと稱して郷里を出づるものが多いといふ。

全羅北道上新里

二十五日、余は裡里から自働車にて全羅北道々廳に赴いたが、道廳の都合上當日直ちに部落の調査に赴く事とし、全州から南西約四里ある金溝面上新里（圖版第三二・第三三・第三四・第三五・第三六・第三七・第三八、部落の特相第一〇）を二十六・二十七兩日に亘つて調査した。上新里は張氏の一族と其の小作人の部落で、張氏は經濟上社會上頗る優越な地歩を占め、一族には資産家多く同姓の部落としては道内屈指である。

模式的な同姓部落

其の中心たる張燦國氏の邸宅（圖版第三四）の如き、家構の大きく棟數の多い事は今まで見ざる所であつた。張燦國氏は近年まで殆んど鎖村主義を取り、一族のものは學校にも通はせない方針だつたが、近頃では一族中でも向學に目ざめ通學者も漸く增して來たとの事である。余は此の部落

を調査し、朝鮮の地方生活を理解するには、先づ此の如き部落を其の研究對象としなければならないと思つた。

三南の寶庫

二十八日、余は道廳に於て朴參與官・片岡內務部長等に就いて、全羅道は南北を通じて經濟豐かに、古來三南の寶庫と稱せられ、昔は税も高く取られて居つた事、全北は富豪多く、殊に全州には大地主が多いから、生活の程度高く衣食住すべて京城に次ぐほどで、人智亦巧慧、從つて行政上中々骨が折れ小作問題の解決なども困難である。其の附近は所謂全州の平野で地味肥え農業は最も進んでゐる。北西の錦山郡は地味肥沃といふではないが、耕地と農家戸數が均衡を保ち從つて勞力平均し、農家に餘裕のある點で見るべきである。

內地人と接觸多い部落

又農業上內地人との接觸多きは金堤郡の月村面、益山郡の望城面、全州郡の助村面等を擧ぐべき事などを聞いた。

農社

八尋農務課長は農業に關し種々物語られたが、里を單位とする共同作業即ち農社の事と、北鮮の農具は支那風で南鮮のは九州のものに類してゐる事とは最も興味があつた。夜は道知事亥角仲藏氏と朝鮮人の移動傾向に就いて語り、又明治二十八年統監府時代から朝鮮に居り、韓語研究法を著はし朝

藥師寺氏の朝鮮談

鮮の民族性に就いて研究を怠らぬ藥師寺氏と談じて得る處が多かつた。言語の上からの北鮮と南鮮の差、日本語に比して動詞の殊に少ないのは單純性をあらはしてゐる事、市場は經濟上の需給機關であるばかりでなく、周知の場所であり娯樂の場所である事、又群山の米人經營の病院が全州方面にまで知られてるのは、米人が技術に長じてるばかりでなく、よく朝鮮人の心を握るに巧であるからであるといはれた。藥師寺氏一夕の朝鮮談は高尾氏一日の車中談と共に、余の旅行中に得た朝鮮觀の最も味ふべきものであつた。

全羅南道竹影車窓に入る

二十九日、余は裡里から汽車にて全羅南道に向つたが、車窓から眺められる各部落の背後に竹林の緑に繁つてるのを見て內地に歸つたような感じがした。余は全羅南道に入り松汀里驛にて下車し、更に自動車にて道廳所在地たる光州に向つた。

暖い南道

三十日、余は全羅南道々廳に赴き、內務部長佐々木正太氏其の他に就き本道の大勢を聞いたが、南西岸は海に臨みて且島嶼が多いから冬も氣溫高く、殊に務安・海南・珍島三郡は慶尙南道の統營郡及蔚山・東萊二郡の海岸地方と共に暖い。又南海の濟州島は朝鮮での柑橘類の特産地である。従つて畓の裏作は慶尙南北道と共に多く、三道の裏作反別は全道の七割以上を占めてをり、

一戸の經營反別

一戸の經營反別は田畓各々六反で生計を支へてゆく事が出來る。工業も慶尙南北道と共に盛んで、織物は綿布多く竹を材料とする笠・籠・櫛なども全道に供給される。地主と小作人の間に介在する舍音は本道に限らないが、幸に其の材料を得たから左に其の數の多い郡を掲ぐる事にする。

舍音の弊

道內の舍音總數は二千百二十七人で、其の管理面積三町歩以上のものを合計すると、畓は二萬七千五百八町歩に亘つてゐる。舍音への支給は種々あるが、或は普通小作料高の百分一乃至三の現品を支給し、或は小作地中良好な土地を無料又は低率の小作料で小作せしめ、或は小作籾一石の徴收に對し、金十錢乃至二十錢を、或は月額七圓乃至十五圓を支給して更に年末賞與を給するか、又は手當・籾保管料・賞與等に區分して支給する。舍音の弊害は私情によつて小作權を移動したり公平を缺いたり、地主の意志に背いた過酷な小作料を徴收したりするので、農業の堅實な進歩發達を阻碍する事が多いから、かく小作地の實權を握つてる舍音の弊害を矯正する計畫や施設を試みてゐる。

舎音數郡別表

舎音數郡別表（大正九年末現在）

海南郡	三三二人	康津郡	一一八人
務安郡	一九六	和順郡	一〇七
羅州郡	一九六	谷城郡	一〇〇
寶城郡	一七八	光陽郡	九三
長興郡	一三八	長城郡	八八
靈巖郡	一二三	光州郡	八六

本道に於ては、櫛を全道に供給する靈巖郡靈巖面望湖里を調査する事とし、松汀里からは汽車にて羅州に赴き、それから自動車で靈巖邑內に至り、夜郡廳吏員から櫛製造に關する資料を聞いた。

望湖里

十二月一日、靈巖邑內に近い望湖里（圖版第五二・第五三・第五四・第七三、部落の特相第一四）を調査したが、戶々の周圍には竹林を繞らし、宅地內には田の外竹を乾すべき多少の空地がある。之に從事してゐる李氏は部落の大部を占めてゐるが、祖先が京畿道の儒者であるといふので、かゝる手工業を營んでゐるのを公にする事を嫌ふ風がある。調査の目的を明にして漸くある一家に就いて調査する事を得たが、多くの道具を巧に用ゐて櫛を製造する技術の早いのに驚かされた。しかし最近出來た產業組合がよく發達しないと製作者は長く工業勞働者の域を脫する事が出來ないであらう。

余はそれから自動車にて康津郡に赴き、成郡守からは地方警察の狀況を聞き、邑內附近を散步したが、耽津江口を南に控ゆる形勝の地形と民家のある處必ず竹林繁つてる有樣は、十二月

南國の感

ではあるが轉々南國の感じがした。其の夜長興邑内にて一泊し、翌二日古城面に兵營の故址を探り當時土産として有名だつた絹織物の現狀を調べ、靈巖邑内を經て羅州に一泊した。

金泉の市

十二月三日、余は慶尚北道に赴くべく、羅州から汽車にて大田に出て、夜に入りて更に大邱に向つたが、途中金泉驛からの乘客が多く車中全く立錐の餘地がなくなつた。是金泉市場からの歸途家路に向ふ人々で、これによつても同市場の盛大の事は推し測られる。かくて大邱に着いたのは深更であつた。

慶尚北道

十二月四日、余は慶尚北道々廳に赴き、知道事藤川利三郎氏・内務部長秦秀作氏を訪ひ、更に地方課にて調査すべき部落を、河回の柳氏として知らるゝ同姓族の集團する安東郡豐南面河回洞と定め、午後は大邱から程遠からぬ解顏面の東村即ち琴湖江に沿へる荒蕪地を新に開墾して

内地農民の移住部落

出來た内地農民の移住部落を見、一町歩を自作經營する早川氏に就いて蔬菜及林檎の栽培の實驗談と朝鮮の農業勞働者の親しむべく愛すべき性情を聞いた。琴湖江に沿へる沖積地を附近に

大邱と其の附近の農業

控えてゐる大邱は、蔬菜の大集散地で、其の農業の進歩と共に大邱は益々發達するが、地勢の關係上動力を求むるに困難だから工業は發達し難い。

越えて五日、余は大邱から自動車にて軍威・義城を經、洛東江を渡つて安東邑内に入り、郡廳を訪ひて豐南面河回洞を調査すべき事を語つたが、從來徒歩の外行く事が出來なかつた河回洞に最近自動車にて行かるゝようになつたと聞き、安東から直ちに河回洞に赴く事にした。大邱から河回洞まて三十里餘の陸路を一日に蹈破し得たのは、全く道路の發達した御蔭で、余は其

河回洞

の夕方靜かな洛東江の右岸に河回洞（圖版第四二・第四三・第四四・第四五・第四六・第四七、部落の特相第一二）を訪れる事が出來た。嚴し

い瓦葺の多い事丈で、一見柳氏の傳統的勢力を想見し得たが、其の夜面事務所の溫突內で晩餐を共にしながら面長柳氏を始め、所員や內地人の小學校長・警察官などから聞いた話で、純農村とは著しく違つてる狀態を明にした。面長の養子が僅に十一才で驚くほど能書だ事も、かゝる部落であればこそと首肯れた。

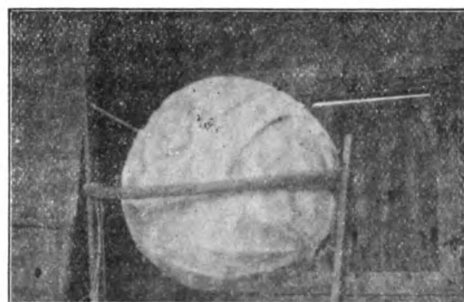
越えて六日、余は朝はやく部落を通觀すべく散歩したが、四周山に圍まれてゐる樣子は從來調査した諸部落と全く異つて、自から一小天地の感を起さしめる。此の同姓族の集團する大部落を一日で調査する事は、如何にも無謀ではあるが、日程の關係上どうする事も出來ない。已むなく豫定の綱目を道廳や郡廳の人々と分擔した。先づ余は柳氏の宗家柳時萬氏を訪ひて其の來意を告げ、住宅の作圖は、內地に於ても學術的立場から行はれてゐる事を民家圖集に就いて語り、同氏の諒解によつて全部（圖版第四四）之を作圖する事を得たのは好都合だつた。それから余は洛東江の對岸に渡り、芙蓉坮から河回洞の概觀を恣にし、謙庵精舍に少憩しては柳氏當時の生活の盛時を懷ふの情に堪えなかつた。午後柳承佑氏の邸を訪れて柳成龍先生の遺書及遺墨を拜し、なほ部落內にある先生の學問所を見た。夜に入つて分擔した調査を綜合し、かゝる古典的な部落にも時代の影が明に映じてる事を知つた。（部落の特相第一一二）

陶山書院

七日、余は河回洞から自動車にて安東邑內に出て、それから李退溪先生の陶山書院に詣うでた。洛東江の流を松林の間から下瞰し得る南向の書院の位置は、實に靜修に適してゐる。先生の常住せられた陶山書堂に入つて、其の遺愛の天體機や枕や机を觀、其の高風を仰いだが、光明堂に藏せられてある書籍を觀る事の出來ぬのは遺憾であつた。書院を辭してから先生の墓の



陶山書院



天體機（紙製）

陶山書院の右に博約齋左に弘教齋、博約齋の前には光明堂がある。書院の中には院規を始め四勿箴・夙興夜寐箴・日洞規・國忌など掲げ、先生の忌日は十二月初八日と記してある陶山書堂は溫突一間と板間一間で、玩樂齊や巖栖軒の額があつた。

ある山麓の土溪洞に宿つた。土溪洞は昔から養蠶の盛んな所丈に、大きな桑の天然木が所々に立つてゐる。李朝の時は此處から絹を納めたといふ。

八日、土溪洞から禮安を經て安東に出たが、幸に定期市が開かれてるので、四圍の山村から出づる土產の數々を見る事を得たが、木履や砥の作り方の殊に粗雜な事は、普通の邑內より素朴な山村に近い事をあらはしてゐる。安東からは義城・軍威を經て大邱に歸り、翌九日は道廳に於て、道內の北部と南部との差異を聞いた。

北部と南部

北部は山地が多いので田作が行はれ、副業として盛んに行はるゝ養蠶は、殊に尙州と安東を中心地とする。又麻の特產地は北部の榮州・醴泉・安東の三郡で殊に安東麻布の名が高い。南部は北部に比すれば田は多いが副業は盛んでない。畜產殊に牛は山地の多い北部に盛んで、全鮮中でも頭數が多く市場も爲に中々賑ふ。道內で竹林の多い處は、東海岸の迎日郡と其の南西の淸道郡とで、殊に迎日郡の南東岸の長鬐面に多い。

九日午後、余は大邱を出發し、新羅の古都として名高い慶州に赴いた。地方史蹟の研究家として知られてゐる大阪公立普通學校長の東道にて古蹟保存會の陳列館に入り、夜は同氏から慶州の住民が同地方の史蹟に對して、强い自覺の生じて來た事を聞き、之を機會に慶州人に地方生活の學術的研究を奬められたい事など話した。慶州に限らず、東京や京城に留學し鄕里に歸つて比較的閑散な時日を有する靑年は、其の地方の研究を試み、之によつて地方改良の自覺を促す事は最も必要な事で、殊に慶州の如き之が先驅をなすがよいと思ふ。大阪氏の案內で婦人の爲に開かれてゐる夜學校をのぞいたが、中には小兒を負ひながら學習してるものがあるのを見て、向學心が如何に强く芽ざしてゐるかを感じた。

慶州人の自覺

十日、早朝慶州から汽車にて佛國寺に赴き、先づ佛國寺の大雄殿に詣で、それから嶮しい山路を上りて、吐含山の石窟庵に丈餘の釋迦像を拜したが、其の周圍の石壁に刻まれた觀世音、菩薩像など、見るから神々しい感じがする。余は此の庵が遙か東に日本海を下瞰し得る形勝の地に建てられてあるのを深い意義のあるように考えられ、殊に此處から展望し得られる谿谷が、日本海岸への重要な通路である事を大阪氏から聞かされたので、遙か縹緲たる日本海を望みては古代の日韓交通の狀態などを想像した。此の日午後、大阪氏から案內されて、慶州邑內附近の史蹟雞林・月城・瞻星臺・芬皇寺を始め、邑內南方の古墳群や諸王の陵などを觀た。かゝる史蹟に富める慶州は、朝鮮を研究し且觀光する者の第一に觀るべき所で、殊に內地から初めて朝鮮に入る人は、釜山から直ちに、京城に入らずに先づ慶州を觀る路を取る事を奬めたい。

慶州の古蹟

十一日、余は慶州から蔚山を過ぎ、此の日は東萊溫泉に一泊して旅塵を洗ふ事を得、翌十二

慶尙南道

日には東萊から釜山に出で釜山からは汽車にて三浪津を經て、更に馬山線で馬山府に赴いた。

馬山と永住計畫

馬山は全鮮でも最も氣候のいゝ所丈に、內地からの移住者も殆んど永住的計畫に出て、從つて住家の建築の如きも、之を北鮮の諸地方に比すれば誠に永久的に造られてある。府の學務課員で長く江原道春川に居つた人は、馬山と春川とに於ける內地人の住具合を比較し一は家具調度にも永住的氣分を窺はれるが、一は全く反對であると語つてゐた。

棚田

十二日、余は馬山から自動車で咸安を經て晋州に向つたが、途中山麓に所狹きまでつくられた棚田の多いのを見て、全く內地の山陽方面を旅するような感じがした。晋州に於ては、文祿の役當時の史蹟を探り、晋州邑內南江に臨める形勝の地點に建てられた矗石樓に上つては、如何にも「嶺南第一形勝」の名に負かないと思つた。

畓の二毛作

十三日、余は慶尙南道々廳に赴き、地方課長・農務課長等に就いて、本道の中で居昌・咸陽・陜川・山淸四郡は比較的開けないが、其の他は土地の利用中々進んでゐて朝鮮と思はれぬ、畓の二毛作などもよく行はれ、慶尙南北道の畓の二毛作面積は全道の約六割を占めてゐると聞いた。

東拓移民

東拓の移民も多く、利弊之に伴ふ所もあるが、金海郡金海面南驛里の同移民の如きは、最もよき影響を朝鮮農民に與へ農事の經營が殆んど內地人と異らぬほどの狀態に進んでゐる。內地人の農業經營で最も成功せるものは果

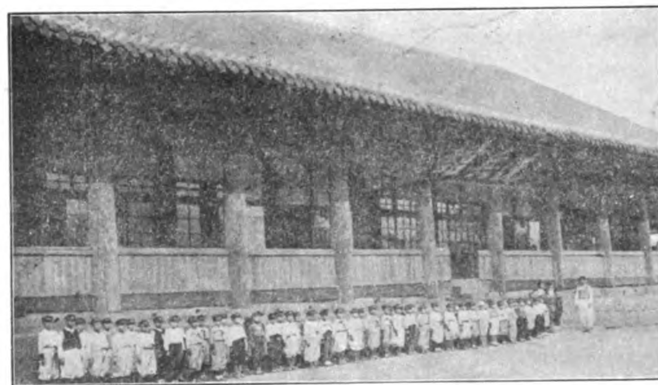


馬山附近の棚田

樹で、殊に金海の梨と三浪津の林檎とは名高い。又本道は全鮮で最も水産業の盛んな所で、內地漁民の影響を受けて漁舟・漁具等に著しい改良が施されてゐる。內地に近い關係上留學生及勞働者の內地に來る者も最も多い。余は本道に於ては、漁村部落を調査する事とし、南海に臨める統營郡に赴きて其の地點を定むる事にした。



統營港



舊洗兵館

十四日、余は晋州から泗川・固城を經て統營に赴き郡廳を訪ねたが、北に山を負ひ南は海に臨んでゐる此の港は、航運上・漁業上重要な位置を占めてゐるばかりでなく、海防上樞要な地點で、今日私立普通學校の校舍に用ゐられてゐる洗兵館は韓國時代の兵舍であつた。倭寇や文祿の役に關する言傳が多く、困山面の問語灣の如き、網を曳くと數十年前までは人骨や煙草や茶碗などが揚つたといふ。又南海の孤島每勿島は、六十餘年前までは無人島だつたが、始めて開墾に着手した時、內地人の持つてるような箸や烟管や釣針などが出たといふ。余は本道に於ては巨濟島にある巨濟面竹林浦を調査

竹林浦

する事にした。

十五日、余は統營から舟にて、燈臺のある放火島を北に眺め、閑山島の北を過ぎて巨濟灣に入り、巨濟面面事務所々在地から南方十數町の所にある竹林浦（圖版第五五・第五六・第五七、部落の特相第一五）に着き、午後に調査を行つたが、部落の配置住家の構造など、何れも農村と異なる處がなかつたが、漁業に用ゆる舟や道具等すべて內地式になつてるのは、其の利害が農業よりも漁業が直接に影響するからである。夜は面事務所々在地に一泊したが、朝も夕も漁民が路傍で鮮魚を鬻いてる有樣は內地と何の異る處がない。十六日巨濟面から統營に歸り、忠烈祠に詣でたが、大きな椿の並木が祠前にあるのは珍らしかつた。

十七日、余は統營から晉州に出て、晉州から馬山に赴き、翌日馬山から京城に歸つた。余は九月七日から十二月十九日まで前後七十四日間、上述の如く諸道の概觀と部落の豫察とを試みたが、其の間蒐集した住家平面圖及寫眞を、十二月二十三・四兩日間總督府第二會議室に陳列して、地方生活研究の資料に供した。

第三節　部落調査の計畫

大正九年度と同十年度に於て、余は前節に述べたように諸道の部落を調査し、同十一年度に於ては、九月より十月にかけ一ヶ月間、部落經濟の需給機關たる市場に就いて調査した。其の報告は豫察報告第二冊とし、來る十二年度に於て公にする豫定である。

十二年度からは、五ヶ年を第一期とし、經費の許す範圍に於て、一般調査と特別調査とを行ひたい希望を有してゐる。即ち一般調査に於ては、余は全道を通じ地勢・氣候・産業等から見て標式的地域の部落と、歷史上・社會上特殊の意義ある部落とを、各道廳と協力して調査を試み、之によつて部落生活の基礎・貧富及文化の程度と存立の傾向を究むると共に、部落構成の要素たる農民の生活狀態を明にしようとする。又特別調査に於ては、各專門家に委囑して、朝鮮の地方生活の由來を明にすべき社會制度・經濟組織・土俗・民家・保健・村落工業其の他に就いて調査を進めたいと思つてゐる。相依り相扶くる道を歩むべき朝鮮に對して、我々は常に溫き洞察を持つべきで、道廳や郡廳のある所謂邑內の都會生活者のみによつて朝鮮を知らうとせずに、多數の田園生活者を通して其の實相を究むる事が最も必要である。是田園生活者は其の數に於て多いばかりでなく、其の生活の內に確乎不拔な民俗を保持するからで、之を究明する事は、都會生活者の力强い背景を理解する所以であるからである。

第二章　部落の考察

第一節　部落の概相

火田民の漂動生活

朝鮮に於ては、住民の一部は所謂邑內と稱する都會に定住するも、其の大部分は村落に定住してゐる農民であるから、朝鮮部落の概相は是等農民の生活現象を歸納する事によつて之を明にする事が出來る。しかしかく定住する普通農民の外に山地には漂動生活を營みつゝある火田民が居る。余は定住部落の概相を述ぶるに先ち、比較研究上火田民の生活を一瞥する事にする。

全鮮を通じて分布する火田民の戶口及其の部落の數は、玆に之を明記する資料を有しないが、火田の總面積が十四萬四千餘町步に亘つてるのに徵しても、其の耕作に從事してゐる戶口及其の部落數の少なからざる事を想定する事が出來る。是等の火田民が其の耕作すべき林地に火入れする時には、先づ面に許可書を出し、警察官が之を臨檢して火災豫防の條件を附した上で許可せられる事になつてゐる。しかし僻地では之を侵す者が少なくないので森林の荒廢が夥しい。火田民は土地のものもあるけれども、所によつては他道他郡から移住して來るものも少なくはない。同一地區に定住して、普通農民のように副業を營むものもあるが、それは至つて少數で多數の者は二三年か四五年經つと他に轉移するものが多い。殊に甚しいのは春來つて秋に去るものがある。其の食物は一年間のある季節は自作の農作物で支へるが、他は草根・木實・木皮などで之を補ふ事が少なくない。火田は一旦耕作した處は四五年以上耕地とする事が出來ないから、

何れの道でも現に火田になつてる地積の外に、三年以上休耕してゐる地積が相當に廣い。(朝鮮總督府臨時土地調査局「西北鮮地方に於ける火田に關する調書」(大正五年))

家屋家具

火田民はかく轉々移動するばかりでなく、其の生活程度が、極めて低いから、家屋も普通の農家より一層簡單であり、家具・農具なども頗る簡單なもので、中には一二の食器を家族數人で兼用するものがある。鋤を引かす牛の如きも二頭を所有するものは約半數で、他は一頭を有するか全く所有しないから耕作の際には互に共同して使用し又は自己の勞力と交換して之を借れる事を常とする。甚しいのは鋤鍬なども所持しない。しかし炊爨用の釜ばかりは必ず之を所持し、

火田の種類

移轉の際にも大切に之を背負つて行く。火田の種類は一、ブテキ(火德)・二、火田・三、山田の三種類で、ブテキは山嶽地方の原生林に初めて行ふ事を云ひ、火田は最初の一年間に行つたブテキに對し、二年以後四五年間繼續する狀態をいひ、山田は普通の火田に對し特に傾斜の急な所に行はるゝものを指し、其の耕作狀態は普通の火田民よりは粗放である。(小泉技師「火田民生活に關する調査」)

農民の定住部落構成の要素

かゝる漂動部落に於ては生活狀態がすべて一時的であるけれども、農民の定住部落には其の構成の上に住民の永久的思想が窺はれる。卽ち洞や里では年に一回部落附近の傳說のある山か

祭神

形勝のよい處に山神を、或は部落の古木・奇石・幽泉に洞神を祭り、其の福祉を祈り災難疫病の囘避を祈るを常とし、祭時には巫女を賴む事が多い。忠州の樓岩里では町端の路傍に左揭の小祠に部落の子女が祈福の爲に建られてあるのを見た。

墓地

墓地に對しては、一種の迷信が行はれ、部落から一里や二里遠い所でも、其の地相が家運の隆盛を來たすべき處には、埋葬する風が今でも行はれてゐる。先年共同墓地の制に對して面白からぬ感情の起つたのもこれが爲である。


山上の洞神（維鳩里）


祈福神堂


同祭神

契の成立と其の種類

しかし何れの部落に於ても、其の經濟的社會的存立は主として契の成立と其の運用とに負ふ所が多い。此の契には約束に背かない事や生活の爲に互に勤勞し、且互に相會して祭や宴會を共にするといふ意味があり、二人以上の人が契員となつて契錢（又は穀）を醵出し、其の出資や殖利で其の目的を行ふようになつてゐる。（村上氏「契の研究」に據る）

洞契	洞里民の協議で洞民は必然的に契員となる	納税・道路及橋梁の修繕等
農契 蒙利契 牛契	任意的に有志が協合し主に農村に行はれる	農具の購入及水利

松契・草鞋契・雞卵契・貯穀契・貯金契・殖産契等　任意的に有志が協合する……農事・副業の奬勵及共同の貯蓄・利殖

養契・師門契・謝恩契等　同……孤寡を救濟し或は師恩に酬ゆる

有信契・詩契・鄕約契等　同……同好者の親睦

宗契　一宗一門の者が協合する……血族的協合の深厚

葬契・婚契　懇親の者が協合する……一時的多額の支出を容易ならしむる

里中契　洞里民がすべて契員となる……金錢の融通を計る

算筒契　有志が任意的に協合する……富籤に類する

農社｛里洞民が協合する｝（南鮮に多く端午其の他名節に行はれる）
長春契｛青年が協合する｝青年同志が共樂する
學契　有志が協合する……………………書堂の經費を給する

是等契の發生は、部落の經濟的社會的存立の必然的要求から生じたもので、今日其の精神の活躍してゐる部落は、しからざる部落に比して著しく優つてゐる事は、實地調査の際にも目睹した所である。以上諸契中、婚葬は最も重要な儀禮とされておるので、其の費用も多額に上り、其の類も亦多い。殖産に關する契は、各地の特産によつて其の種類を異にする。なほ部落には

農社と勞働互助

農業勞働を共同する目的で一洞里又は數洞里合して一つの組合を作り農繁期の挿秧・拔稗・除草等耕耘に關する勞働を互助する組織がある。之を農社又は農旗といつて南鮮に多いが北鮮に於ても咸鏡南道の如きプンドリ（手入の交換といふ意味）と稱する勞働の互助が行はれる。


共同耕作


肥料（人糞と藁とを混せた）積


精米臼

部落の近郊で春季に行はるゝ氣の長い共同耕作や、秋の收穫時に精米臼で、大きな石の臼をまはしながら穀物を精白にする樣子は、朝鮮ののんびりした田園情景の特色である。

市場

部落の生活はかくして營まるゝのであるが、生活に要する物資の需給は殆んど附近の市場で辨ぜられる。卽ち市場は生活の必需品たる近隣地方の物產を始め、手工業者や小商人の持ち來る物品の交易さるゝ所で、一六・二七・三八・四九・五十と五日を隔て、邑內を始め附近交通の中心となり得る部落に開かれる。かく地方に開かるゝ市場は京市に對する所謂鄕市で、物資の賣買の外金錢の貸借も行はれる。全鮮を通じて市場の數が一千を超ゆる事を聞くと、我々は之を內地に比して朝鮮の經濟的發達に著しき差異のある事を認めざるを得ない。


市場（利川邑內）


牛市場（維鳩里）


部落から市場へ（葛屯里）


市場から部落へ（仁豆洞）

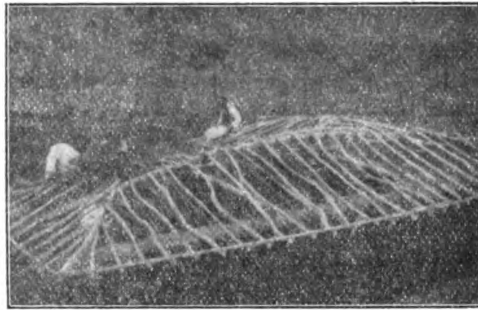
住家の構造

部落を構成する農民の生活は、之を住家（部落の特相中住家平面圖及住家寫眞參照）の上からも察する事を必要とす

る。其の小農に至つては溫突一間と之に附屬する厨あるに過ぎない。厨で炊事をすると煙が床下の通路をぬけ、其の火氣で室が溫まるようになつてゐる。寒氣の強い朝鮮では此の防寒設備を必要とするが、之に要する多大な燃料は其の重き負擔である。中農になると、一間の溫突が二間（上房下房）となり、更に離ともいふべき越房があり、厨の釜の數も之に應じて增されてゆく。婦人は殆んど來客に接せぬので主人が客に接する室は別に門の近くに別構の溫突舍廊（客室）があり、室の入口は扉式の窓で出入するようになつてゐるが、窓が小さいから室內が暗く、之を內地の住家に比べると著しく閉鎖的である。是等の建物は農作物の整理に用ゐられる庭を東か南に控えて列び、なほ小さな鷄舍や豚柵などが設けられる。下人や牛や馬を入るゝ別構が建てられてある家もある。農作物を入るゝ納屋のないのは乾燥過ぐる氣候が其の主なる原因ではあるまいか。宅地內には厨に近く醬油や味噌を貯へてる甕を陳べた醬甕坮があり、又幾坪かの菜田（蔬菜畑）がつくられるを常とするが、花卉を植えてる處の少な

閉鎖的

宅地



住家の建築（小農）



舍廊（中農）

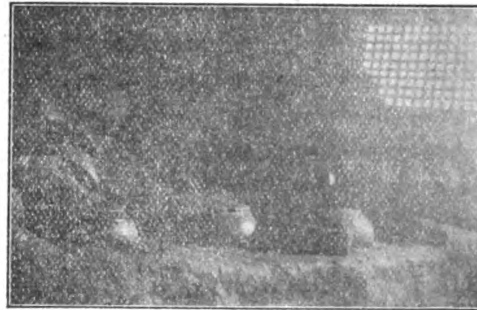


墻（黍稈）

いのは淋しい。宅地回りの垣根は江原道の山村などでは松枝を咸鏡南道では竹林を繞らしてゐるのを見たが、他は殆んど石墻や土墻であり、入口の大門も多く扉を用ゐ



厨（小農）



厨（地主）



井

られてゐるのは鎖ぢられてある感じがする。北鮮殊に咸鏡道の民家が、所謂兩通（圖版第一一・第一五）で他と異るのは、民族的の關係からで、近頃我國の民家と同系であると論ずる人もある。單に家構の差異ばかりでなく、宅地の廣さの如きも之を南鮮地方に比ぶれば、概して廣いのは戸口少なく土地廣き爲であらう。

南北を通じて家構が大體低小であるばかりでなく、家具の種類及數も少なく、室の内外に裝飾といふべきものはないといつてもよい。是長い間の惡政や、生活其の物の簡易な爲でもあらう。住家ばかりでなく衣服の數も少なく食物なども一般に粗食である。（部落の特相第九「衣食住」）

住家の配置

部落に於ける住家の配置は、内地のそれよりも不規則で、一つの幹から多くの枝が出てゐるように、分岐してゐる道の兩側から奥まで住家が列んでゐる趣がある。殊に同姓族の集團して

同姓族部落

ゐる部落には密集定住の特色がある。京畿道に於て調査した結果に據ると、二十郡を通じて、十數戸以上同姓族の集團せる部落の數は七百二十六で、其の大部分は同姓族が部落總戸數の五割以上を占め、中には百二十戸も集團してゐる所がある。かゝる處は其の宗家の住家が部落の中心を占め、部落の垈の所有權も一二の人の手にある所が多い。かゝる部落は傳統的保守思想に囚はるゝ嫌もあるが、歴史的に自治的統制が出來てゐて、祭祀・勞働・娛樂等何れも共同に行はれ、朝鮮では社交の少ない婦人の交際も圓滿に、各種の契も備はつてゐる。余は慶尚北道の河回洞と全羅北道の上新里を此の適例と見たが、住家配置の狀態は圖版第七十一に示す如くで、かゝる部落の住家の構造は、純農村に比して其の規模壯大なるものが多い。

部落集團の疎少

部落から部落を踏査すると、概して其の集團が內地の村落に比して少ないのは、人口の稀薄な原因もあらうが、經濟的發達が充實してゐない爲でもあらう。しかし同姓族の部落には可成りの大集團をなしてるのを見る。何れの部落でも處々にある井戸が、內地のそれに比し周圍に平たい石をめぐらしゐるものゝ多いのは、四季常用する白衣の洗濯に婦人が年中どれ丈多くの時間と勞力を費すかを物語つてゐる。

第二節　部落の特相

十六部落の經濟的及社會的特相

豫察した十六部落は經濟生活上・社會生活上夫々特色がある。就中純農村と見るべきは、新屯面長洞里・西下面錦山里・州北面富民里・深川面仁豆洞・新安州面雲鶴里・席洞面蓮根里の六部落で、之を營農上から見ると、比較的單純な所と地主と小作人の對立鮮な所とがある。又同姓族の集團してゐる部落としては、中西面麗陵里・金溝面上新里・豐南面河回洞・可金面樓岩里の四部落で、上新里と河回洞とには殊に其の宗家の階級的色彩が濃厚にあらはれてゐる。新上面維鳩里は姓の多種なる事が部落の行政に影響し、栢沙面道立里にては儒生の遺風が其の氣風に窺はれる。靈巖面望湖里と巨濟面竹林浦とは特產物を出す事が其の生活に影響し、雲田面宮西里は特殊の保護がなくなつて衰ひ、豆磨面夫南里は之に反して或る事情の下に全く新に構成されつゝある部落である。從つて各部落にて得たる調査資料は、其の調査時日の長短と相俟ちて精粗詳略一樣ではないが、部落の形相と住民の生活を明にすべき部落圖と住家平面圖とは、何れの部落に於ても之を蒐集する事に努めた。寫眞の如きも、部落の特相を明にすべきものは洩さず撮影した。讀者は本文を讀むに際し、各部落の附近地形圖と部落圖と住家平面圖と寫眞とを一々對照せられん事を希望する。余は是等諸部落の特相を述ぶるに先ち、部落所在面の耕地・營農狀態及納稅率等を比較して各部落の環境を明にしたいと思ふ。

面名	面積（方里）	人口 内地人（人）	人口 朝鮮人（人）	耕地面積 田（%）	耕地面積 畓（%）	營農狀態 地主（%）	營農狀態 自作（%）	營農狀態 自作兼小作（%）	營農狀態 小作（%）	直接税一戸當負擔（圓）
一、京畿道利川郡新屯面	二、三六四	—	四、五四一	四五、五	五四、五	三、四	六、三	三一、一	五九、二	七、一三
二、京畿道利川郡栢沙面	二、〇九九	—	五、一八二	三七、〇	六三、〇	九、九	五、一	二九、三	五五、七	四、九八
三、江原道春川郡西下面	六、〇〇二	一、〇四〇	三、六九三	七九、二	二〇、八	三、〇	五、一	五四、三	三七、六	六、六四
四、咸鏡南道咸興郡雲田面	三、五一六	三	一、五八二	八四、〇	一六、〇	一、八	一〇、三	二八、五	五九、四	六、七〇
五、咸鏡道咸興郡州北面	三、三六六	二	一、一二四	五九、九	四〇、一	四、五	六、五	四四、九	四四、一	七、一〇
六、平安北道宣川郡深川面	五、五四八	一五	八、三一六	六九、〇	三一、〇	六、二	一〇、〇	一一、二	七二、六	六、四六
七、平安南道安州郡新安州面	四、三七八	一、六七七	九、七五八	四三、七	五六、三	二、一	七、〇	三三、四	六七、五	一一、七〇
八、黄海道海州郡席洞面	四、三二〇	六	四、六四一	五六、六	四三、四	一、七	一九、七	五、九	七二、六	一八、一六
九、京畿道開城郡中西面	四、一二七	一〇三	六、三一六	七四、三	二五、七	二、二	九、七	三八、六	四九、五	一一、八一
一〇、全羅北道金堤郡金溝面	二、六四四	一六	一、五〇二	二五、六	七四、四	一、四	一一、四	三四、八	五二、四	一六、七〇
一一、忠清南道公州郡新上面	四、五一〇	二五	七、九六二	四八、七	五一、三	五、一	四、〇	三一、九	五九、〇	一一、〇五
一二、慶尚北道安東郡豊南面	五、〇一一	一四	七、六九四	六九、〇	三一、〇	二、五	一九、五	四七、三	三〇、六	一〇、〇〇
一三、忠清北道忠州郡可金面	三、一九七	八	五、三六七	五七、三	四二、七	二、七	五、八	七、八	八三、七	一一、九六
一四、全羅南道靈巌郡靈巌面	三、四八五	二四二	八、三八一	二四、四	七五、六	四、九	一二、五	五一、九	三〇、七	一三、三〇
一五、忠清南道論山郡豆磨面	三、五一二	四〇	六、九三一	三四、五	六五、五	三、三	四、九	二〇、一	七一、七	一二、二一
一六、慶尚南道統營郡巨濟面	三、一一三	一二五	六、〇〇七	六九、七	三〇、三	〇、三	三、三	六一、六	三四、八	一一、八〇

（大正九年末現在）

第一　京畿道利川郡新屯面長洞里

長洞里は、余が最初に調査をした所で、天德峯の南麓に散在した山村である。南方に漢川流域を下瞰し得る頗る形勝の地（第一圖版）で、もと南川郡邑内の址とて、田地の間には多くの瓦や陶器の破片が堆く、近くに古き井戸と思はるゝ老婆井といふのがある。長洞里は上村（東村・西村）と中村と下南村の三部落から成り、西村は里中で最も舊い部落で、其の地相が北西に山を負ひ南東の二方展開して、開村の運があるといふので、もとの南川郡邑内から移つたといはれてゐる。十數代前に此處に居をトした吳氏は、もと黃海道海州の出で、其の直系は產は豐でないが漢學の素養もあり里民に尊ばれ、其の一族は上村・中村を合せて三十七戸中十一戸を占めてゐる。

穩かな山村の特色

此の部落は穩かな山村（第二圖版）で、其の背後を圍んでゐる山地は林相甚た疎に、轉々寂寞の感を起さしめる。土地の開墾及地目の變換は數十年來殆んど變化ないばかりでなく、林野田畓の所有權も他部落に侵さるゝ事なく、耕作に要する勞力亦自給である。之を營農狀態から見ると、自作・自作兼小作及小作の數が略々同じで、一戸よりない地主も畓五町と田三町を所有するに過ぎない。しかし畜牛の飼養頭數が二戸に一頭の割合なのは、純農村たる他の里洞に比して其の數多く、冬の農閑に枯草や薪炭の賣出を副業とするものゝ多いのも山村たるが爲である。

自足自給の簡易な生活

里民はすべて農で他の職業に從事するものなく、鐵器の修繕を業とする鍛冶職すら、一年間のある時季に遠く北方の山を越えて他部落から入り來るほどである。農家は何れも米・大豆・小豆・裸麥・大麥・小麥・粟等を植え、なほ特用作物には少許の在來棉・胡麻・荏等をつくり、大根・白菜・甘藷・馬鈴薯・甜

爪などの蔬菜の栽培は全く自家用を充たすにすぎない。かく自足自給の簡易な生活を營みつゝ剩れる農作物及林産物は之を約二里の利川邑內の市場に搬出賣却し、其の必需品たる織物・魚類及鹽等を購入する。市場に賣出す物は農作物では大豆・小麥及小豆、林産物では枯草及薪炭である。此の部落の生活がかく簡易なばかりでなく、其の文化の程度も亦甚だ低く、漢學に通ずるもの少なく新聞及雜誌を講讀するものは一人もない。國語を解する者は僅に七名である。

住家と其の配置

此の部落で調査した民家は、成るべく舊い家をと思つて西村の自作農李氏（圖版第三・第四）で、耕地一町五反歩を所有し、家族丈で其の耕作に從事してゐる。住家の母屋といふべき所は、上房・下房の二間と外に土堂（土で固めた所）を隔てた越房一間と三室から出來、部落內でも舊い家丈に殊に低小で土臺石から軒までの高さ八尺五寸である。昔は此の一棟ばかりであつたが、李氏が此處に移つてからは、住家の東南に當る中庭の彼方に農業的設備として下人房の溫突一間と薪炭を入るゝ柴炭庫と牛を飼ふ牛養間を設け、なほ母屋の南方に客を接待すべき舍廊房を設けた。從つて家族は大門の方から出入するが、客は舍廊房の方の道から出入する。宅地の周圍は乾川（部落の間な流ろゝ川）に轉つてゐる圓石をかさねてつくつてある。余は此の民家によつてはじめて朝鮮農民の住家を見る事を得たが、室の內外には裝飾がなく、家具の數も至つて少ないような感じがした。

淋しい部落

此の山村を開いた吳慶は乾川の潤邊に堂を構へ溪山と號し、隣村道立里を創めた嚴用順と交遊があつたと邑誌に傳へられてゐるが、道立里が今日猶風敎の洽き部落であるのに、長洞里は之に反し數年前まで行はれた冠婚葬祭の契も廢れ、農旗・農樂もない淋しい部落となつて了つた。

第一　京畿道利川郡栢沙面道立里

道立里は、長洞里と同じく北に圓寂山を負へる山村（第一圖版）で、其の間相距る二十町に過ぎないが、山には樹木が繁り、部落の中央には大きな槐で圍まれた書堂と之に隣つて嚴氏の整つた住家があり、部落の景觀（第二圖版）は全く長洞里と異つてゐる。是全く嚴氏の祖先南塘先生の遺澤が今

南塘先生の遺澤

日に及んでゐるからで、其の一族は部落總戸數三十二戸中十七戸を占めて居る。嚴氏の祖先は長く江原道寧越に住つてゐたが、南塘先生嚴用順（十四代前）が此處に居を卜したのに創まつた。



六槐亭

余は部落で先生の遺書をさがしたけれど何もなく、僅に左の二絶によりて其の風懷を想見するにすぎなかつた。

漁磯垂釣

携竿終日坐磯邊　坐脚蒼波困一眠
夢與白鷗飛萬里　覺來身在夕陽天

次日本副使

我在天西君海東　相逢談笑酒盃中
男兒壯心寧知老　直到扶桑欲掛弓

余は面長や嚴氏の人々と共に六槐亭に入つたが、亭前の古槐晝猶暗く、轉々先生の遺風を想はしめた。今の亭は後に修せ

しもので、掲ぐる處の重修記中任鎬の稿に「吾鄕之六槐亭者卽南塘處士嚴公之舊居也、公當仁明之際遭時名盛肥、遯丘園尙志不仕、卜築於圓積之下、手植六槐于塘上、優遊徜徉而終其身焉、鳴呼若公者可謂能守淸苦之節而無愧乎子陵者也」の句があり、又慶延の稿に「幸而先生之裔孫慶炫有志、勤學慨舊業之荒墜、遂與其宗徒慶根倡率諸宗、並鳩財、治其塘其槐、卽舊址建書齋五六架、扁以六槐舊號、不侈不陋、瀟洒敞豁宛若先生盤詑之日」の句がある。

敎化の程度と嚴氏

余は此の亭で、嚴氏の一族其の他部落の有志と共に午餐を共にしたが、擧止の優雅にして接待の懇切なる、長洞里民の簡朴なのに比べて宵壤の差あるに驚いた。先生の直系嚴氏も相當の資産と信望はあるが、其の一族たる嚴基應氏は最も勢力があり、其の父嚴理燮（第六圖版）氏は漢學の素養もあり人格も高く近年面の公立普通學校や警察駐在所の建築にも最高の寄附をした。里民は勿論小作人等に對しても親切だから何れも信賴してゐる。里としては婚儀及葬儀に關する契があつて儀服一切をもつてゐるが、嚴基應氏は別に個人で之を備ひ、里民の必要にも應ずるようにしてゐる。前に述べたように此の部落は長く敎化に浴してゐるから、漢學の素養も附近の他部落に比して深く、新聞や雜誌の講讀者もあり、現今世に出ておる人では、李王職事務官嚴柱白氏を始め、銀行・郡衙等に奉職してゐるものもある。

經濟狀態

此の部落の耕地は田六十四町八反・畓七十四町六反で、營農上では自作兼小作と小作が部落民の多數を占めてゐる事は長洞里に變らないが、長洞里に比べると貧困者が少なく、借財を有する者十戶あるが、多くは金融組合から借受けた農業資金で、個人貸借のものは十圓乃至二十圓以內に過ぎない。部落內の地主は三戶で殊に嚴基應氏は耕地十八町八反を有し、部落の畓は槪ね

其の所有である。かく嚴氏は經濟上敎化上勢力があるから部落は統一せられ、農旗•農樂も共に備はつてゐる。山村だから冬期農閑に薪炭及山草を賣るもの丶多い事は、長洞里にかはらないが、宅地回りに果樹や漢藥の材料たる山茱萸を植え、又養蠶は舊くより行はれたらしく、桑の古木が處々に殘つており、生活の要素が如何にも備つてゐる。山茱萸の如き良種だので遠く京城や大邱に移出し、年々の賣上高が四百圓內外に達する。

嚴氏の垈と住家

嚴基應氏の垈（圖版第五•第六）は六槐亭と小徑を隔て丶相對してゐる小高い南向の日當りのよい處で廣さ八十坪、周圍は石墻を回らし六槐の二本は其の西南隅に繁つていたく其の風格を高めてゐる。住家の間取（圖版第五）も長洞里のに比べると複雜で、客に接する舍廊は大小に分れてゐるばかりでなく、農村としては見られないほど清潔であつた。庫間や虛間も多く、更に春間の備があり、畜類も牛馬共に飼養せられてゐる。又垈の一隅に果園もある。

第三　江原道春川郡西下面錦山里

山村の特色

錦山里は、春川邑內と昭陽江を隔てゝ相對してゐる山村（第七圖版）で、調査した葛屯里は其の內の小部落である。錦山里の地目別面積が總計八十八町歩のうち、田は十町畓は九町で二割一分に當つてゐるのに、山林が五十五町歩で其の六割二分を占めてゐる。山林五十五町歩中四十五町歩が私有、十町歩が部落の共有即ち契の所有となつてゐる。錦山里にある契は里中契・禁松契・喪布契・婚用契の四種であるが、山林を保護する禁松契の元金高が最も多い事や、牛の飼養戶數が部落六十七戶中四十戶あるのに徵しても、山林が部落の生活と密接の交渉ある事が分る。其の燃料の大部が山草・松葉・松枝であり、畓の肥料に山草を利用し得るのも亦山林の賜である。

農家の生活

營農上から見ると、六十七戶中、自作兼小作三十戶・小作三十二戶で、地主は五戶あるが自作は一戶もない。中農の耕地は、畓は四反に田は一町二反で、外に山林一町歩を經營する。春川邑市が近いから、中農以下は收穫後直ちに米を市場に賣出し、其の金で大豆・小豆・粟其の他雜穀を買つて主に粥食する。地主・中農及小農の食物を季節別に調べて見ると左の如くで、小農が冬季櫟實を副食物とするのも山林から得たものである。山林の樹種は主に赤松で、櫟之に次ぐ。

		自一月至五月	六月	自七月至八月	九月	自十月至十二月
地主	主	米	米	米	米	米
	副	蔬菜・牛肉・卵等	鷄等	同	同	同

中農	主	米・粟	麥	麥	雜穀	米・粟
	副	蔬菜	同	同	同	同
細農	主	粟	麥	麥	雜穀	米・粟
	副	蔬菜・野草	同	同	同	橡實

市場に賣出す主なものは白米・薪木・明紬・生牛・麻鞋・草鞋・莞蓆・繩で、金額からいへば第一は生牛で、薪木・白米之に次ぐ。しかし春川邑内が近いから鷄や鷄卵なども賣出すものが多い。部落民で漢文で手紙を書くもの男三十人國語を解するもの十五人新聞雜誌を讀むものあるのも、春川邑内が近い爲であらう。

民家

余の此の部落で調査した民家圖版第八は、自作兼小作で主人夫妻は長男次男夫婦と農業に從事し、米は十石、雜穀は大麥四石・小麥一石・粟三石・大豆三石を收獲する。蔬菜では秋から春にかけて農民唯一の副食物たる漬物の原料たる大根と白菜で養蠶を副業としてゐる。喂養間には牛一頭鷄舍には十羽を飼つてゐた。南向の住家の間取は長洞里で見た中農の住家と異らなかつた。たゞ廚の入口に松木を燈火とする設備のあつたのと、垈の境界に悉く松枝を用ゐたなど如何にも山村らしい感じがした。又田の中に實生の大きな桑の木が立ち、部落の背後に五葉松の茂れるなど如何にも山村らしかつた。

第四　咸鏡南道咸興郡雲田面宮西里

特權のあつた部落

宮西里は（圖版第一〇）は、李太祖を祀つた本宮の北西に連つた部落で、咸南輕便鐵道の本宮驛から一町許の所にある。もと本宮に隷屬した宮吏・使令・轎軍等が、住つてゐで、掃除・除草・掃雪・夜警等の賦役に服するといふので、免租せらるゝばかりでなく、宮吏や使令は附近河海の漁業權をも特許せられ、其の生活は一般農民に比べると極めて安易であつた。犯罪も宮西里のものは餘程烈しくないと檢擧しなかつたから、來り住する者多く、當時は百五十戶に近かつた。かくて部落は爲に榮え、賭博が盛んに行はれ風紀甚た宜しくなかつた。然るに併合後國有地に編入せられ、特別の保護がなくなつたから、三十四戶を減じ、殘つてゐる七十四戶も半は國有地の小作人が多い。從つて富の程度も雲田面三十六里中で中以下である。



本宮後方舊垈跡

低い稅額

宮西里戶別割稅額比較表

圓	戶	圓	戶	圓	戶
六、〇〇〇	一	、七〇〇	二三	、二一〇	二
三、〇〇〇	五	、五六〇	六	、一七〇	一
一、四〇〇	一〇	、四二〇	四	、一四〇	一
一、〇〇〇	一五	、二八〇	五	、〇一〇	一

もと宮吏をしておつた自作農の住家（圖版第一一・第一二）を調査したが、家構として最も注意すべきは、

南鮮と異つた兩通の間取

所謂兩通で、舍廊と内房とが二重になつてゐる外、厨に續いて鼎只間（釜所）の溫突一間ある事で、家族の多い家庭では、此の鼎只間にも起臥する事にしてゐる。かゝる間取は日本海岸では江原道の江陵郡附近を其の南限とするといはれてゐるが、之を日本民家の間取と共通關係があるといふ人もある。此の家では南向の住家に舍廊ある外に、門に近く外舍廊を設けてあり、宅地内には果園や菜田も多く果樹には林檎や葡萄があつた。殊に厠は宅地の離れた片隅に置き、外の民家よりは著しく掃除も行屆き 殊に厨などは驚くほど奇麗であつたので、調査後案内者に質したら、基督敎の信者で且此の部落内に小さな敎會を建て、其の牧師をしておると聞いて成程と首肯いた。普通の民家が兩通の舍廊に當る處が二間になつてるのに、此の家では其の間に壁がなく一室になつてるなども、咸興から時々訪れる外國宣敎師を迎へる便宜の爲ではあるまいか。

基督敎の生活に及ぼした影響

信徒共有の敎會をのぞいたが、四方に生垣をめぐらした朝鮮風の建物で、南東に向つた間口八間半奥行三間の溫突裝置である。八戸の信者は此處で毎週日曜と水曜に牧師から說敎を聞く事にしてゐる。

第五　咸鏡南道咸興郡州北面富民里

咸鏡南道で水稲の栽培や藁細工の成績が良いので道の模範里となつてるといふ富民里（圖版第一三・第一四・第一五・第一六）は、東に山を負ひ西は城川江の灌漑する咸興平野に面してゐる。從つて部落の耕地は田畓相半し、なほ廣大な山林を經營する狀態である。

部落の構成

富民里は戸數百十二戸の大部落で、其の祖先は約五百年前、黄海道から移住して來た任氏の開村した所で、開拓當時に飲料水に用ゐた井戸は今猶山麓（圖版第六六）に殘つてをり、其の下が部落で草分の垈（圖版第一四の上）だと傳へられてゐる。部落の北東に當る二つの小丘（圖版第六六）は、實に眺望のよい處で、任氏の墓地數基其の上に點在し其の背後に聳えてゐる數幹の老松は一層其の風致を添へてゐる。

余は時間の都合上、富民里の舊き部分二十二戸（圖版第六六）に就いて調査したが、地目別面積は畓二十三町歩・田二十二町歩・山林百二十町歩に亘り、農家一戸當の經營反別は畓田共に一町と山林五町餘に當つてゐる。其の營農狀態は自作農四戸・自作兼小作八戸・小作十戸で、模範里丈に耕種の方法の如き著しく進んで來た。卽ち畓はもと春耕だつたのが秋耕が增すようになり、田は平畦だつたのが、間作をしたり、濕氣を避くる爲に高畦に改むるようになつた。又もと施肥の考が薄がつたが、近年は糞土・糞灰・堆肥を製造し、なほ大豆粕をも用ゐるようになつた。收穫に際しても晩刈をしては過熟したり霜害の恐があるので早刈をするようになつた。

模範里としての實績

之を富の上から見ると、本里は州北面二十五里の中第一位に居り、契としては貯金契や青年の禁酒を目的とする禁酒會がある。敎化の程度は高いといふ事が出來ないが普通である。調査

した二十二戸のうち男には漢文(十四人)で手紙を書き得るものはあるが女には一人もなく、新聞や雜誌を讀んでるのと國語を解するものとは一人もない。

複雜な間取

調査した中農任晦華の家族(第一六圖版)は男五人女八人で、老每の外四夫婦と一女二孫であるから住家の間取も普通のより複雜で兩通の後方に更に溫突一間がある。又住家の左方には北から南に長く續いた建物があるが、一番北の庫間には穀物や雨具、其の次には嫁さん達の簞笥類、次には穀物、次には簞笥や本箱が入つてあつた。工夫室卽ち勉强室の壁に、大きくかいた義信の二字や舊い世界全圖などが貼付けられてあつた。厨の一隅の牛養間の入口が厨から續いてるのは、寒氣の强い北鮮では保溫の必要上から來るもので、我が東北地方の廐の位置に類してゐる。

第六　平安北道宣川郡深川面仁豆洞

部落の構成

仁豆洞（第一七圖版）は宣川邑內から北西約四里にある單純な農村で、淸江の下流右岸にある丘陵の麓に集團してゐる。之を營農狀態から見ると、地主二戶・自作農四戶・自作三戶・小作二十四戶だから、割合に整つた部落である。余の調査した所は、其の內の仁谷里（第一八・第六七圖版）で、南向の丘陵の麓にある。



田舍の橋（宣川から古軍營洞へ）

仁豆洞の戶數は總べて三十三戶であるが、其の大部二十五戶は金氏で慶尚北道安東から十數代前に移住して來た言傳があり、其の舊垈は京城から義州に通ずる道路（第一七圖版）から約十町ばかりの所にあり、部落の中央の井戶は當時から用ゐたものだといはれてゐる。部落から十町ばかり離れてゐる古軍營洞は面事務所々在地でもあり、此處には陰曆の二七に市が開かるゝので、生產した農作物殊に大豆・玉蜀黍・玄米等を賣出し市場から日用品を買取る事を常としてゐる。從つて金融も古軍營洞市場で行はれ、大概日步十錢又は七錢の率である。

田氏の住家

仁谷里は小作農の多い所たが、調査した地主金氏は部落中の地主で、其の垈（第六七圖版調査家屋）は他の垈から見ると、屋後から傾斜した排水のよい位置にある。住家（第一九圖版）の母家は、內房上下二間と越房とで、廚の位置が內房にも越房にも逆暖し得るような家構で、非常に便利である。調査當時は氣付かなかつたが、昨秋渡鮮した

際に京城淑德女學校に奉職されてる朝鮮の女敎師に朝鮮の住家に就いて改良すべき點を質した際に、平壤の住家は京城のに反して厨が溫突二間の中間に位し、送暖は勿論食物を溫突に運ぶにも最も便利な事を語られたのに思ひ合せ、かゝる間取は如何にも便利で他の地方でも採用すべきであると思つた。此の間取の分布地域は何處迄で、其の理由は何であるか。研究すべき事であると思ふ。二つの庫間が何れも長大な事も他で見ない處である。

第七　平安南道安州郡新安州面雲鶴里

部落の構成

雲鶴里（圖版第二一）は、安州邑内から西方一里許にある部落で、清州江を背後に控えてゐる香山峯の南麓の傾斜地（圖版第六八）に集團してゐる。



邑内の一例（安州古圖）

安州邑内は、道内でも屈指の都會だから相當の地主や商人があり、從つて其の附近の土地は邑内人の所有に歸してる處が多い。余の調査した所は雲鶴里の内の一小部落（圖版第六八）で、もと安州邑内に居つた大地主李乙夏氏四代の祖が、里中で一番舊い垈であり、住家も三百餘年も經つた建築だといはれてるのを購つて住つた所で、南向の赤松の林立繁つた丘陵の麓で住よい感じのする所である。李乙夏氏の垈の南方の窪地に集團してゐるのは、二三の同族を除いて殆んど其の小作人で十四戸もある。

李乙夏氏は百五十町歩を有する地主であるが、小作人に對しては特に施設する所もなく、里民に金錢を融通する時には利率は年二割乃至三割で、他部落民との間に別に差等がない。余の調査した李寅彰氏は、同氏の叔父で早稻田大學を卒へ今は道評議員をしてゐるが、數年前に此處（圖版第二二・第二三・第六八調査家屋）に分家し新築した。其の間取は從來の朝鮮家屋

李寅彰の住家

厨に近い軒下の醤甕

とあまり異つてゐないが、すべての配置(圖版第二二)に工夫の跡が明かに見られる。殊に味噌や醤油を入れた甕の二三を、醤甕㙜から移して厨の近くの軒下に移してある事や、豚舎を裏門の外に置いた事や宅地の内外に草花を植えたりする事は、他の民家に見ぬ處で、後園には林檎其の他の果樹や苺畑まで作つてあつた。來客に接する舎廊に入るべき抹樓(板張)に大門の外からも行かれるようになつてる事や、下人房を特に別構にしてあるなども、普通の家構と異つてゐる。來客に對して茶を出す事も朝鮮では見られぬ事である。

今李寅彰氏の所有地・垈及家族に關する數字と、此の部落標準農家(自作兼小作)の經營狀態を示せば左の如くである。

李寅彰氏
- 所有地目別面積
  - 田 約十五町歩
  - 畓 約十五町歩
  - 林野 約二町歩
- 垈地積
  - 敷地 一反歩
  - 桑園 四反歩
  - 菜田 二反歩
- 家族 七人
- 下人 三人

標準農家
- 畓 二町歩(乾畓小作)
- 田 三町畝
  - 二町歩小作
  - 一町歩自作

粟	一町五反歩	稗	一反二畝歩
大豆	五反歩	大麥	二反歩
小豆	二反歩	棉	二反歩
玉蜀黍	三畝歩	煙草	二十坪
蜀黍	三畝歩	蔬菜	二反一畝十歩

- 家族 七人

第八　黄海道海州郡席洞面蓮根里

部落の構成

蓮根里は海州邑內から北西三里許にあるが、調査した鎰石洞（圖版第二四・第六九）は其の內の小部落。地主で道評議員をしてゐる吳國東氏の一族と其の小作人のみのゐる所である。戶數十九のうち吳氏は十戶を占め、勢農上から見ると、地主五戶で自作兼小作は一戶、他の十三戶は小作である。

經濟狀態

此の附近の高山で且信仰の中心となつてゐる釼峯山（圖版第二四）山麓から、南に續いた丘陵を北西に負ふてゐる本洞（圖版第六九）は、畓よりも田多く、面積二十一町歩のうち、田六町六反・畓二町である。從つて農家一戶當の經營面積は、田は中農・小農何れも二町歩であるのに、畓は中農九反餘小農四反五畝位にしか當らない。しかし十町歩に亘つてる山林は、十三戶の小作人に冬閑柴賣の副業を與へてゐる。主要農作物は米・粟・麥・豆類で、副業には養蠶・藁細工・敷物製造・機織を營みつゝある。山から出る栗や宅地回りの棗・柿・桃などからの收入が相當にあるのは、海州邑內を控えてゐるからである。耕種の方法はまだ舊慣を脫しないが、數年前から今まで肥料を施した事のない畓に豆粕や柏の嫩葉などを入るゝようになつた。

かく部落民は、主業の外に副業其の他の收入もあるから、日常の生計に困難を感ずる者が少なく、全く自足自給の農村で、契には尙牛契・勤儉貯蓄契及農契がある。勞力は平時は互助的に交換してゐるが、農繁期の臨時雇は男は一日七十錢乃至八十錢女は三十錢位で雇ひ、農閑期には男は四十錢女は三十錢である。休日は陰曆十二月二十九日から一月十五日までゝ、外に二月の寒食節・五月の端午・八月の秋夕節などである。

呉氏の住家

此の部落では呉國東氏の住家（第二五圖版）と其の一族呉氏（第二七圖版）の住家とを調査したが、此の二家（第六九圖版）は周圍の小さな小作農の住家を前にして、城郭のやうに西に丘陵を負ふて建られてある。殊に呉國東氏の住家は、前に述べた道立里の嚴氏の住家などに比し、更に複雑で舍廊も二ヶ所あり婦人の客に對して別に客室の設あり、祖先を祀つてある祀堂と其の祭器室も整つてゐる。庫間や廬間の數も多く下人房も廣い。大門に對し道を隔てゝ南に庭園もあり、後丘に上ると、遙に鈒峯山（第二六圖版）も望まれる形勝の位置を占めてゐる。

呉氏の此處に居を卜したのは呉國東氏の祖父呉國璉氏の時で、一家孝悌の風敦きは光武年間に賜はつた孝子の旌門（第二六圖版）で知らるゝばかりでなく、呉國東氏に接しても溫厚の長者で春風に接するの思があつた。氏の家族は、氏の父母・氏夫妻の外長男・二男・三男何れも妻帶同居せられ、四男・五男・長女と孫六人を合せ十九人の大家族で、外に下男一人下女二人を使つておられる。

第九　京畿道開城郡中西面麗陵里

麗陵里（圖版第二八）は、開城邑内から西方約一里に位し、開城の北に峙つてゐる松嶽山の麓に續いた丘陵地にある。調査した部落は、同里中の太祖陵洞で、其處に有名な高麗の太祖顯陵（圖版第二九上）があるから生じた洞名である。部落（圖版第七〇）は陵の西方南向の日當よい所にあるが、後丘にある

古き部落

古槐（圖版第二九下右端）三本は、部落の入口即ち築洞の一本と、太祖顯陵にあるものの二本と共に、部落構成の舊さを物語つてゐる。

　太祖陵洞は、太祖の後裔と稱せられる王基祚及其の一族の部落で、王基祚の住家（圖版第七〇調査家屋）は地形上最も形勝の位置にあり、其の南方にどんな旱魃にも涸渇しない水量の豐かな古き井戸がある。部落の戸數三十七の中、近年入村した鄭張各一戸を除くと、悉く同族の王姓である。從

同姓の影響

つて他部落では婦人は五十才以上位でないと極近親の人の外は、朝夕會つても話もしないのに、本洞では比較的其の間が親しい。宗契は祖宗の祭祀と一族の救護を目的としてゐるが、其の基本金は四百圓もあり、貧村としてはよく備はつてゐるのも同姓のみの爲であらう。なほ葬契は三組と外に婚契がある。

　之を營農上から見ると、自作三戸・自作兼小作十九戸・小作十五戸で、勞力は概ね自足であるが、田畓の耕鋤や春播や秋の收穫には相互勞力の交換をやる。殊に北方の七陵洞と互助する事の多いのは王姓が多い關係からである。附近に國有林野が多いので農閑期には薪炭の仲買をやつて口錢を生活費の補ひにするものもあるが、多くて一ヶ年の收入は二十圓内外に過ぎない。な

ほ人蔘を栽培する蔘圃の經營は、開城邑内人の資本を借り、三四戸宛共同して從事するもの約二十戸ある　さなきだに田の少ない此の部落は爲に一層其の欠乏を感じ、小作人などは半里も離れてゐる社稷洞の耕地で其の補ひをつけてゐる。生活の程度は概して低く、負債のないものは三十七戸中五戸丈で、多きは百圓内外少なきは十圓乃至二十圓、其の利率は三分乃至三分五厘である。

王氏の住家

余は王壽祚氏を訪れ調査の目的を語つて、其の住家（圖版第三一・第三二）を限なく見る事を得たばかりでなく、其の家族一同を撮影する事さへ出來た。氏の住家は溫突に内房と越房・下房合せて四間で、此の四間の居室の外、農業的設備の諸室は庭を圍んで並んでゐる。庭は割合に狹いが農作物の調製などは大門外の空地を利用するらしい。漬物を入れておく沈菜庫や穀物を入れておく庫間は勿論、喂養間や豚欄の排泄物の利用など中々よく整理されてある。後丘醬甕坮の右側に鷄頭花を植えてるなども珍らしい。しかし後に開城邑内を踏査したら、他の邑内に比して花卉の栽植の多い事が著しく目についたが、或は古都であつた事が其の原因ではなからうか。前にも述べたように、余は各道の部落調査に赴くに先ち、部落の概相を明にすべく此の部落に就いて種々取調べたが、衣食住に關する大要を玆に摘記する。

衣食住の大要

衣　服　其の材料は、此の部落では自家織上げの木綿を用ゐる家十戸もあるが、多くは内地から來る金巾を用ゐる。幼少の際は赤色又は青色で、年をとるに從つて色を薄くし、三十歳以上になると男女を通じて白色のものにする。最近十數年來、冬季の綿入に限り黑染の衣服を着るやうになつた。しかし四季を通じて男女共に白色の衣服を着るから、どんな質

朴な農村の人でも、一冬の間に少なくとも三四回は洗濯しなければならない。だから婦人の能率の大部分は、年中洗濯に消費される。何處でも井戸の周圍に平たい石を並べてあるのは洗濯用に充つる爲である。

食　物　主食物は粟が最も多く麥類之に次ぐ。之を一人一日の食量にすると、米は六合麥は一升なら粟は五合だから、米や豆類を賣つて粟を買入るゝものが多い。副食物では漬物・味噌・唐辛味噌・醤油であるが、殊に萠(豆萠)・豆腐・明太魚・香辛料を珍重する。王基祚氏の家で一年間に用ゐる唐辛は約一石五斗で、二斗五升を粉にして唐辛味噌に入るゝ外は、年中副食物の調理に用ゐる。食事の時間は、冬季は一日二食の事もあるが、大概は三食で、農繁期には四食する。食事には主人の次は子女、それから婦人といふ順で、家族團欒して會食する事は殆んどない。ある若い教養ある朝鮮の實業家は、朝鮮の家庭生活の改善の第一歩は、此の家族が別々に食事する惡風を改むる事から着手しなければならぬといつてゐた。

住　家　住家の間取が生活の程度によつて著しく差異ある事は、各部落の圖版に掲げた住家平面圖と其の説明に述べた如くであるが、何れの住家でも其の基礎となる溫突の新築は、此の部落で調べた處では、普通の農家としては、溫突一間の新築には土石は自辨するが、外に材木(十圓)と藁(一圓五十錢)と勞力延人數で七人を要する。此の部落で最も貧しい小作農の住家は、溫突二間と厨丈で、釜は一、甕は三あるばかり。自作兼小作の或住家は溫突三間と庫間一間を有し、外に喂養間と豚柵があり、釜は三、甕は八あつた。

第一〇　全羅北道金堤郡金溝面上新里

南に小丘を負ひ北は院坪川に注ぐ溪流を前にし、其の地勢極めて部落の構成に適してゐる上新里（第二三圖版）は、もと邑內だつた金溝里のすぐ近くで、全州からは南西約四里、井邑に赴く一等道路に沿ふた交通極めて便利な處にある。

部落の構成

張氏が此處に居住する前の住民に就いては確とした言傳はないが、其の東部に居住する特殊部落は、恐らくは舊き部落であらう。張氏の居住に就いては、舊い方は約二百年前に慶尙北道漆谷郡仁同から上下里に、新しい方はそれから百年も後れて下下里に來たといはれてゐる。舊新張氏の間の親交には全く差等なく、一族よく團結し、祖先の祭祀・長幼の序次・同族間の親睦等今猶古來の美風を保持し、富力に於ても全北を通じて類少ない部落といはれてゐる。

經濟狀態

同族間の契の如きも毎年一定の契又は錢を醵出して、其の契員中に葬祭ある時其の利子を支拂ふ爲親契（契金六百圓）を始め、畓田及林野を買入れ、之を他に貸付けて得た小作料を順次に祭料として渡す門中契や、共同作業で得た勞銀を契員中に貸附し其の利子で娯樂をなす契が備はつてゐる。又小作人の貧困者の不幸の際には、張氏に於て一切其の費用を負擔する事になつており、金融もすべて其の利子でするから他洞里から借入るものがない。小作料の如きも他部落のものよりは一割乃至低減して契約する事になつてゐる。

張氏の統制力

今部落を構成する約二百戶の姓別を見ると、張氏は七十戶で、之に次いで李・金・朴・崔など三十に近い姓はあるけれど、何れも其の女婿か下人であるから、此の部落は全く張氏の部落と見

て差支がない。分家の如きすべて里内を出でないから其の勢力も分散しない。張氏一族の中心人物は張榮國氏で、數年前までは殆んど其の人の意見で部落は左右せられてゐた。氏は新政を喜ばず、新教育を嫌ひ、其の一族の人で東京又は京城に遊學する事を許可しないので、逃走して途中で捕はれた人は一二ではなかつた。從つて今は一ヶ處よりない書堂の如きも、十年前までは八ヶ所もあつた。余は試に金溝公立普通學校長に、此の部落の就學年齡に達した兒童數と就學兒童數とを質したら、

就學年齡兒童數	男	七一五名
	女	六五一名
就學兒童數	男	二一名
	女	二名

と聞いて驚いた。數年前までは警察官の勸誘によつて、已むなく半日或は一二日の通學を見るに過ぎなかつた。しかし二三年來靑年及壯年の有志者は、新教育に對して非常な理解を持つようになつて來た。卽ち大正十年普通學校增築工事費寄附金募集七千圓を、面内千六百名中の中流以上に勸誘した處、上新里からは已に全額に近い六千九百八十四圓の申込を受くるに至つたばかりでなく、翌十一年四月には、新に男子三十餘名女子十餘名の就學者を出さうと申込むようになつたのは、著しい變化といはねばならぬ。

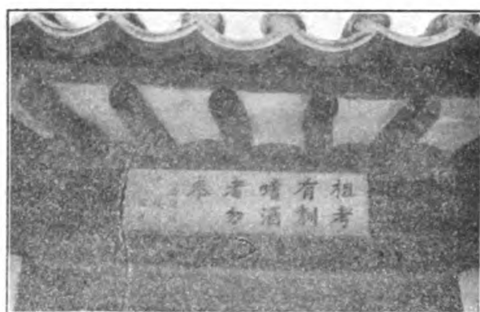
新教育に對する思想の變化

上新里に限らず此の如き部落は、朝鮮の地方文化の核心といふべきもので、始めは新教育に反對しても、一旦其の必要を感じて來れば其の要求は熾烈である。余を案内された學務委員張氏の如きは、校長に對して來年四月には長男が學齡になるが、もし張榮國氏が入學を肯かながつたら、死を以て迫るといつておられたさうな。校長は頻りに新築すべき學校を此の部落に移

して新しい教化の中心たらしめたいと力んでゐたが、道廳の意向では六ヶしいようだつた。

張氏の住家

余は先づ內地人の公立普通學校長に伴はれ、學務委員たる張氏に面會し、其の諒解を得て同氏令兄の住家（圖版第三六・第三七）を見る事を得たが、大門を入つて外庭の廣さと間取の多きは勿論其の舍廊房及井戸（圖版第三七下）の新式なるに感服した。外庭に露積の多き、內庭に沈柒間の備の夥しきなど、家構の規模の大きなのと相俟つて豐かな地方富農の生活を現はしてゐる。



祠堂の額

張榮國氏の住家（圖版第三四・第三五）は更らに複雜な家構であつたが、幸に同氏が京城に赴いた不在中だつたので、同氏の若い甥に當る理解ある人によつて觀且作圖する事を得たのは倖であつた。其の大門の扉に「一闔一闢隨時之義」「有出有入履人之道」と書したり、榮國氏の客殿（圖版第三五）には「悠然見南山」の額を始め、六つの珠聯中には「重倫彛」「尙節儉」の句があり、其の一には「東坡一生是非間士」とあつた。奥の祠堂にも珠聯をさげ、又榮國承として「祖考有訓嗜酒者勿參」と額してあつた。

過渡期の部落

張榮國氏と若き其の一族の思想上の爭は單に就學丈の問題で解決するであらうか。儒教の盛んであつた南鮮には、今まで堅實だつた部落も此の如き過渡期にある所が多い。是等を如何に導くべきか「は今日朝鮮地方文化の開發に於て重要な事である。

て差支がない。分家の如きすべて里内を出でないから其の勢力も分散しない。張氏一族の中心人物は張榮國氏で、數年前までは殆んど其の人の意見で部落は左右せられてゐた。氏は新政を喜ばず、新敎育を嫌ひ、其の一族の人で東京又は京城に遊學する事を許可しないので、逃走して途中で捕はれた人は一二ではなかつた。從つて今は一ヶ處よりない書堂の如きも、十年前までは八ヶ所もあつた。余は試に金溝公立普通學校長に、此の部落の就學年齡に達した兒童數と就學兒童數とを質したら、

就學年齡兒童數	男	七一五名
	女	六五一名
就學兒童數	男	二一名
	女	二名

と聞いて驚いた。數年前までは警察官の勸誘によつて、已むなく半日或は一二日の通學を見るに過ぎなかつた。しかし二三年來靑年及壯年の有志者は、新敎育に對して非常な理解を持つようになつて來た。卽ち大正十年普通學校增築工事費寄附金募集七千圓を、面內千六百名中の中流以上に勸誘した處、上新里からは已に全額に近い六千九百八十四圓の申込を受くるに至つたばかりでなく、翌十一年四月には、新に男子三十餘名女子十餘名の就學者を出さうと申込むようになつたのは、著しい變化といはねばならぬ。

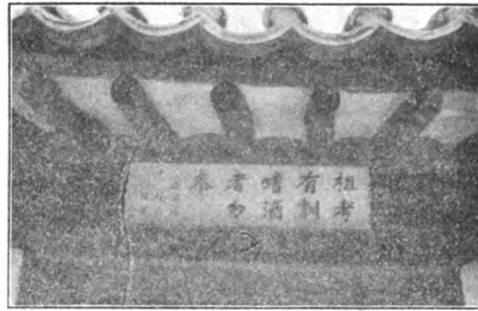
新敎育に對する思想の變化

上新里に限らず此の如き部落は、朝鮮の地方文化の核心といふべきもので、始めは新敎育に反對しても、一旦其の必要を感じて來れば其の要求は熾烈である。余を案內された學務委員張氏の如きは、校長に對して來年四月には長男が學齡になるが、もし張榮國氏が入學を肯かなかつたら、死を以て迫るといつておられたさうな。校長は頻りに新築すべき學校を此の部落に移

して新しい敎化の中心たらしめたいと力んでゐたが、道廳の意向では六ヶしいようだつた。

張氏の住家

余は先づ內地人の公立普通學校長に伴はれ、學務委員たる張氏に面會し、其の諒解を得て同氏令兄の住家（圖版第三六・第三七）を見る事を得たが、大門を入つて外庭の廣さと間取の多きは勿論其の舍廊房及井戸（圖版第三七下）の新式なるに感服した。外庭に露積の多き、內庭に沈菜間の備の夥しきなど、家構の規模の大きなのと相俟つて豐かな地方富農の生活を現はしてゐる。



祀堂の額

張榮國氏の住家（圖版第三四・第三五）は更らに複雜な家構であつたが、幸に同氏が京城に赴いた不在中だつたので、同氏の若い甥に當る理解ある人によつて觀且作圖する事を得たのは倖であつた。其の大門の扉に「一闔一闢隨時之義」「有出有入履人之道」と書したり、榮國氏の客殿（圖版第三五）には「悠然見南山」の額を始め、六つの珠聯中には「重倫彝」「尙節儉」の句があり、其の一には「東坡一生是非間士」とあつた。奥の祀堂にも珠聯をさげ、又榮國承として「祖考有訓嗜酒者勿參」と額してあつた。

過渡期の部落

張榮國氏と若き其の一族の思想上の爭は單に就學丈の問題で解決するであらうか。儒敎の盛んであつた南鮮には、今まで堅實だつた部落も此の如き過渡期にある所が多い。是等を如何に導くべきかは今日朝鮮地方文化の開發に於て重要な事である。

第一一 忠清南道公州郡新上面維鳩里

多姓族の割據

維鳩里（圖版第三九・第七二）は、東に丘陵を負ひ、西は維鳩川に臨んでゐる狹い平地に出來た部落で戸數百六を算する。此の部落は同姓族の占據してゐる上新里に反して多姓族割據し、其の中戸數の多きは李姓三十二戸・金姓三十一戸・朴姓十一戸・韓姓五戸・吳姓五戸で、李朝時代に兩班として用られたのは李姓最も多く、韓・吳二姓之に次いでゐる。かく由緣ある姓が多いから、それが一致してゆく事は中々困難で、契の如きも戸別稅及橋梁費に充つる爲の戸稅契（契員六十名、契元金百圓內外）あるに過ぎない。部落內で吳智泳氏は最も大きな地主で、籾三千石の年收あり且多くの林野を有してゐるが、其の意見は必ずしも行はれない。

營農狀態

部落の營農狀態は、地主二十戸・自作十五戸・自作兼小作二十戸・小作五十一戸。地勢の關係上耕地が狹く、畓十町歩・田十町歩以內に過ぎないから、耕地の大部は里外に求めなければならない。即ち里內にて經營するものは自作三戸・自作兼小作十五戸・小作十五戸である。副業には養蠶・養鷄・養豚・木綿・麻・蓆の織出等あるが、木綿・麻及蓆は悉く自家用で他は維鳩川對岸の維鳩市（陰曆三八開市）で賣出す事が多い。試に自作兼小作農の經營狀態を見ると、所有反別は畓一町歩・田五反歩・山林三反歩で、外に畓二反歩・田一反歩を小作してゐる。畓の一分乾燥良好な處（二反歩）には、稻刈取後大麥を播き、外に紫雲英二反歩を播く。田作物の主なものは大豆・大麥・小麥で小豆・蕎麥之に次ぎ、胡麻や荏は大小豆と混作する。又養鷄（春蠶繭八斗・夏蠶繭二斗）を副業とする。

部落民の住家に就いて見ると、瓦葺は四戸に過ぎないが、家構の京城風なのは三十戸に上り

衣食を始め衛生上の注意なども附近の部落とは著しく異つてゐる。井戸の數(圖版第七二)の如きも、河岸にありながら他部落に比して著しく多い。京城及平壤から移住して來たものを調べて見ると、李姓・金姓・趙姓等であつて京城に往復してる人の數も著しい。從つて敎化の程度は高く、漢文(男二十五人 女二人)及諺文(男七十八人 女三十人)にて手紙を書き得るものも國語を解する者(男三十人 女一人)も相當に多く、青年の新敎育を受くる事に對しても、之を喜ぶ風あるは、上新里に比して著しい差異である。

敎化の程度

韓氏の住家

余の調査した韓彰洙氏は、家系も正しく且部落中三位の地主で、自から田六町歩・畓十二町歩・山林二反歩を經營しつゝあつた。家族は男三人・女二人で、ほかに雇人は男女各々一名。其の住家(圖版第四〇・第四一)及宅地はよく整つてゐて、工夫室と內房とは廣い厨を挾み內房には洞房の設あり、內房から廣い大廳を隔てゝ越房がある。余の調査した際には韓氏の夫人は婢と共に漬物の準備に忙しいのを見た。大門を入ると外庭を隔てゝの廣い舍廊には、繞らすに退軒(椽側)と抹樓(板張)を以てし、室內には廬壁藏(押入)の設もある。外庭及後庭には樹木を植えてある外、一隅に躑躅などを植えた花壇もある。

第一二　慶尚北道安東郡豐南面河回洞

部落の構成

河回洞は、「河回の柳氏」として全鮮に名高い兩班柳氏の占據する所で、其の中核ともいふべき部落は、洛東江中流左岸の冲積地に、百三十六戸の大集團（圖版第四二・第七一）をなしてゐる。此の部落の四周は、その北東に峙つてる花山を始め殆んど山で繞らされてゐる。花山では毎年陰曆の一月十五日に洞神を祭る事になつてるが、

花山と芙蓉抬

部落の北方洛東江を挾んで相對してゐる芙蓉抬は、趣のある小松の茂つてる岩山で、其の頂は眺望實によろしく里民行樂の場所となつて居り、洛東江の流や之に臨んでゐる河回洞は、一目に見下す事が出來る。陽春山躑躅の咲く頃には、平常外出しないで内房にのみ閉籠つてゐる柳氏の婦人までも、日を期し相集ひて部落から洛東江を渡つて、此の山で午後から夜にかけ婦人のみの燕遊を試み、夜になると、部落から山に張つた綱に提燈を吊して點燈などして樂むといふ。此の山は洛東江に臨んで十數丈の斷崖をなし、之に沿ふて流るゝ江は深潭藍を流す淵をなし、大きな鯉が其處からの名産となつてゐる。

柳氏の二大宗家

芙蓉抬の崖下には江に臨んで、古雅な別墅遠志精舍と謙庵精舍（圖版第四三）とがある。共に柳氏直系の二大宗家で、前者は弟西崖、後者は兄謙庵の築く所である。兄の謙庵先生（柳雲龍）は、當時通政牧使に進み、弟の西崖（柳成龍）先生は、壬辰の役に際し領議政（總理大臣）であつた。其の著懲毖錄は人も知る如く、戰苦の實歷を手記した有名な著述である。此の兩家の子孫及一族で判書（大臣）や郡守になつたものが多く、難治と稱せられた地方でも、柳氏の一族が郡守として赴任すると、忽ち事なきを得たと傳へられてゐる。

柳雲龍の世系

節─敦升─伯─蘭玉─葆─從惠─洪─治─子溫─公綽─仲郢─雲龍(謙庵)─株─元直─世哲─後昌─聖臣─
泳─復春─翼祚─宗睦─道曾─楨─命佑─時萬─漢俊

下人の苦役

郷里に於ける柳氏の勢力は勿論、附近地方の常民を威服するばかりか、家には多くの下人を使役して代々勞役に服せしめ、此の苦役より脱れんと逃亡を企つるものがあると、直ちに各地の監司(觀察使)や郡守に照會して之を取押へて引戻すから子々孫々其の苦しい境涯を免るゝ事が出に來ず最近日韓併合の時に至つた。今日では一の使用人たる資格にはなつたが、其の實際の境遇は以前とあまりかはつて居らぬ。卽ち小作料の外には衣服代をやる位で給料はない。其の子



服喪葛服の柳承佑氏と其の二弟



壯大な煙筒(柳時一氏住家)

柳氏大地主所有地(地目別)

田八〇町	畓五〇町	垈一〇町	柳時一
田八一	畓五〇	垈一〇	柳承佑
田五〇	畓二〇	垈五	柳準榮
田四〇	畓三〇	垈五	柳承佑
田三〇	畓二五	垈五	柳東昰

弟は、新に出來た公立普通學校に通學する事も出來ず、大正九年十二月から青年會附屬の勞働夜學會といふので敎育されてゐる。

柳氏の經濟的社會的勢力と其の推移

柳氏の一族は百三十六戶の中百戶を算し、其の中柳雲龍の裔柳時萬氏の親族は三十八戶、柳成龍の裔柳承佑氏の親族は六十二戶である。之を營農狀態から見ると、地主七十五戶の中柳氏にあらざるものは、趙氏一戶にすぎない。卽ち柳氏の主なる分限者の所有地の概數を擧ぐると右表の如くである。

しかし時代の推移につれて、其の社會的勢力が漸く衰へてゆくように、經濟的實力も亦昔日の如くでなく、多額の負債に惱んでゐる人もあると聞いた。されば强大だつた古い社會階級から構成されてゐる此の部落が、今後如何に變革されてゆくかを究むる事は、かゝる部落の多い南朝鮮の生きた社會研究に重要なる調査事項である。元來農村構成の中樞要素たるべき自作農が、此の部落に於て僅かに四戶あるばかりなのに、地主の數は前に述べたように七十五戶であり、之が下人として使用せらるゝものが三十一戶（圖版第四七・第七一）の多きに上つてゐるのは極端な二つの社會階級の對立を鮮かに示してゐる。

古典的な部落に新しい芽

余は此の部落に入りて其の嚴しい瓦葺きの住家の多いことと、更に柳時萬氏を訪ひて結構の壯大な其の住家（圖版第四四・第四五・第四六）とを見、柳承佑氏を訪ひては西崖先生の遺著及遺墨を通覽し、又西崖先生の學問所だつた燕子樓などを見ては、普通の農村に比して著しく靜かな古典的雰圍氣の中に浸るように感じたけれども、いろ〳〵の新しい事象の芽しは、この古典的な部落にも時代の波の押寄せて來るのを證據立てゝゐる。

子弟の敎育

此の部落の中心たる柳氏は、かゝる家系と閱歷とを有して居る所から、儒敎は其の生活の中心思想であり、其の子弟敎養の規範でもあつた。明治四十四年柳時萬氏や柳承佑氏が同族中の有力者と相圖り、其の共有財産で私立學校を建てたのも、年來の所期に基いたものである。從つて總督府の新方針に基いた公立普通學校の建設を喜ばなかつた。然るに之に先んじて公立普通學校を新設し、其の敎育を受けた他部落常民の子弟の敎養が、然らざるものに比べて著しく差異ある事を覺るようになり、終に他部落からは六七年後れたが、大正八年此處にも公立普通學校の建設を見るに至つた。しかし私立學校創設當時から幸に國語を課してあつたから、其所で養成された河回洞多數の靑年は、今日國語を解し從つて其の思想も進んでゐる。



柳西崖先生の學問所燕子樓



柳西崖先生の遺墨

部落から半里許離れてゐる屛山洞にある屛山書院で西崖先生を祀る春秋の祭は、其の子孫及一族と弟子の一族とが相集つて行ふもので、非常に盛んであつたが、今や靑年は之を舊時の遺習の如く解し、喜んで之に參列するような心持がなく、それに年長者は斷髮した靑年が祭祀の

席に列する事を喜ばないので益々其の數を減じ、儀式は年々衰微に傾くばかりである。殊に、大正九年十二月に出來た柳氏の青年會は、洞を通じて約百名の會員を有し、其の年齡は二十歳以上三四十歳迄であるが、これが出來てから青年の勢力俄に頭を擡げ、上に頑張つて居つた年長者と其の位置を轉倒するようになつた。基督教が僅か一二年の間に、此の古典的な部落に相當の信者を得るようになつたのも、思想の激變を證據立てるものであらう。大正九年六月、朝鮮の婦人布教者がはじめて此所に來て二ヶ月ばかり布教したが、一人の信者も出來なかつた。しかし同じ年の十月に、朝鮮の布教者が男女四名熱心布教に力めた結果、今や信徒の數は四十名に近く、それが何れも青年會員及其の夫人で、教會さへ建設さるゝようになつた。男子の教育と思想とがこんなに變つて來たのに、女子の教育は依然として其の家門を出でない。即ち其の女兒は母の膝下で諺文を習ひ、裁縫一通りの外には、機織は絹布を織る程度までに仕込まるゝ。これ未婚の女子は房を出ないといふ舊習に囚はれてゐるためであるが、其の父母も當人も心中新教育を受けたい希望を有してゐるものが多い。

青年の擡頭　**基督教の傳播**　**婦人の教養**

　柳氏一族間に成立する契には三あつて、一は共有地の田畓二百斗落から出る小作料で毎年戸税に充用する外年末に其の内から幾分の金員を六十歳以上の老齡者に給與する門中契、二は同族六十三名が葬祭の際に互助する敦義契、三は貧困者を互助する誠意契である。同族外のものに對しては凶年の際に籾幾斗宛を給與する位で、小作料や小作人に對しての施設も、他部落に異つた事はない。

契の種類

　かゝる部落だから、一般に教養深く、漢文（男三百五十人）及諺文（男五百人 女百五十人）にて手紙を書き得るもの

教化の程度

國語を解するもの他部落に比して多く、諺文にて手紙を書き得る婦人の多い事も他部落で見なかつた事である。新聞雜誌を購讀するもの亦二十戸に近い。醫藥の如きも柳氏の主な家々では醫書によつて自から調合するから、部落には醫生もなければ藥屋もない。洛東江の水を飮めば病氣に罹らぬとか、河回洞は船の形に似てゐるから井戸を掘る事を忌んで、數年前までは一つの井戸もなかつたとか。數年來警察署の注意で漸く警察署・面事務所・學校の三ヶ所に井戸を掘るようになつた。

柳時萬氏の住家

調査した柳時萬氏は、前にも述べたように柳氏の直系で、其の家族は男女（男四人女四人）子女（男五人女一人）十五人、下人は男女子女を合せて十八人ある。其の住家（圖版第四四）は實に結構壯大で、大門の扉には「大哉乾元」「顧而坤亨」、厨門には「惟一德」「合萬狀」と書してある。大廳を始め各室はみな地上高く積んだ石垣の上に築かれ、夏向客室の大廳(板張)には養眞堂の額を、又一隅に河回十六景を漢文で綴つた額を揭げてある。其の右隣舍廊は柳時萬氏の客室兼居間で、書庫と寢房とが附屬してゐる。婦人にも居室（洞房）の外に客室（內房）があり夏向客室（大廳）もある。小供達の居間兼客室は小舍廊で、其の右隣の抹樓房は夏向の居間兼客室である。其の外下人房（二間）があり馬夫房がある。祀堂も二に分れ、宅地回と同じく煉瓦積の土塀を以て圍まれてゐる。此の家構は兩班なる特權階級が、當時經濟的及社會的に優越な位置を占めておつた事を雄辯に物語つてゐるが、今日何となく時代から置去りにされてゐるような感じがしてならなかつた。

第一三　忠淸北道忠州郡可金面樓岩里

部落の構成

樓岩里（圖版第四八）は、漢江左岸に峙つた眺望のよい丘陵（圖版第五〇上）にある部落で、今から約二百年前時の領議政（總理大臣）鄭浩（號丈岩）が老年職を辭し、此處の風光を賞して隱棲したのに創つた。氏の居宅及其の敷地は當時國王から下賜されたもので、學德共に高かつた氏の死後には、子弟相謀つて書院を建てゝ之を祀り、國家からも祭需費を補給され、六十年前大院君が全道の書院を撤廢するまでは續いてゐた。

部落の崩壞

鄭浩以後、其の一族で顯官に上つたものは判書（大臣）二人・參判（次官）三人・承旨（書記官長）三人・觀察使（道知事）三人・郡守五人で、當時社會的地位を占むると共に經濟的優越をも贏ち得た鄭氏は、樓岩里のみにても約五十戶之に隷屬する下人二十戶、合せて七十戶の部落であつた。然るに三十年來時運の變遷と共に、唯一生活の途であつた官職がなくなつたと共に、收賄等よりの副的收入もなく加ふるに二十八年前義兵の亂にて日本兵に燒拂はれ、有産者は虛榮的に慣れぬ商業に手を出して失敗し、隷屬者は其の羈絆を離るゝと共に家屋土地を轉賣し、爲に部落は崩壞し、今や其の戶數は二十五戶に減じ、之を營農狀態から見ると、地主二戶・自作兼小作二戶の外は小作で、中には三四反步を小作し主に雇傭によつて生活してゐるもの五戶もある。

經濟狀態

部落の耕地は畓十五町步・田四町步で、一戶の標準反別は畓約五反步、田約六反步である。畓は一割位に二毛作をするばかり、田の主な作物は麥・大豆・粟で、煙草は大正二年來始めて作つたものであるが、利益の多いのと郡當局の指導の効果で、今は米・麥に次ぐ重要作物となつた。耕

種の方法の如き舊慣を固守し、指導奬勵に對して疑惑を抱いておつたが、最近漸く除草を丁寧にし且其の回數を增すようになつた。耕作に必要な牛は自家に一頭宛有するのは僅かに三戸、借りてるのが二戸、之を交互に借りて耕耘する。副業とて目立つたものがなく、鷄を飼つて市場に賣出す位のもの、主に一里半の忠州市を利用する。從つて金融の如きも忠州金融組合から融通（不動產擔保貸附は日步四錢五厘、保證貸附は日步五錢、年賦償還は年一割五分、定期償還は日步四錢）するも、それには會員たるの條件と其の他の手續を要するから、依然として個人貸借（月三分乃至五分）が行はれる。契は戸税を收むる目的の戸布契（元金百圓）がある。

教化狀態

今は衰へたけれど、由緒のある部落丈に漢文で手紙をかき得るもの（男四）諺文で手紙を書き得る者（男二十人女八人）相當にあり、鄭氏の盛んな時に規律的訓練を受けてゐるから、風紀は比較的宜しい。

鄭氏と其の住家

余の調査した鄭尙源氏（圖版第五〇下）は、實父は判書に仲兄は觀察使になつた家で、鄭氏一族の一人者で籾三百石を年收する資產を有してゐる。數年前樓岩里から稍々川下に移住して、新しい住家（圖版第四九）の附近に三四戸の小作人を住はせてゐるが、家族は男女合せて十一人外に下人男女各一名を使つてゐる。其の住家は母家に於て從來の間取より著しく改善を施され、內房と越房の間に洞房を置いて連絡し、それからは女客室にも行き得るようにし、此の多くの溫突に厨を三ヶ處に置いて、各室に送暖し得るように工夫してある。金氏の住家（圖版第五一）は、樓岩里にあるもので母家の如き全く京城式で、屋根瓦及其の葺き工合もよく京城で見るものと同じである。京城から上下し得る漢江に沿うてる事が、鄭氏が此處に卜居した一つの原因であらう。

第一四　全羅南道靈巖郡靈巖面望湖里

部落の構成

望湖里（圖版第五二）は、靈巖邑內から北西數町にある部落で、百二十戶中約八十戶は集團し、全戶直接間接に櫛の製造に從事してゐる。其の大部は李姓で其の祖先碩儒李柱南は約三百年前京畿道から此の地に來り自ら望湖亭を建てゝ子弟を敎育し、藍田呂氏の鄕約によつて部落の規約をつくり、以て望湖里の基礎を築いたと傳へられてゐる。同姓族の部落丈に、契の如きも門中契は一門祖先の祭費に充つる爲、洞契は不幸・災難を救濟する爲に、昔から成立つてゐるばかりでなく、近年に至つて書堂契・喪葬契・婚姻契も出來た。

櫛の生産

櫛の製造は二百五十年前から傳來したといはれてゐるが、八十戶の集團部落に就いて、櫛の製作者を調べると、專業とするもの六十戶、兼業とするもの二十戶、其の生產高を營農上から分けて見ると、自作農の生產最も多く、耕作は概ね小作人に委ね、自から製作に從事する。其の原料たる竹材は、二年生の秋から三年生の秋までの間のものを最良とし、一年間に要するものは垈の周圍（圖版第五三・第七三）及其の他部落內の竹林（約五十町步）から供給される。其の生產工程は普通品は一日二十個を製作し得るも、上等品は其の半に過ぎない。調査した民家（圖版第五三）に就いて其の製作の狀況を見るに、南向の越房を其の作業室（圖版第五三・第五四）とし、之に用ゐる道具の數は大小三十（圖版第五四）を算し、中には靈巖邑內や木浦から買入るゝものもあるが、三分の二は自から製造使用する者で、此の小道具を巧に使用して日々二十個內外を製作する技工は、朝鮮人の手工業に對する可能性を證する。京城に於て某外國宣敎師の經營する工藝學校に就いて、余は工業技術者と

しての朝鮮人の能力を質した時に、多年其の教育に從事してゐた獨逸人は、能力は十分にあるが監督者なしに仕事をさする事は困難であるといつた。朝鮮人としても我々としても、此の點は大に研究すべき問題である。

櫛の需給

かくして生產さるゝ櫛は、殆んど全道に其の需要者を有し、統計の示す所によれば左の如くで、其の取引は主に陰曆五・十の日に開かるゝ靈巖邑內の東外市で行はれる。然るに仕向地に送らるべき櫛は、殆んど仲買人の手によつて行はれるので、市日に於ける價格も仲買人によつて

仕向地數量價格表（大正十年十二月末）

櫛

地名	數量	價格	地名	數量	價格
咸南	一六四、五〇〇個	一六、四五〇圓	慶北	二三八、〇〇〇個	二三、八〇〇圓
平北	一〇四、五〇〇	一〇、四五〇	全北	一八、〇〇〇	一、八〇〇
咸北	五四、四〇〇	五、四四〇	京畿	一七、四〇〇	一、七四〇
安東縣（間島）	四六、二〇〇	六、九三〇	黃海	一四七、〇〇〇	一四、七〇〇
平南	四一、二〇〇	四、一二〇	忠北	五、〇〇〇	五〇〇
忠南	二九、〇〇〇	二、九〇〇	慶南	五、〇〇〇	五〇〇
計	五二三、七〇〇個			五四、六八〇圓	

支配せられ、爲に生產者は生產費を除いての純益に均霑する事を得ない。殊に之に要する資本

の出處を調べて見ると、自己の資本によるものは僅に二十五戸で、他は借財（利率市日拂二分・月拂五分乃至六分）によつて經營し、多くは金貸業及仲買人から融通する。仲買人から借りたものは櫛の製品を以て返濟してもよい事になつてゐるから、仲買人と製作者とは殆んど資本主と勞働者の關係にある。最近此の弊を救ふ爲に產業組合が出來てるけれど、未だ十分の效果を收むる事が出來ない。

第一五　慶尙南道統營郡巨濟面竹林浦

部落の構成

竹林浦は、統營港から東方に位する巨濟島の西岸にある漁村で、戸數四十二戸ある。四十年前には四十戸あつたが、惡疫の流行や農作物不況の爲に、病死や餓死して半減するに至つた。其の後附近から移住して來て、今は漁業專業者十五戸と同從業者二十七戸の漁村となつた。此處でも每年一月に吉日を選み、巫女を頼んで洞內の平安を祈る事をやるが、漁村丈に二月一日から四日まで各戸で風神を祭る事を常とする。

漁法の改善

余が此の部落を調査して、普通の農村と著しく異つて感じたのは、農村が凡て守舊的なのに反して就業に要する漁具及漁船が殆んど改良せられてゐる事であつた。從來調査した農村に於て、州北面富民里の如き模範里は別とし、他では道や郡の指導奬勵に對し直ちに之に應ずるものゝ少ない事を見聞したが、此所では全然之と趣を異にしてゐる。是其の利害が目の前に現はれるからで、數年前までは隣りの東部面の山地から採收する葛皮や藤木皮、統營の市から購入する麻皮などで製した絲で作つた嚢のない網を陸上から曳揚げてゐたものだが、內地人の移住者が手繰網で漁獲するものを見習つてから、今では綿絲で作つた網に袋を附けて漁船から曳揚ぐるようになつた。外に延繩・地曳網などあるが、漁獲物は目張魚を主とし、大刀魚・石首魚など之に次ぐ。すべて女子が舟にて統營に賣りに行くのだが、統營の市日には殊に多く賣出すに出る。資金は統營の高利貸から借れる。農村と異つて飮酒を好むので、酒造家三戸もある。文化の程度の低い事は諺文を讀み得る男僅に七人だのでも分る。家構（圖版第五六）は何等農村と異らない。

第一六　忠淸南道論山郡豆磨面夫南里

鷄流山と新都內

論山郡の西境をなしてゐる鷄流山（圖版第五八・第五九）は、海拔五百七十四米で、突兀たる其の山容は人をして瞻仰せしむるばかりでなく、其の東麓一帶の地域所謂新都內の地は、夙に新都たるべき


侍天敎新傳敎所及敎主別莊

新都內に對する迷信

土地であるといふ讖語が昔から妄信されてゐるが、數年來全道を通じて此處に移住して來るものが少なくない。殊に最近宗敎及類似の團體が多く新都內に出來たので、大正八年以來荒唐無稽の妄說に迷はされて來り

侍天敎と其の信徒

住するもの更らに多くなつた。就中侍天敎の如きは黃海・平安・慶北の諸地方から移居した敎徒が、百六十四戶（大正十年三月現在）に上り爲に傳敎所が狹くなつたので、之を新築するの議が起り、大正九年五月から其の工を起した。卽ち上揭の如きもので、豫算額一萬圓と稱せられ、余の調査せし時は、建築の最中だつたが、信徒の男子は豆溪驛から重い建築用材の運搬に役し、女子は同驛から、瓦其の他背負ひ得るものゝ勞役に喜んで服したといふ。此の傳敎所新築の風說は、各地方に誇大に傳はつた結果、侍天敎徒の移住する者相繼ぎ殊に黃海道から來るものが多い。長淵・松禾・載寧・信川・安岳の各郡からは五百餘名の移住者があり、爲に家屋に不足を告げ、從來坪當五錢乃至十錢の土地か五十錢乃至一圓に暴騰するようになつたので、數年前黃海道から移住したものが、黃海道から貨車四輛の材木を搬入して新都內に

二十戸の家屋を新築して貸付をなす計畫である。かくして新部落は舊部落附近の田の中に出來つゝある。（圖版第六〇）

移住者及土着民の生活狀態

移住者の生活狀態を觀ると、新都内は山麓である地勢の關係上、耕地少なく地味もよくないので、移住して來たものは生活を支ふる丈の耕地を得る事が困難なばかりでなく、物價は公州・大田・論山等に比して穀類・薪炭等五割乃至三割の騰貴を來したので、來住の際に家財を賣却して得た金は高い生活費と巫女・卜術の爲に絞取せられ、歸鄕しようとしても旅費がない窮狀にあるものもある。しかし中にはどんなに窮しても迷信に固執する者が少なくはない。生活上の困苦は、啻に來住者ばかりではなく、從來の土着民も爲に生活の脅威を感じ、他地方に轉住しなければならない破目に陷り、爲に反感を抱くものが少くない。されば之に對する警察行政の苦心は實に一通りでない。

警察行政の苦心

新移住者の心理

余の調査した豆磨面夫南里内の新移住部落（圖版第五九下・第六一）では、黃海道のもの最も多く、百戸中五十九戸に達する。調べた小農（圖版第六二・第六三）大正九年三月に黃海道載寧郡から移住した小作農で、移住當時は家及垈を賣つて現金三百圓を所持して居つたが、今は全部食ひ盡して僅に三間の住家を有するばかり、よい土地柄と聞いて來たが、此の先どうするか考え中だといつてゐた。又中農（圖版第六二・第六三）は同じく黃海道松禾郡から大正十年二月に移住した自作農で、畓・田を全部賣つて二千圓を得、今は千三百圓で耕地及住家を得、畓六反五畝・田二反五畝歩を經營してゐる。移住の動機は北鮮が不穩だのと侍天敎の爲といつてゐたが、眞意はどういふものであらうか。

第三節　結　言

余は十六部落の特相を考察した結果、家族制度が部落の構成に密接な關係を有する朝鮮に於ては、統制ある同姓族部落によりて、固有の民俗は勿論、部落構成の經濟的及社會的要素を把握する事が出來るから、勸業上の模範里の如く同姓族部落の標式的なるものを選み、之を調査して其の資料を地方行政上の參考とする事は最も必要な事と信ずる。又余は純眞な地方農民が明察な理智のない結果、流言蜚語に動かさるゝ事の意想外な事を明にしたから、迷信の部落生活に及ぼす影響も殊に調査を要するものと思ふ。

余が一部落の調査に費した日數は、一日又は二日で、其の間圖面の作製と寫眞の撮影とを課程としたから、部落民の生活の基礎殊に其の收支を詳にする迄にゆかなかつた。是本調査の最も不備な點で、他日何等かの方法によりて更に調査を遂げたいと思ふ。

終りに臨み、余は敎養ある若き朝鮮の青年諸君に對し、其の鄕土たる部落の學術的研究を試み、之を基準として、朝鮮地方生活の改善に努力する事の一日も早からん事を熱望する。

朝鮮部落調査豫察報告第一冊　終

圖

版

Pl. 1.
The environment of the settlements
of Chankol and Torippi.

圖版第一

京畿道利川郡新屯面長洞里及栢沙面道立里附近地形圖

(陸地測量部五萬分一地形圖分載)

至釜山 至水原

1:50,000

縮尺五萬分一



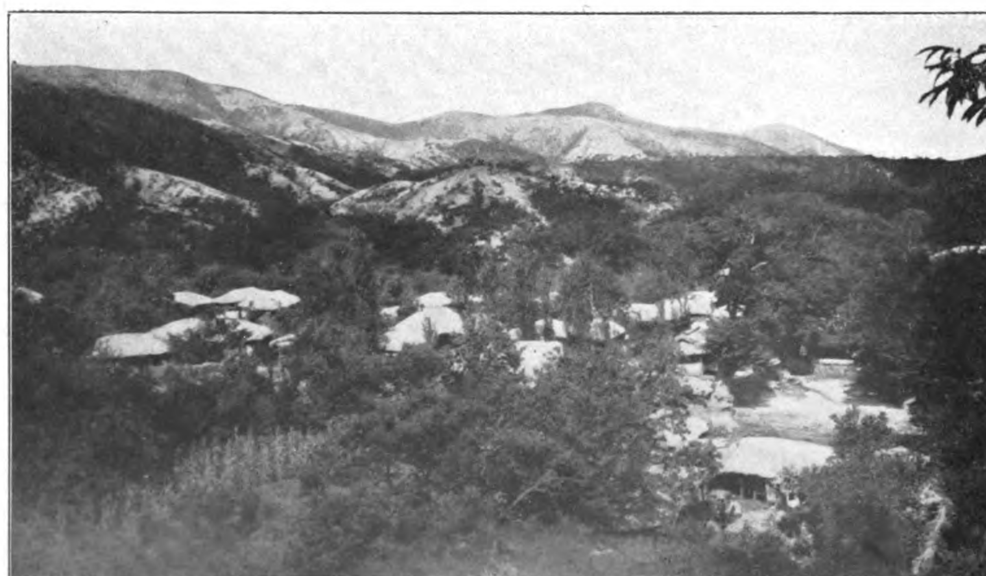
94 2

圖版第二



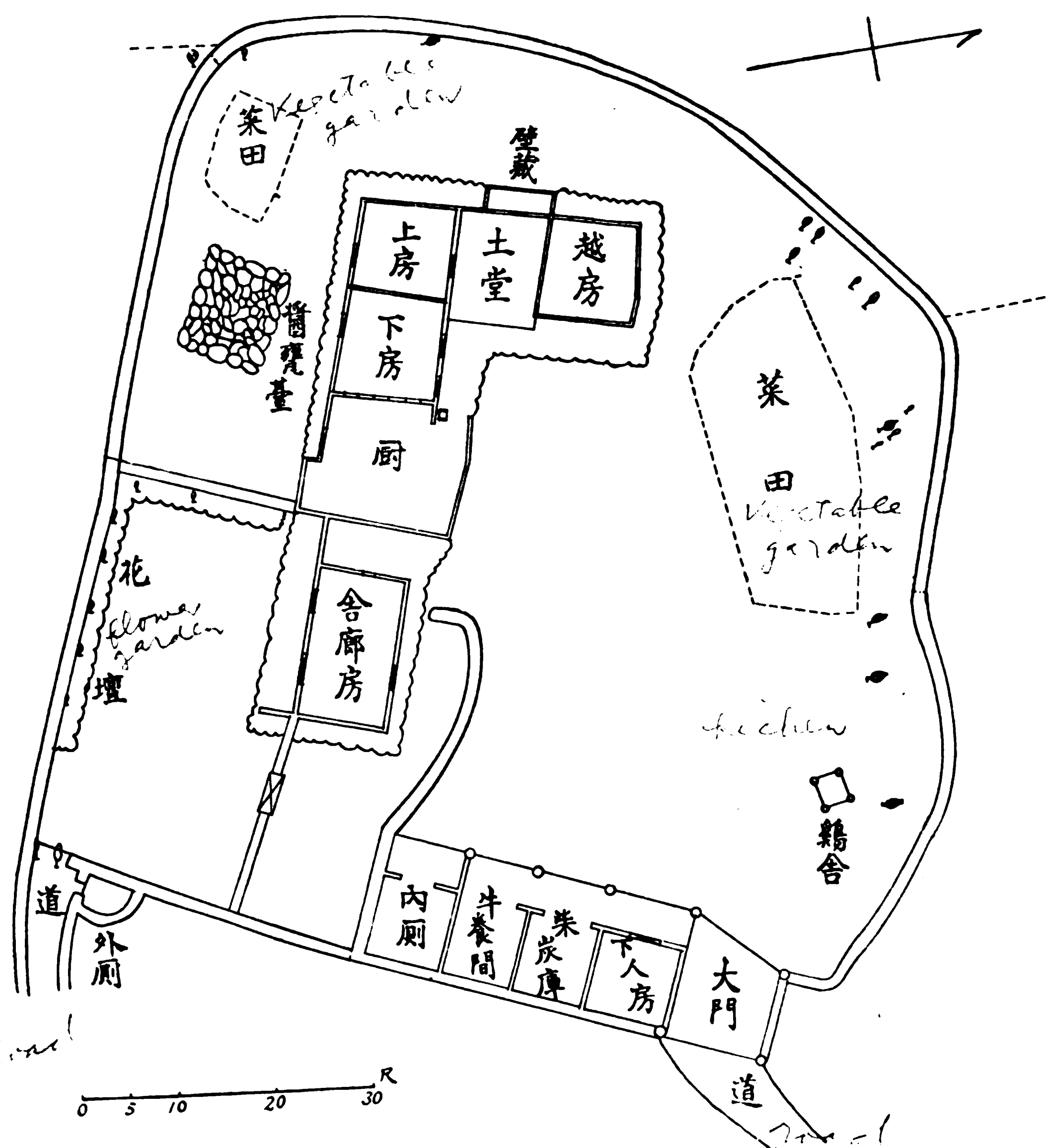
長洞里遠望
（南西より東村・中村を望む）

Distant view of Chan kol [illegible] the S.W.



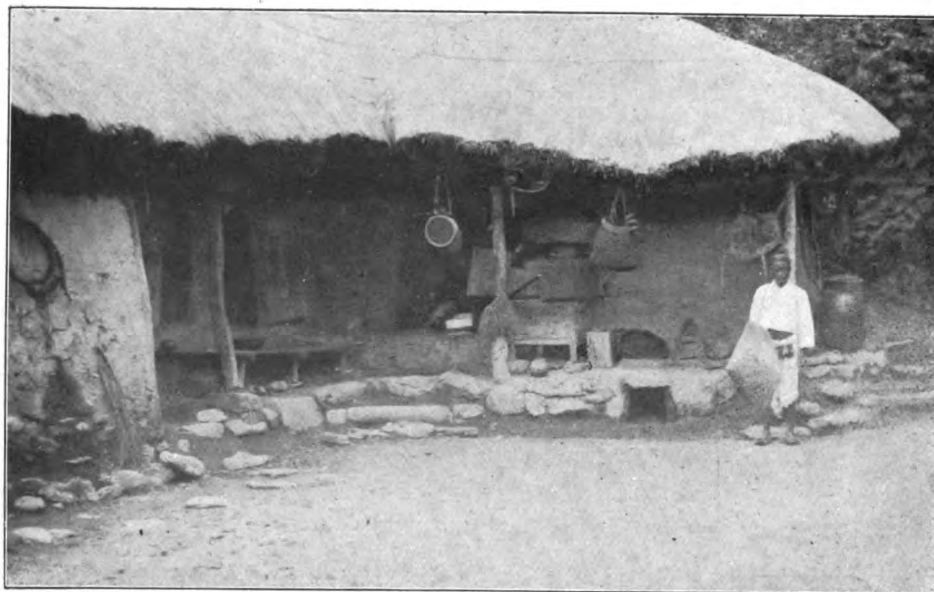
道立里上村下瞰
（右端の樹蔭は六槐亭）

圖版第三

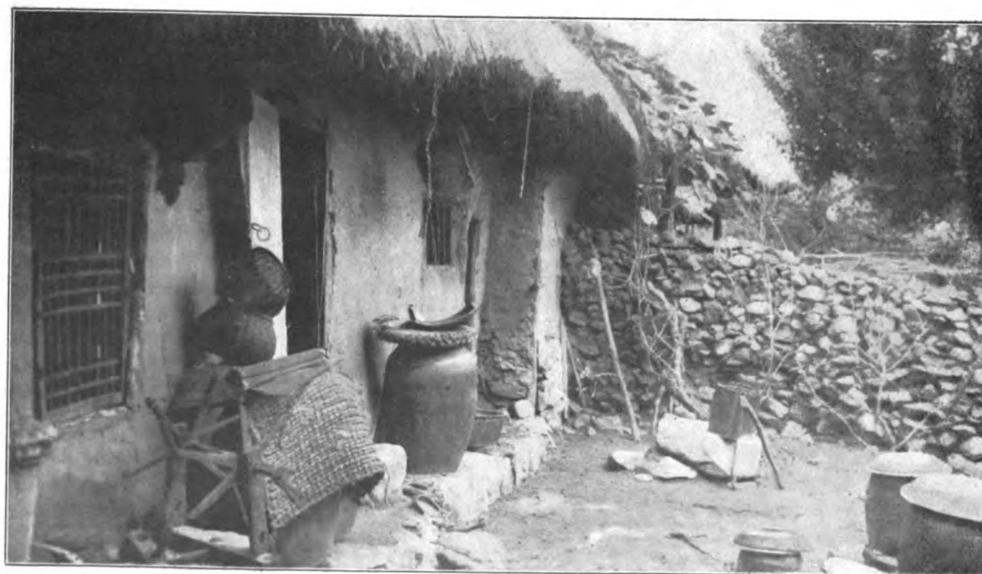


長洞里西村中農住家平面圖

圖版第四



長洞里西村中農住家正面
（越房•土堂及上房）



長洞里西村中農住家側面
（廚入口•下房及上房）

Pl. 6

圖版第六



(住家入口及馬廏間)

Entrance of the residence



(嚴理樊氏)



(住家全景)

Who



(庫間及醬甕臺)

Store room and Storage jar platform



(棟樓•大舍廊及厨)

道立里上村嚴氏住家

The residence of

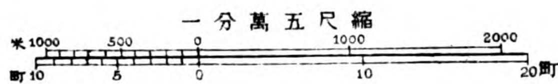
Pl. 7

圖版第七

江原道春川郡西下面錦山里附近地形圖

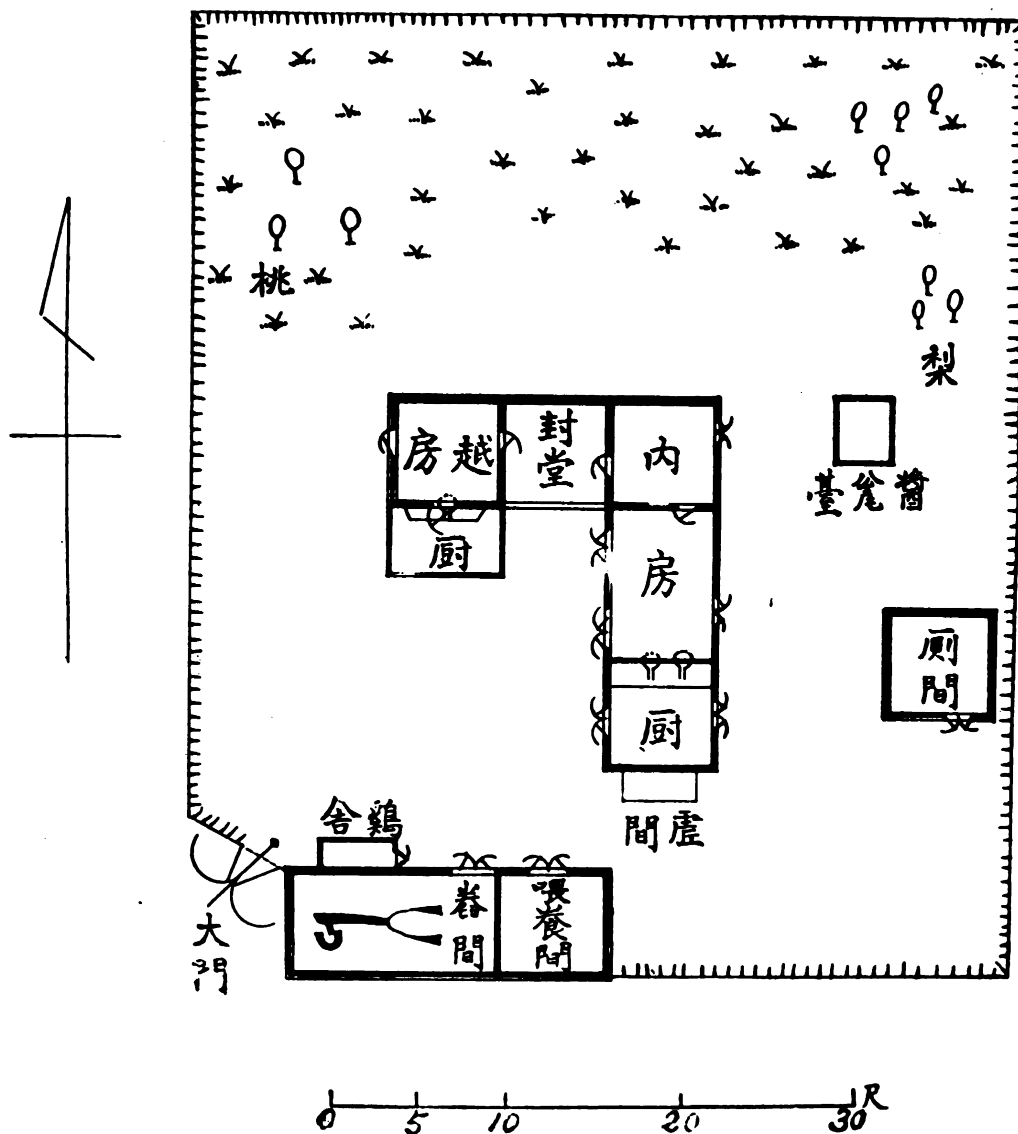
（陸地測量部五萬分一地形圖分載）

縮尺五萬分一



Pl. ?

圖版第八



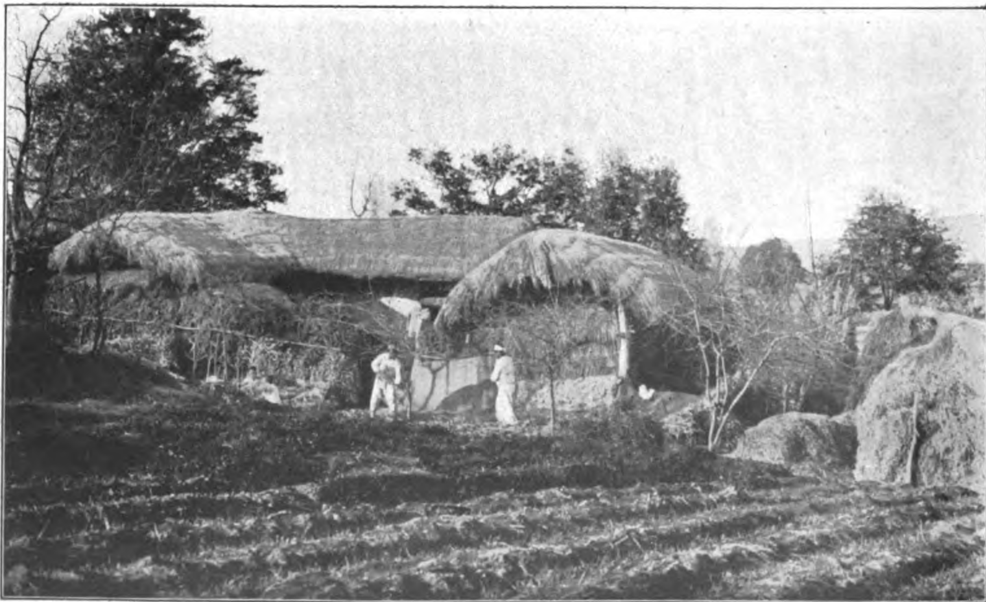
萬屯里小農住家平面圖

at ...

圖版第九



葛屯里遠望



葛屯里小農住家

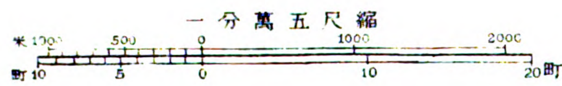
Pl. 10
Gun-so-rii

圖版第一〇

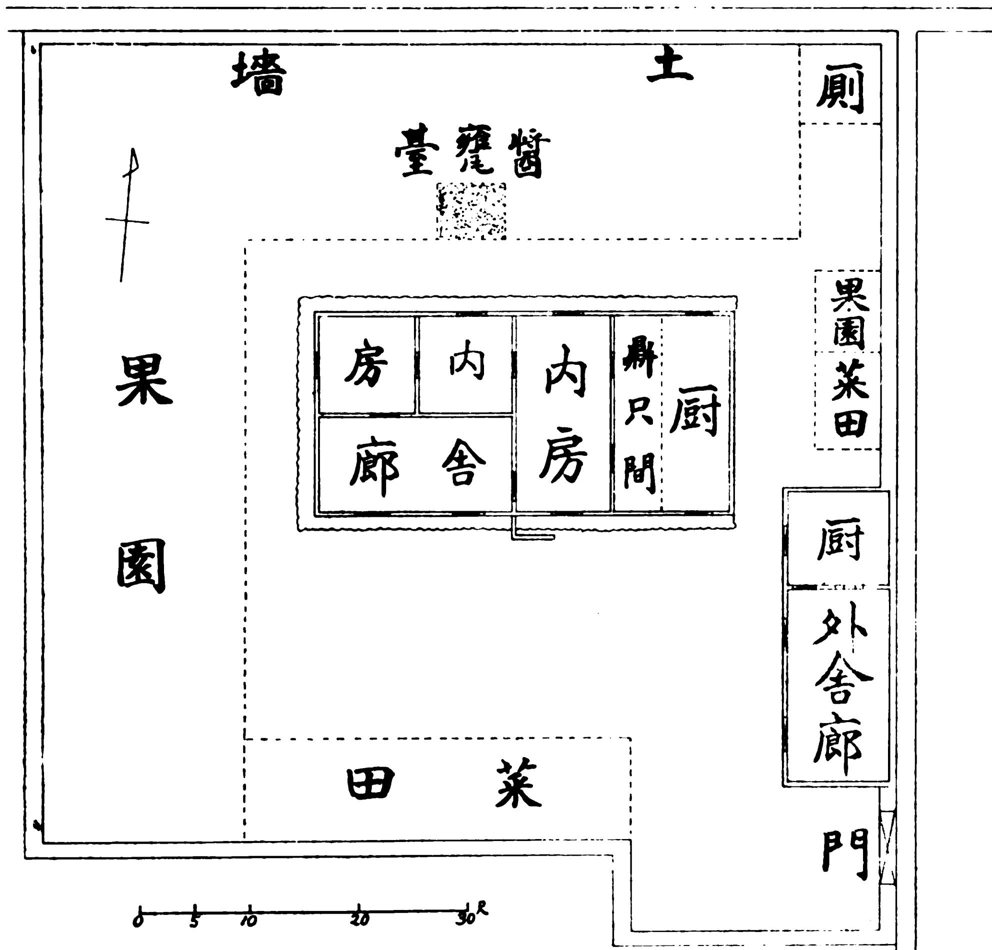
咸鏡南道咸興郡雲田面宮西里附近地形圖

(陸地測量部五萬分一地形圖分載)

縮尺五萬分一

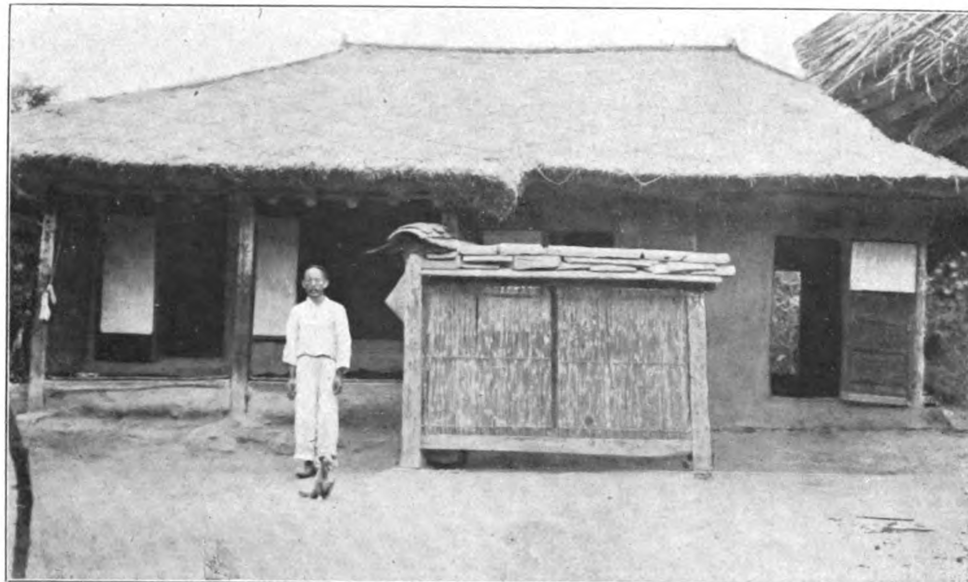


圖版第一一



宮西里中農住家平面圖

圖版第一二



宮西里中農住家正面
(廚•內房及舍廊)



宮西里中農住家內部
(廚及鼎只間)

Pl. 13
Pumin-mie

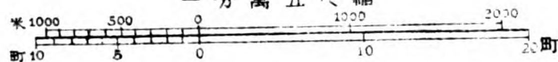
圖版第一三

咸鏡南道咸興郡州北面富民里附近地形圖

（陸地測量部五萬分一地形圖分截）

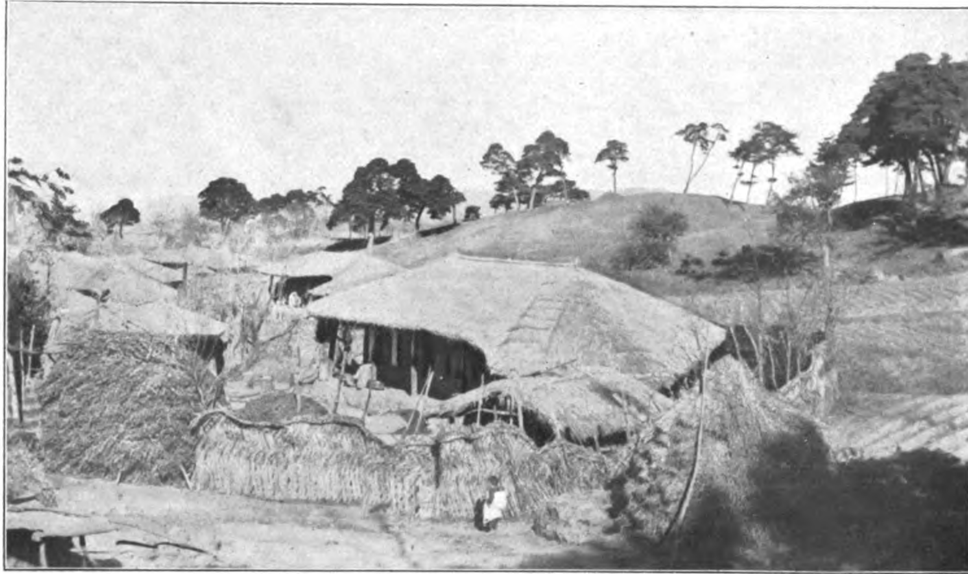
至元山

縮尺五萬分一



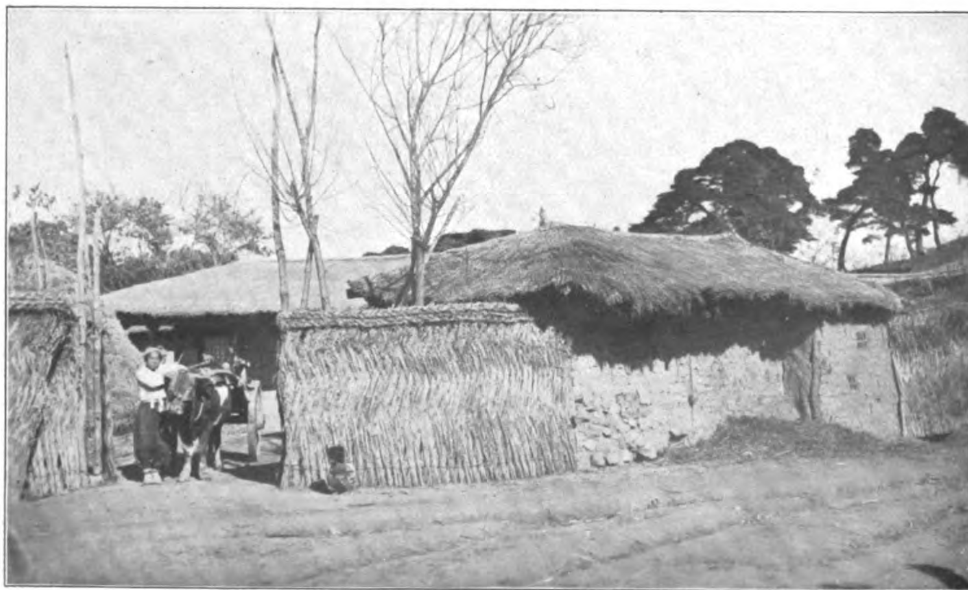
Pl. 14

圖版第一四



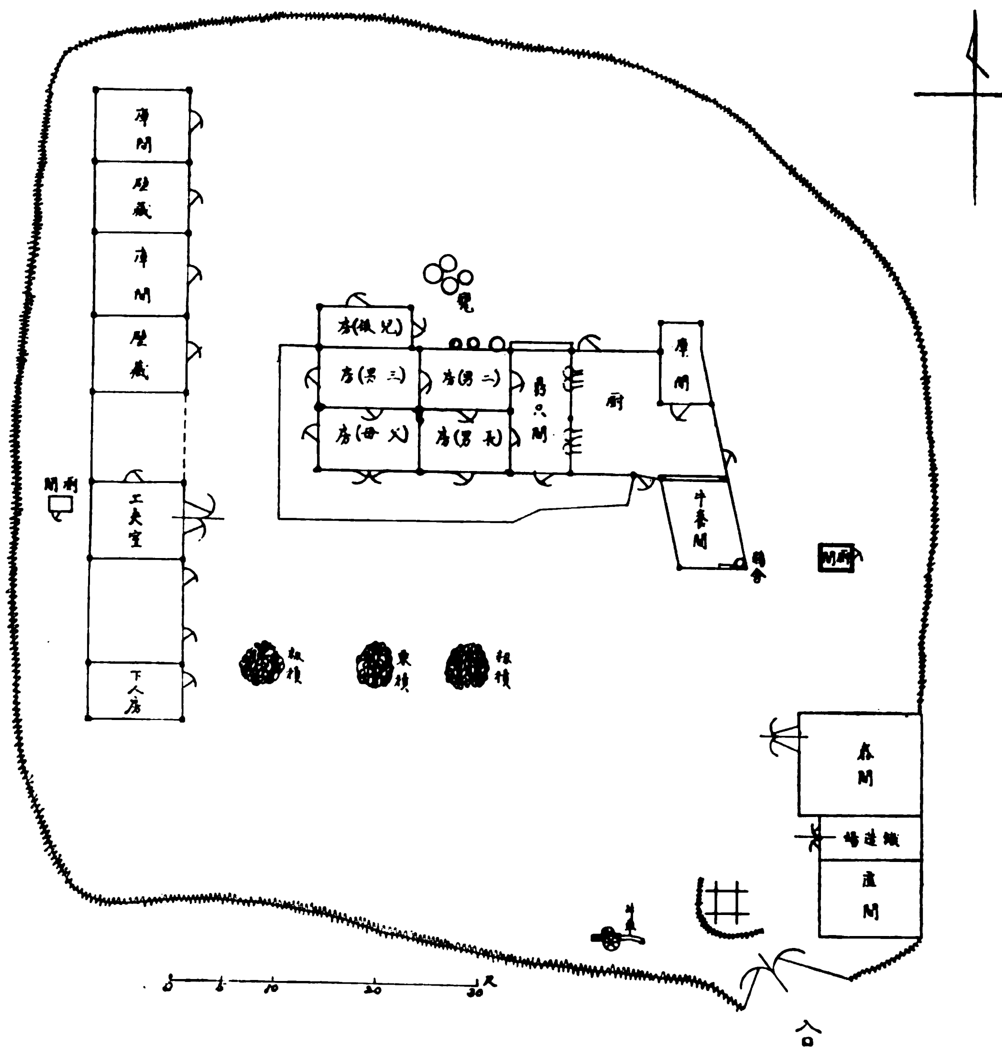
富民里と其墓地
(東方後丘より望む)

View of Pumin-nie and



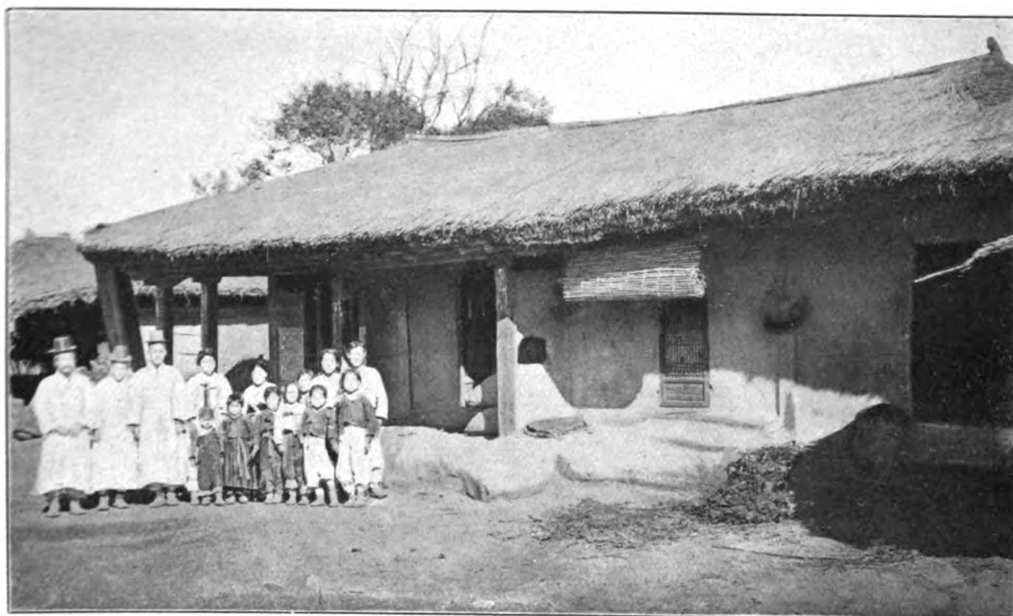
富民里中農住家入口

圖版第一五

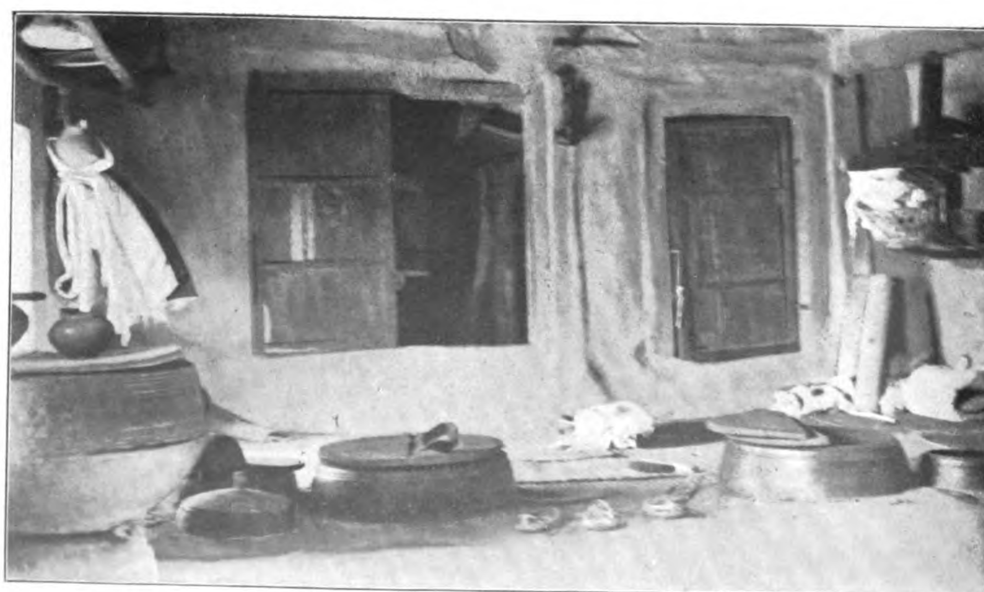


富民里中農住家平面圖

圖版第一六



富民里中農住家及家族



富民里中農住家內部
(厨•鼎只間及房入口)

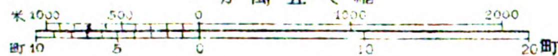
Pl. 17. Intsu-don

圖版第一七

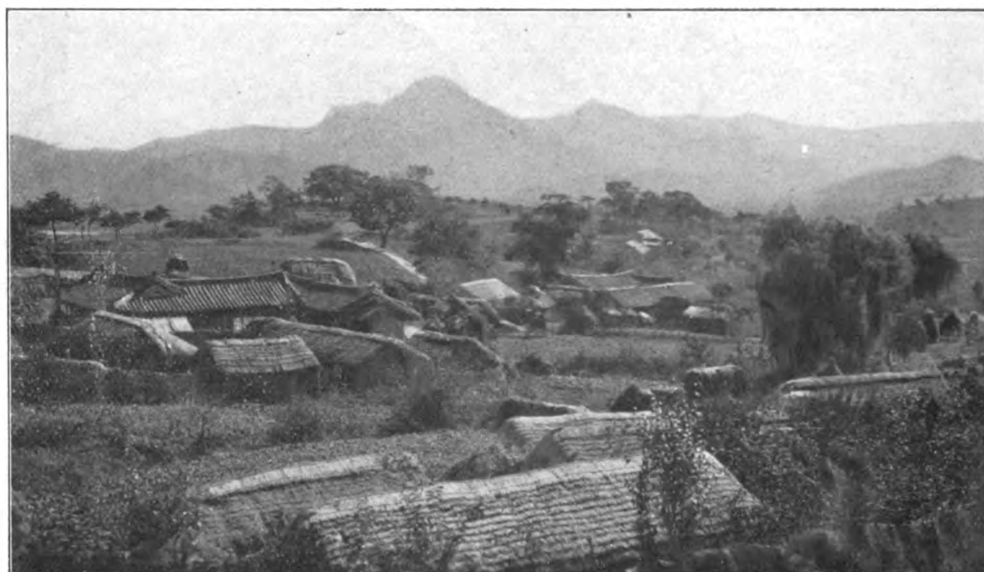
平安北道宣川郡深川面仁豆洞附近地形圖

（陸地測量部五萬分一地形圖分載）

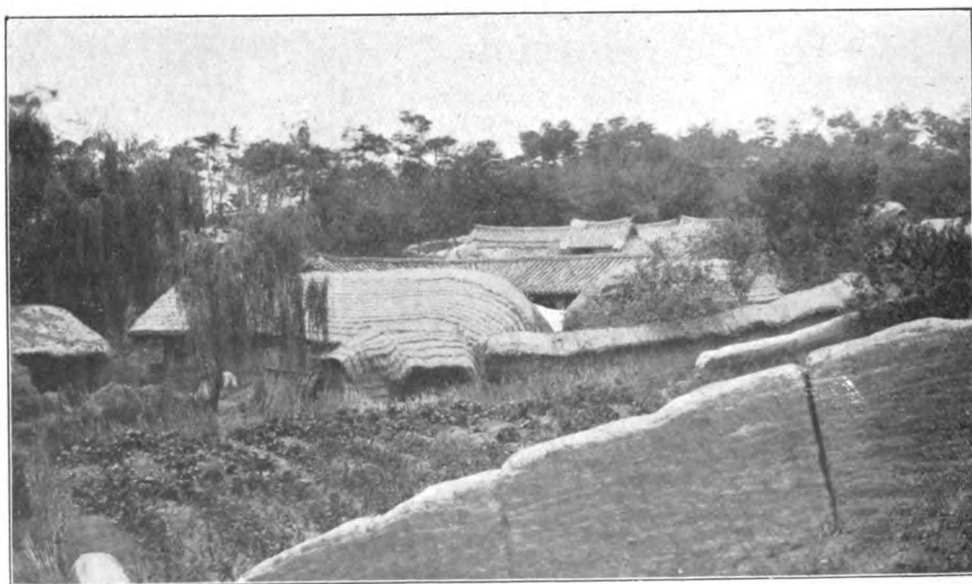
縮尺五萬分一



圖版第一八



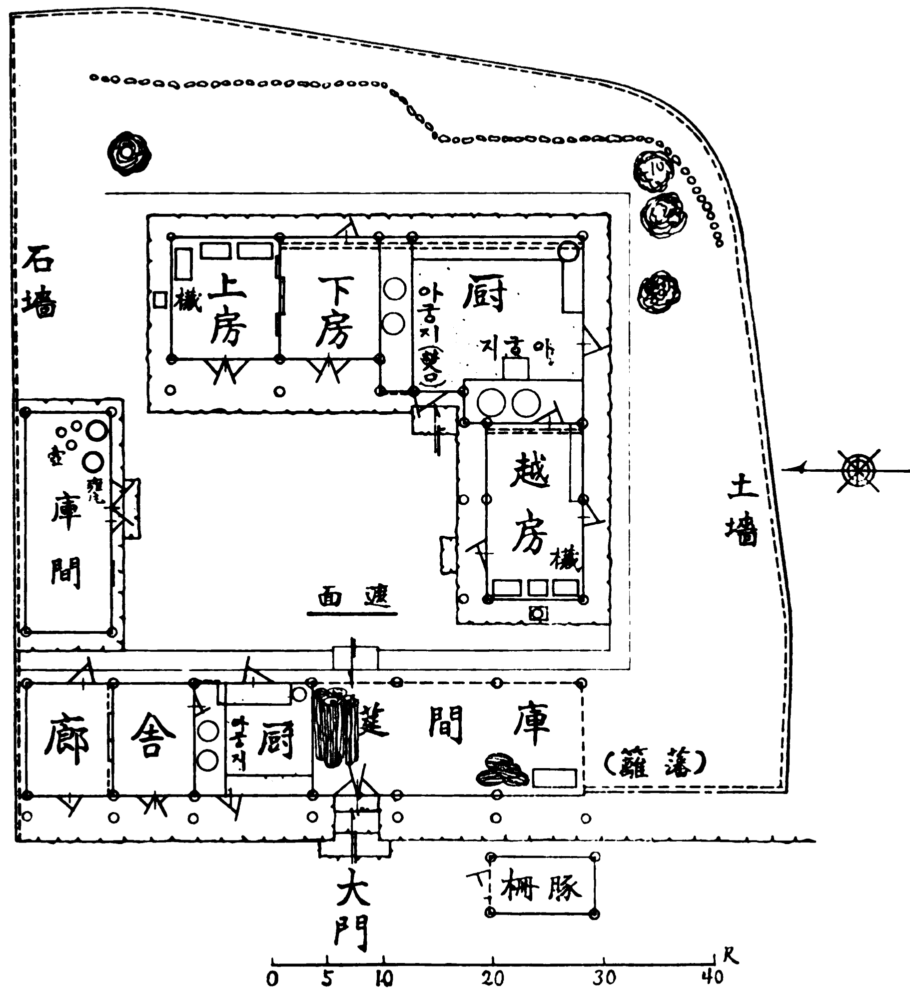
仁豆洞全景
（南西より）



仁豆洞の一部

Pl. 19

圖版第一九



仁豆洞地主住家平面圖

圖版第二〇



仁豆洞地主住家入口
(庫間・大門・厨・舍廊及豚柵)



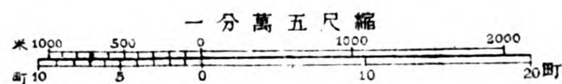
仁豆洞地主住家及家族

Pl. 21 Unhakuri'

圖版第二一

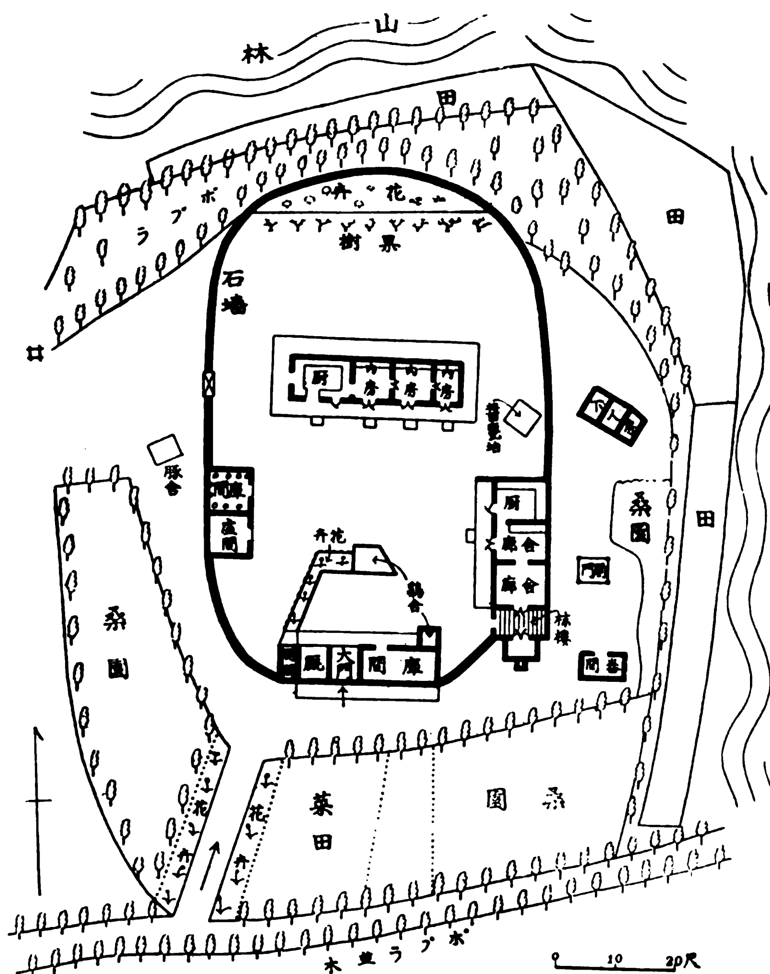
平安南道安州郡新安州面雲鶴里附近地形圖

（陸地測量部五萬分一地形圖分載）



Pl. 22.

圖版第二二



雲鶴里李氏住家平面圖

Pl. 23

圖版第二三



雲鶴里李氏住家入口

(庫間 大門及廐)

Entrance of the house of Mr. Ri at Unkakuri



雲鶴里李氏住家正面

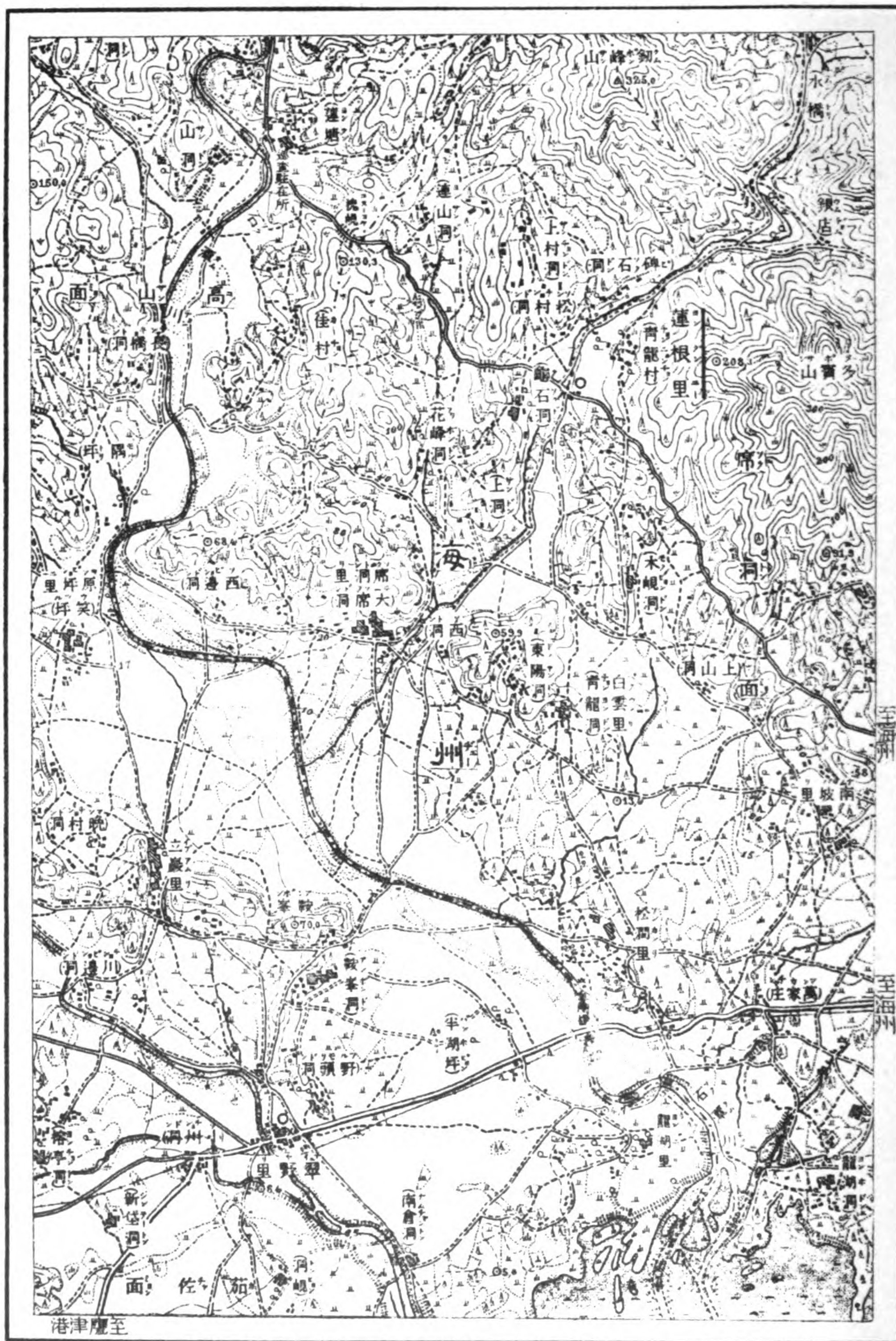
(內房及厨)

Pl. 24
Yongun-ni

圖版第二四

黃海道海州郡席洞面蓮根里附近地形圖

（陸地測量部五萬分一地形圖分載）

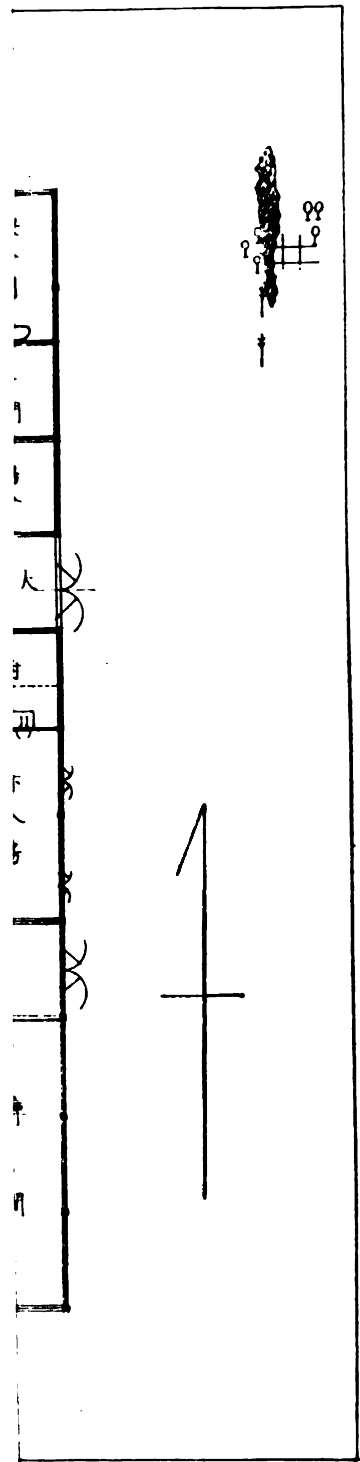


縮尺五萬分一

米 1000 500 0 1000 2000

町 10 5 0 10 20 町

PC. 25



0 5 10 20 30 尺

蓮根里龜石洞吳氏

Pl. - 6



蓮根里龜石洞概景
(吳氏住家)



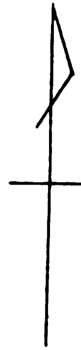
住家側面及煙筒

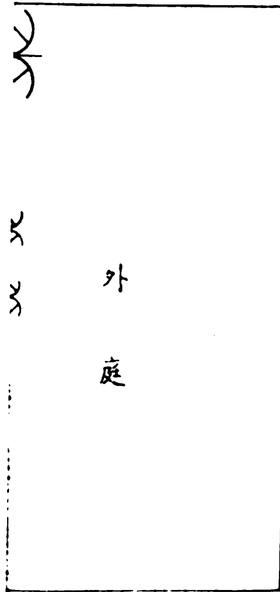


吳氏孝子旌門



龜石洞吳氏家族

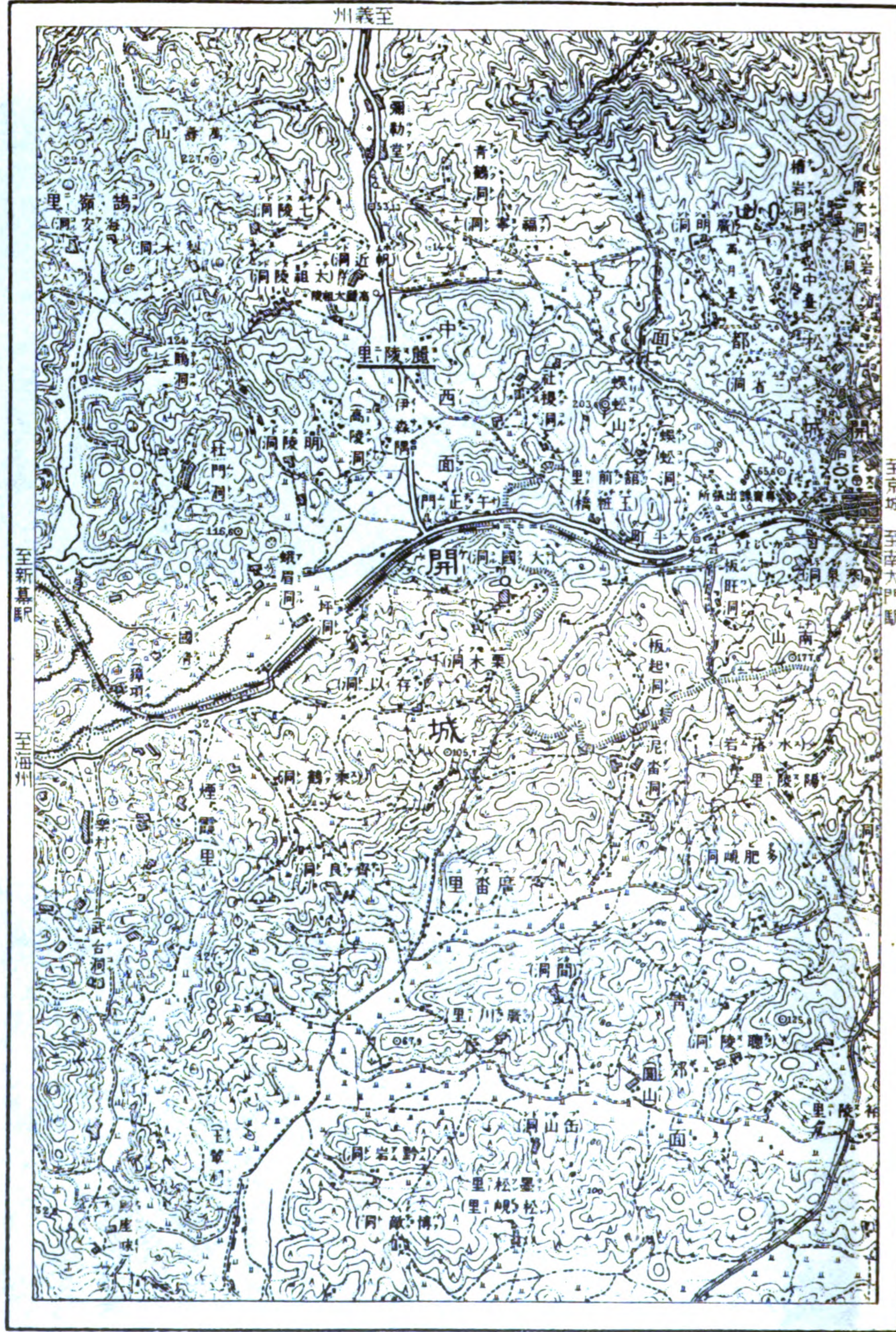



外庭

Pl. 28.
Yon-nun-nie

圖版第二八

京畿道開城郡中西面麗陵里附近地形圖（陸地測量部五萬分一地形圖分載）



縮尺五萬分一

米 1000 500 0 1000 2000
町 10 5 0 10 20 町

Pl. 29

圖版第二九



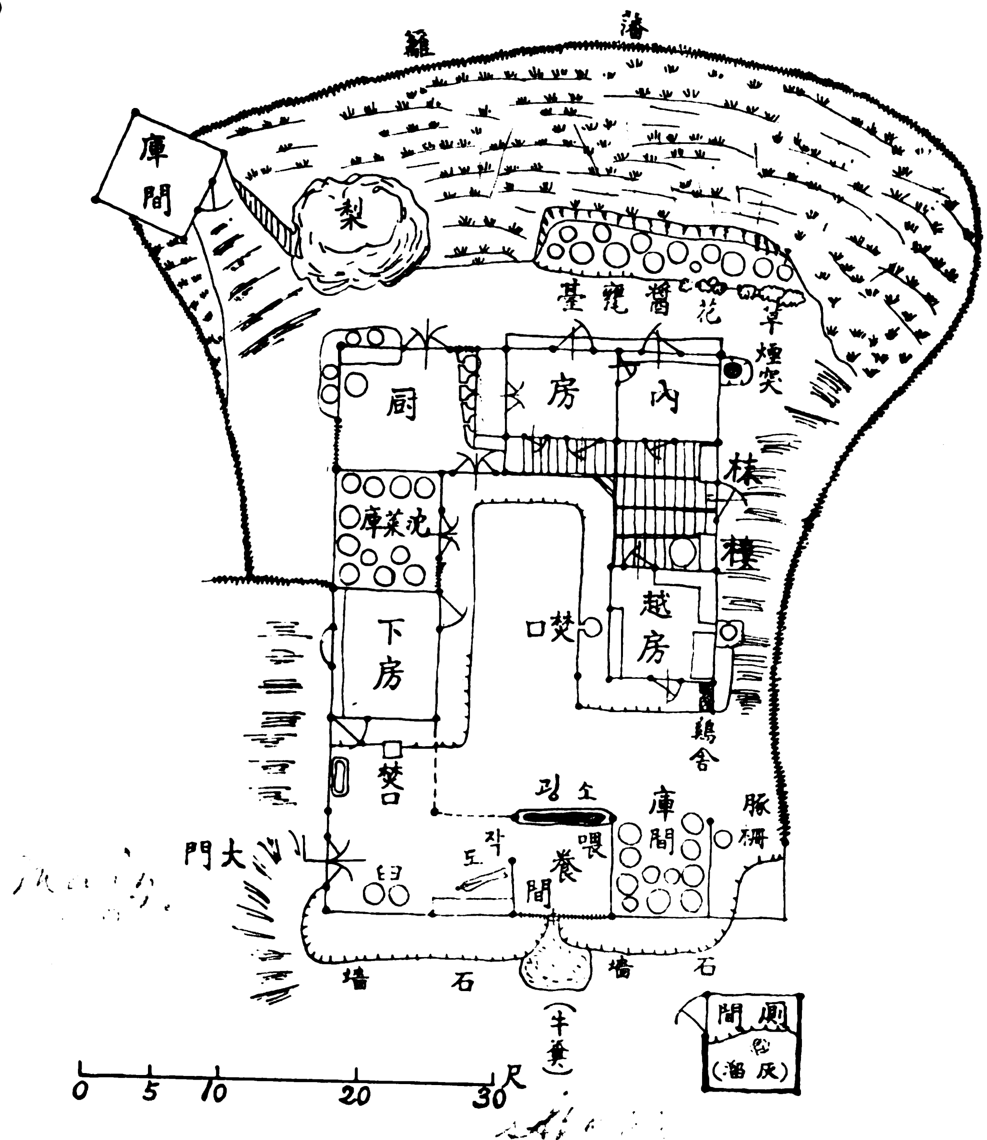
麗陵里太祖顯陵

The Mausoleum of the Em... Taiso at Yon...



麗陵里太祖陵洞全景

圖版第三〇



龎陵里太祖陵洞王氏住家平面圖

圖版第三一



麗陵里太祖陵洞王氏住家
(越房・焚口及抹樓)



棉種取機



王氏家族



紡糸機 (文來)



挽臼

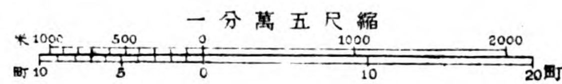
Pl. 32

圖版第三二

全羅北道金堤郡金溝面上新里附近地形圖

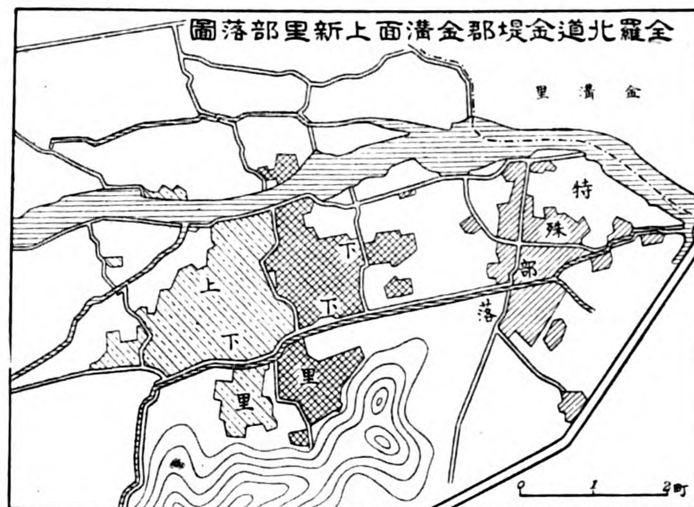
（陸地測量部五萬分一地形圖分載）

縮尺五萬分一

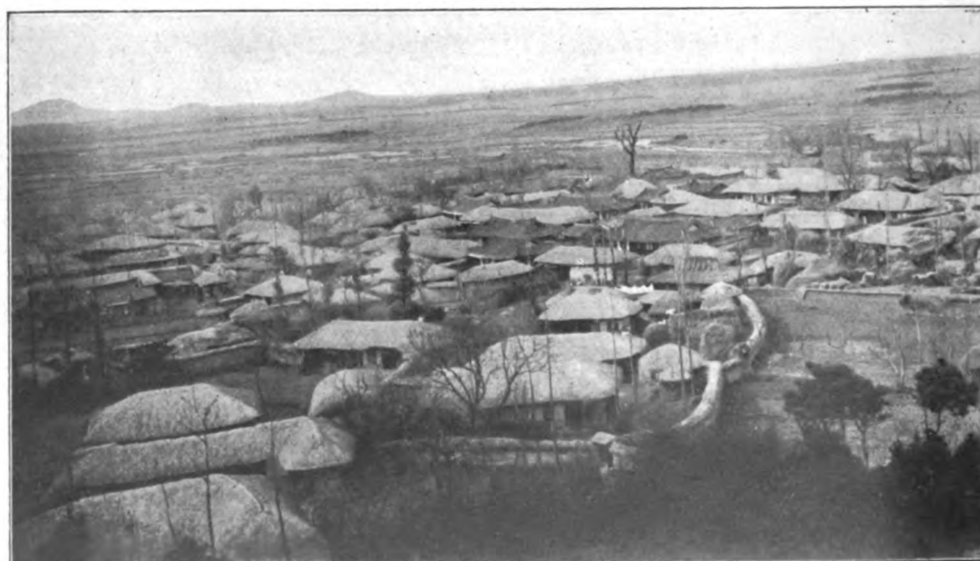


33

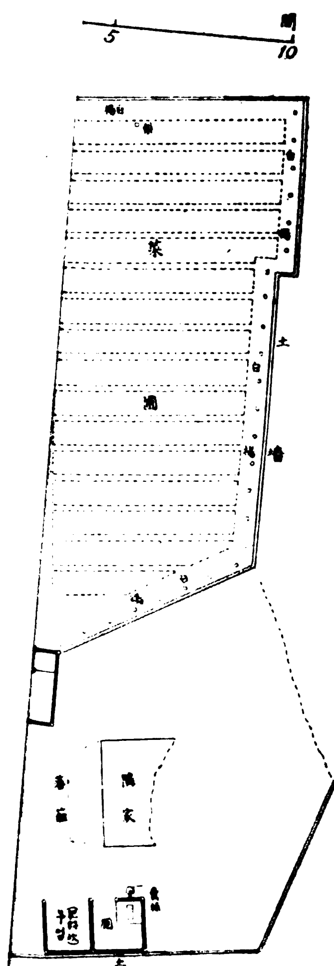
圖版第三三



上新里部落圖



上新里上下里及下下里全景



5
10
間
菜
園
土
家



上新里張氏住家祀堂



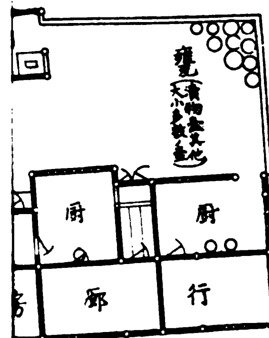
上新里張氏住家客殿



上新里張氏住家
(越房•內房及廚)

Pl. 36





圖版第三七



上新里張氏住家
(越房・舍廊房及洞房)



沈菜間



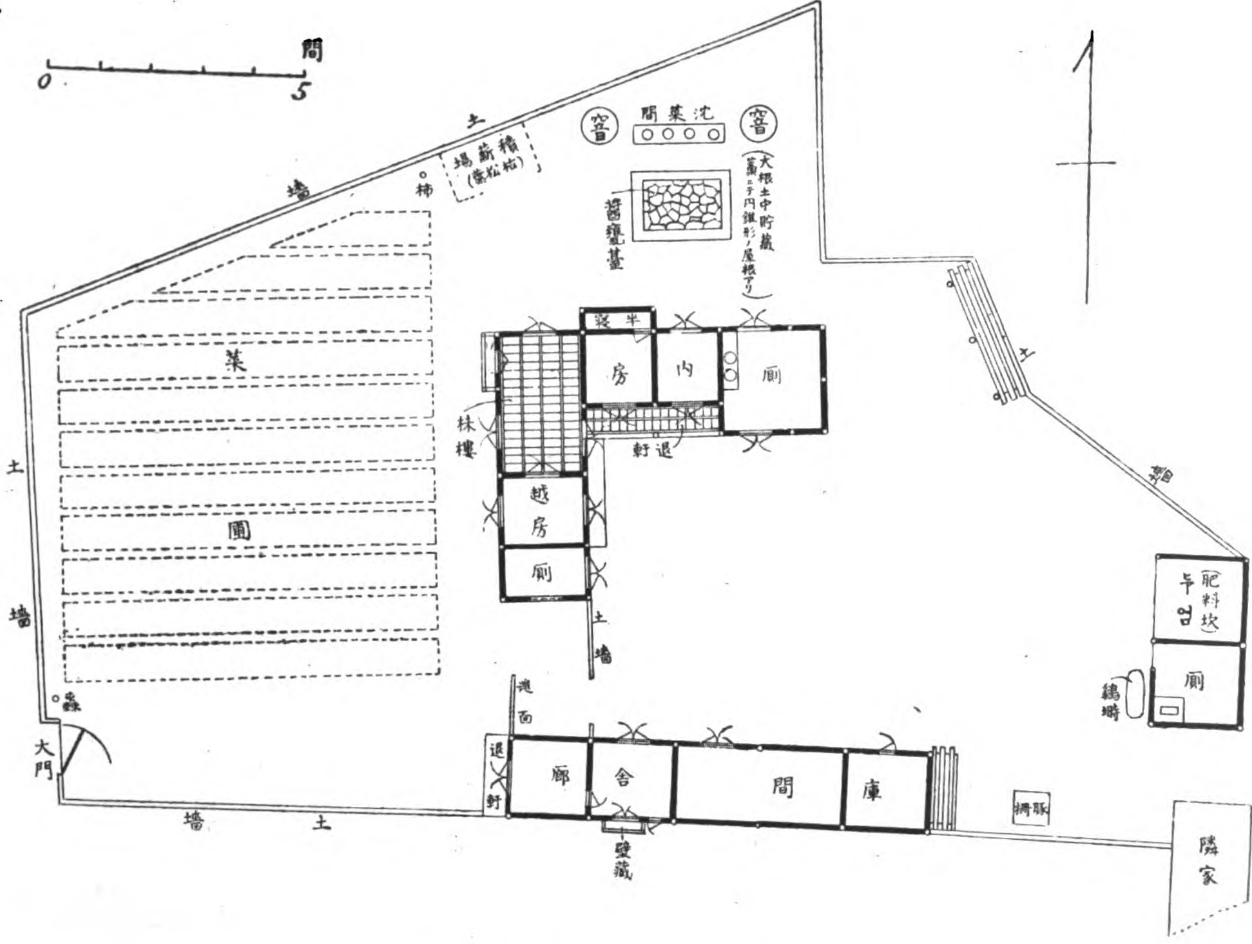
大門



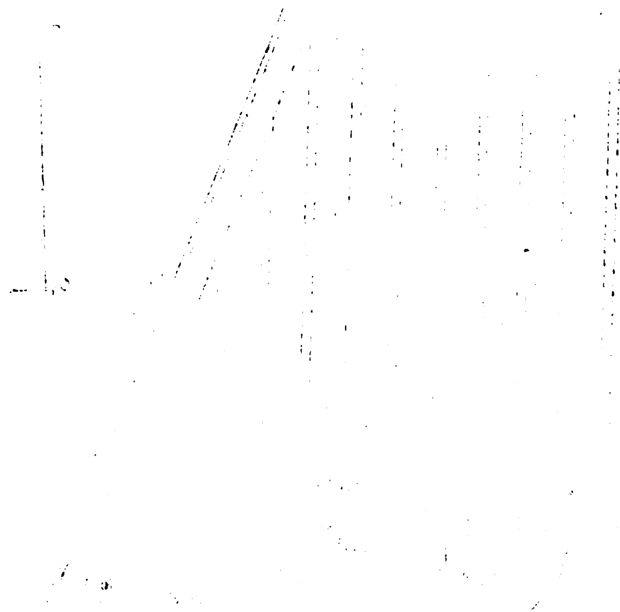
井



喪廳


間
0
5
土
墻
積薪場
(藁松枝)
柿
菜
圃
大門
甕
沈菜間
大根土中貯藏
(藁ニテ円錐形ノ屋根アリ)
醬甕臺
半
房
内
廁
林櫶
退軒
越房
廁
退
面
廊
舍
間
庫
壁藏
肥料坎
두엄
鷄塒
豚構
隣家

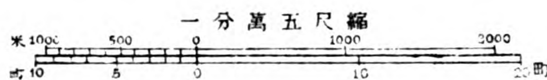
上新里中農家住平面圖



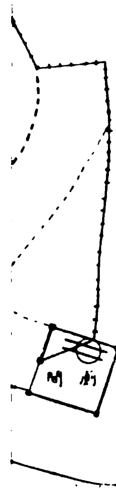
圖版第三九

忠清南道公州郡新上面維鳩里附近地形圖

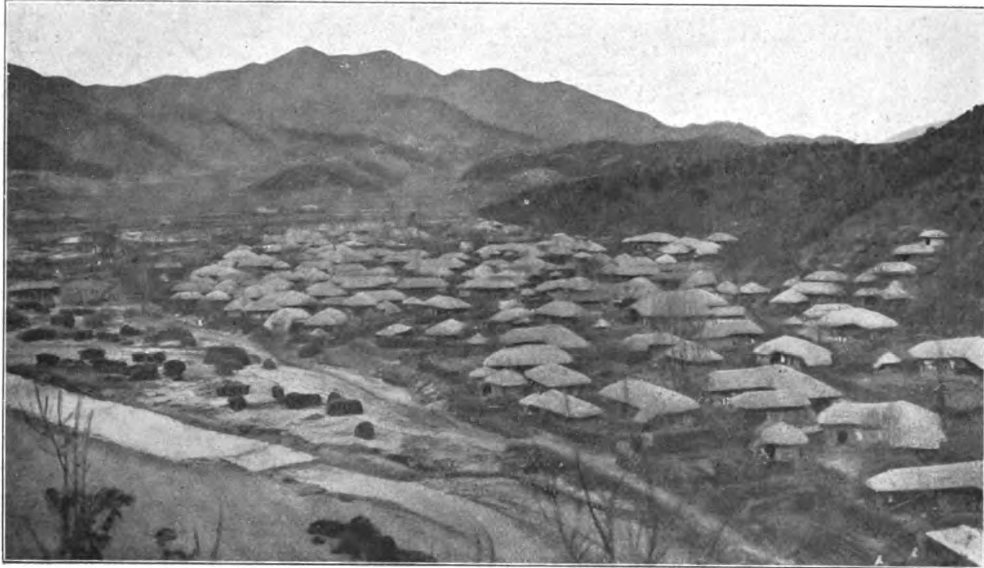
（陸地測量部五萬分一地形圖分載）



圖版第四一



Pl. 41



維鳩里全景



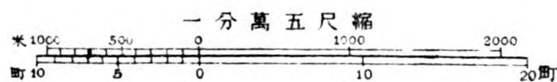
維鳩里漢氏住家及外庭

Pl. 42. Hahoe Ton

圖版第四二

慶尚北道安東郡豊南面河回洞附近地形圖

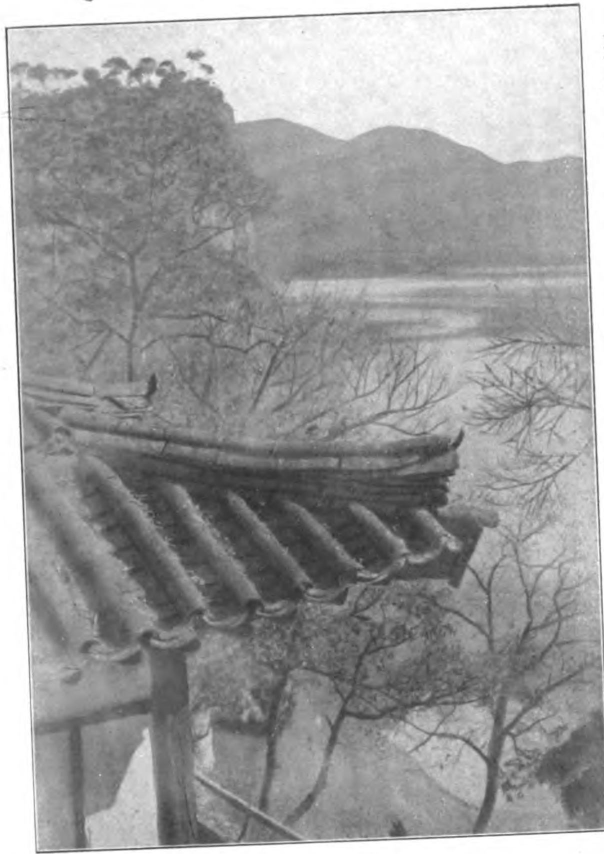
(陸地測量部五萬分一地形圖分載)



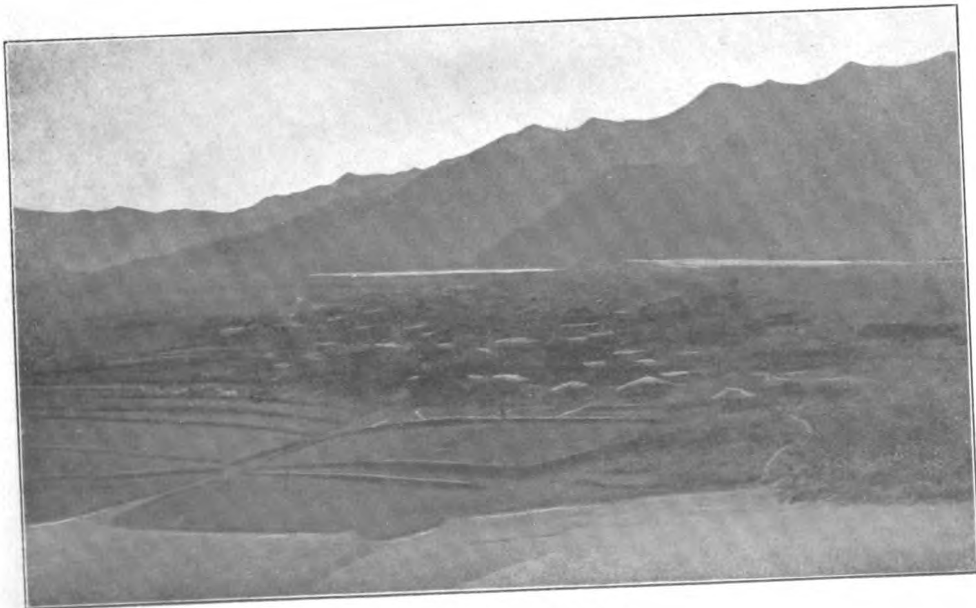
PL. 43

Hugo-dai and Kenansei...

圖版第四三

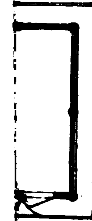


芙蓉岦と謙庵精舍（洛東江右岸）



河回洞下瞰

（北方芙蓉岦より）

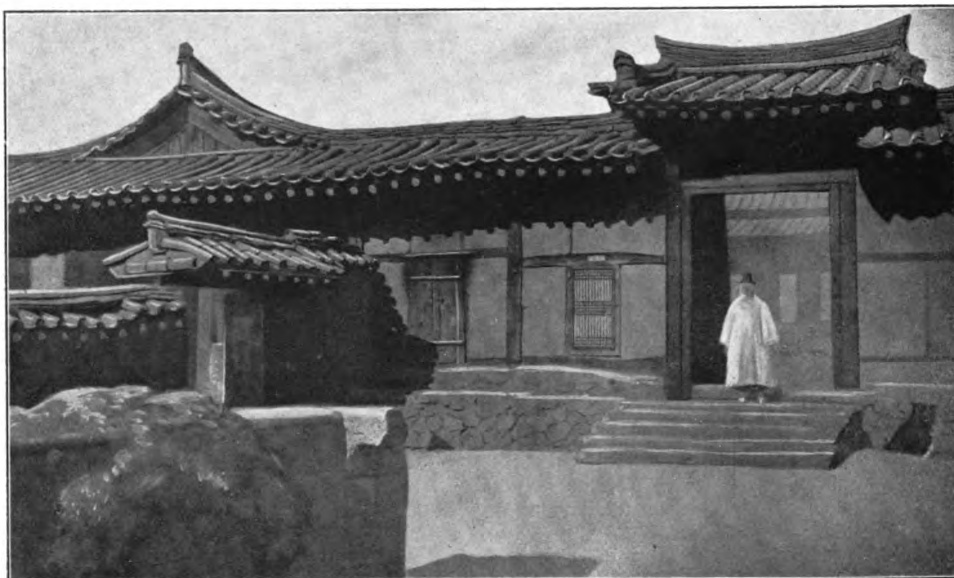






Pl. 45

圖版第四五



河回洞柳時萬氏と其住家
(大門・下人房・厨及楙樓房)



河回洞柳氏住家正面
(大廳・舍廊及越房)

圖版第四六



河回洞柳氏住家祀堂



河回洞柳氏住家
（後門•牛柵•庫及下人房）

Pl. 47

圖版第四七

喂養間

廚

房

房

醬甕

煙筒

焚口

松葉

粟殼

廁間

肥料

庭

松葉

松葉

葉

0 5 10 20 30尺

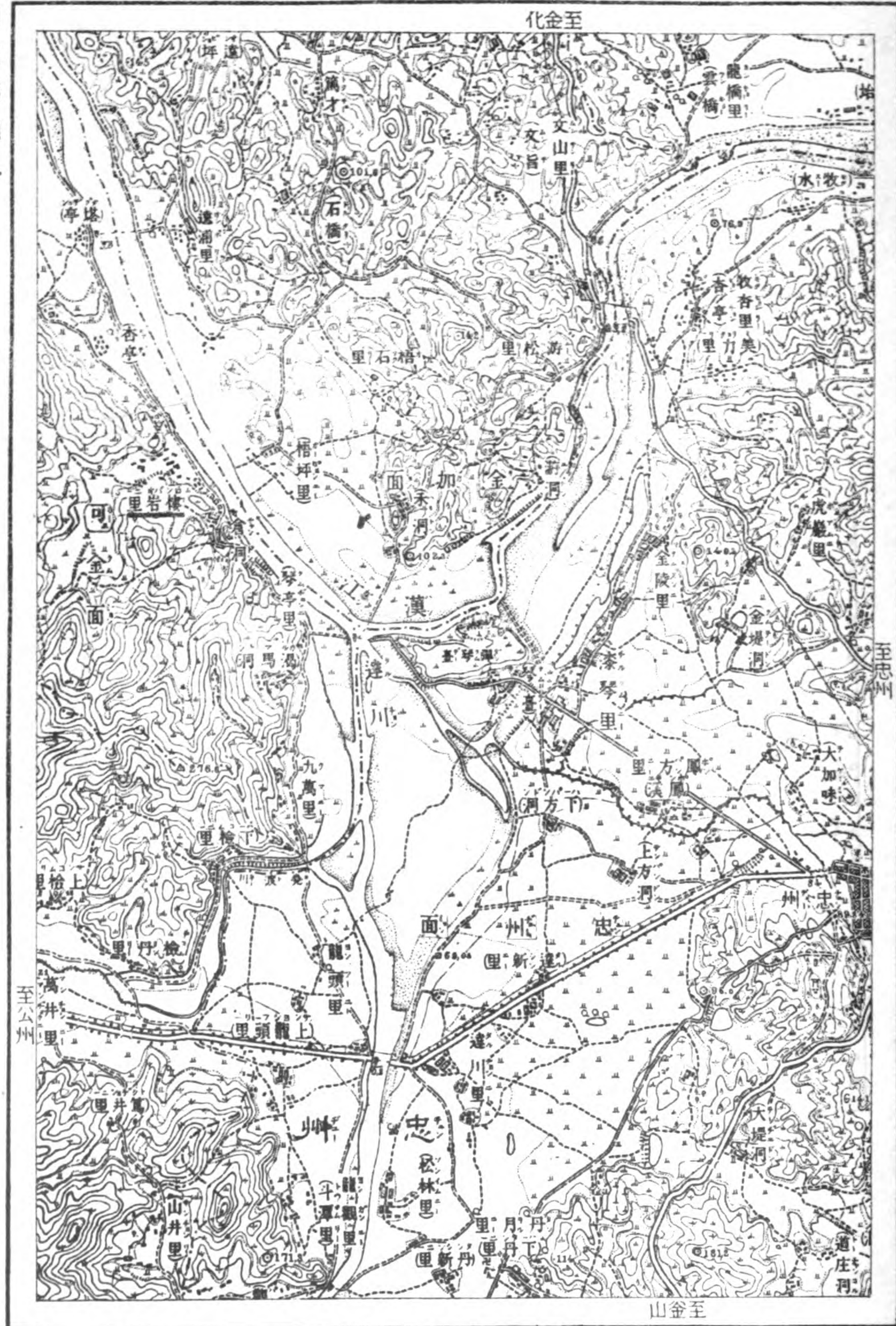
河回洞小農住家平面圖

Pl. 48
Ronbao-nie

圖版第四八

忠清北道忠州郡可金面樓岩里附近地形圖

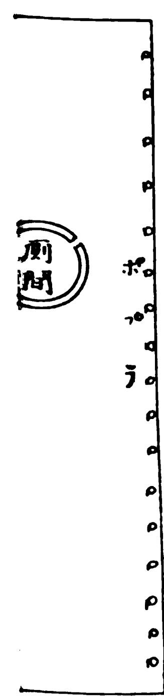
(陸地測量部五萬分一地形圖分載)



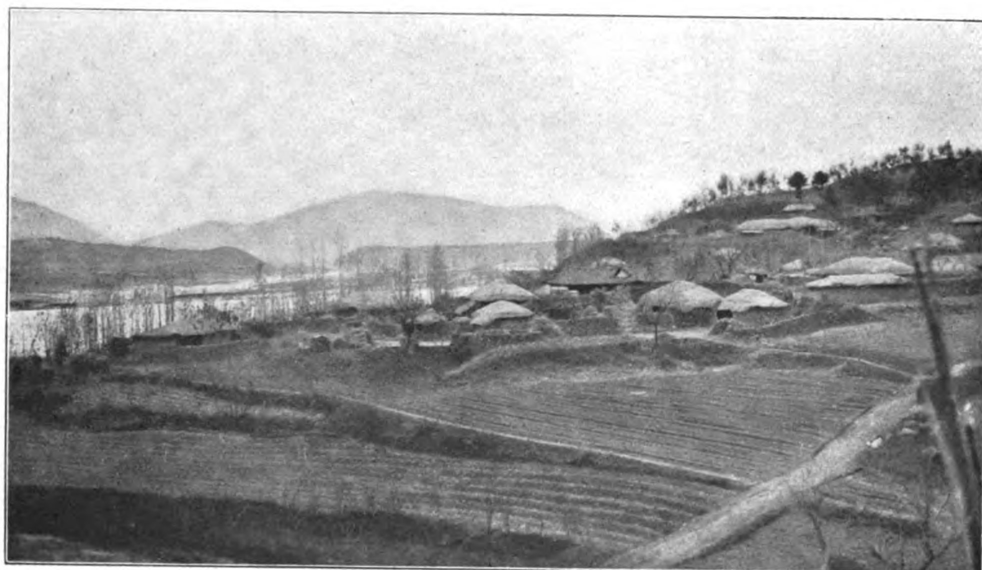
縮尺五萬分一

米1000 500 0 1000 2000

町10 5 0 10 20町


ポプラ

圖版第五〇



樓岩里全景

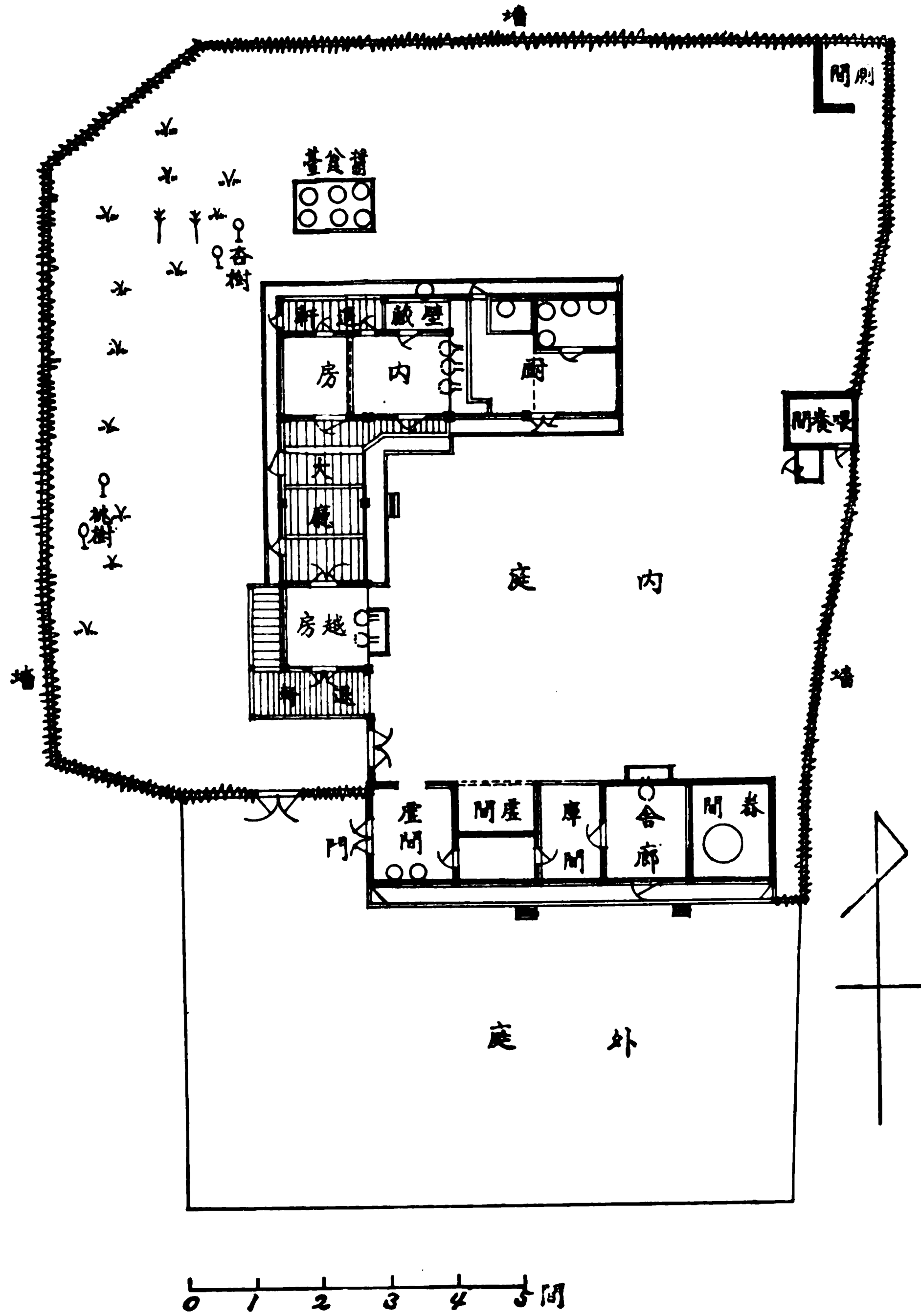
（漢江を隔てゝ古戰場彈琴臺を望む）



樓岩里鄭氏家族

P.C. 51

圖版第五一



樓岩里金氏住家平面圖

Pl. 52.

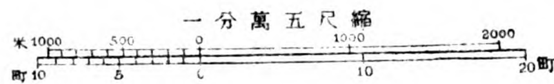
Monhorii

圖版第五二

全羅南道靈巖郡靈巖面望湖里附近地形圖

(陸地測量部五萬分一地形圖分載)

縮尺五萬分一



圖版第五四



圖版第五四



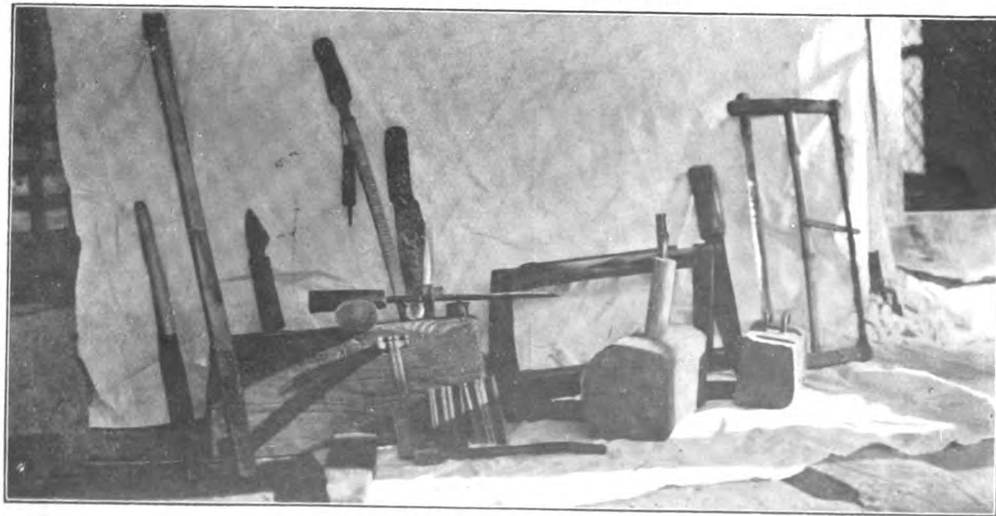
望湖里櫛製造者住家及竹材

The house and the bamboo woods of a comb-manufacturer at



同住家櫛製造作業室

Comb manufacturing room.



櫛製造道具

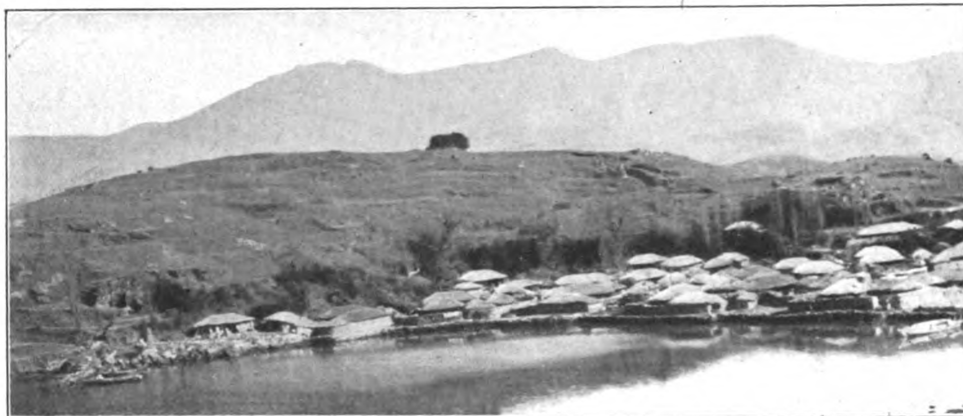
Pl. 55

圖版第五五



竹林浦部落圖

the map of the ... of Chikurin...



竹林浦全景

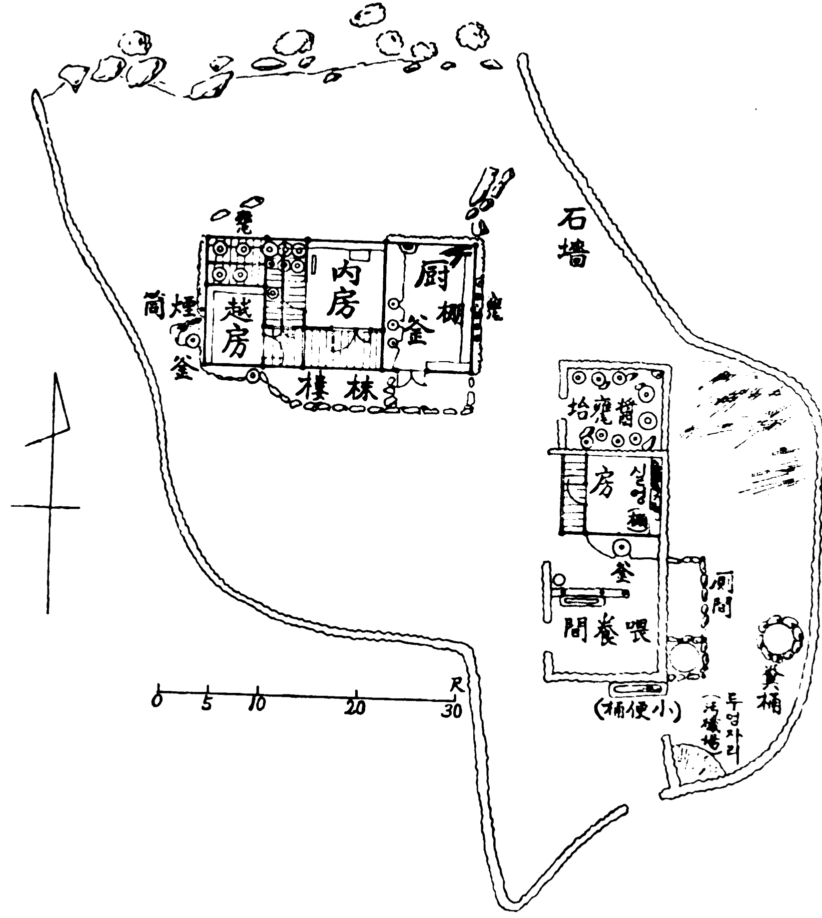
general view of Chikurin...

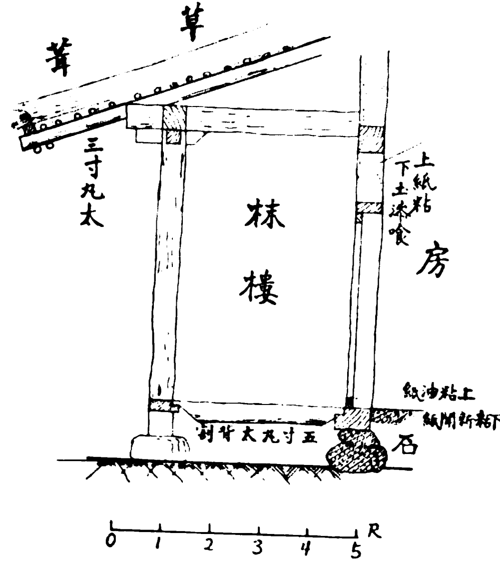


竹林浦魚類の乾燥

...po

Pl. 56

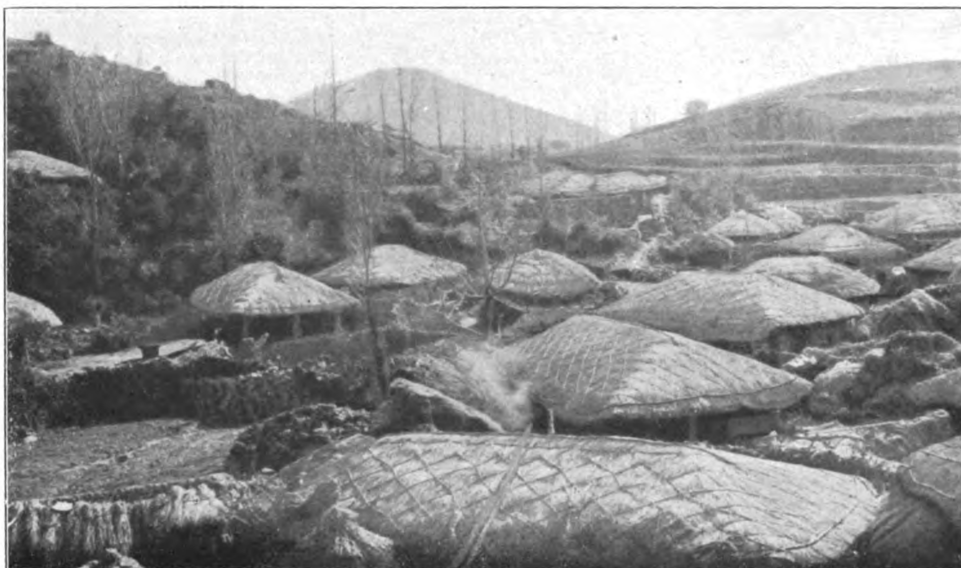




竹林浦漁家平面圖

Plan of the house ...

圖版第五七



竹林浦の一部



竹林浦漁家正面
（厨•内房•秣樓及越房）

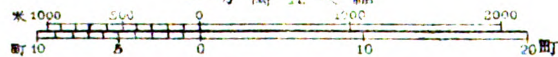
Pl. 58
Pu-nam-ni

圖版第五八

忠清南道論山郡豆磨面夫南里附近地形圖

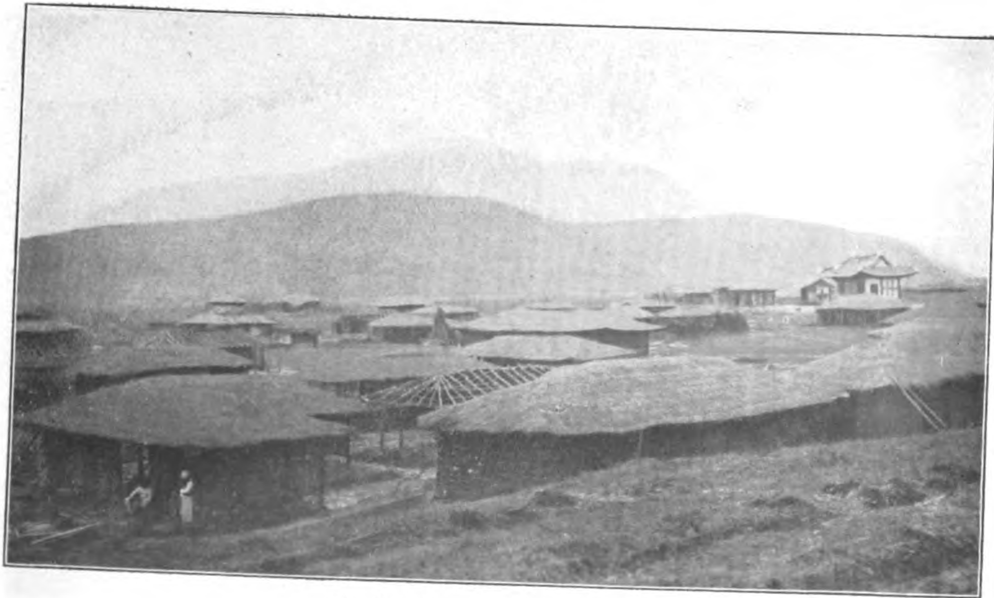
（陸地測量部五萬分一地形圖分載）

縮尺五萬分一





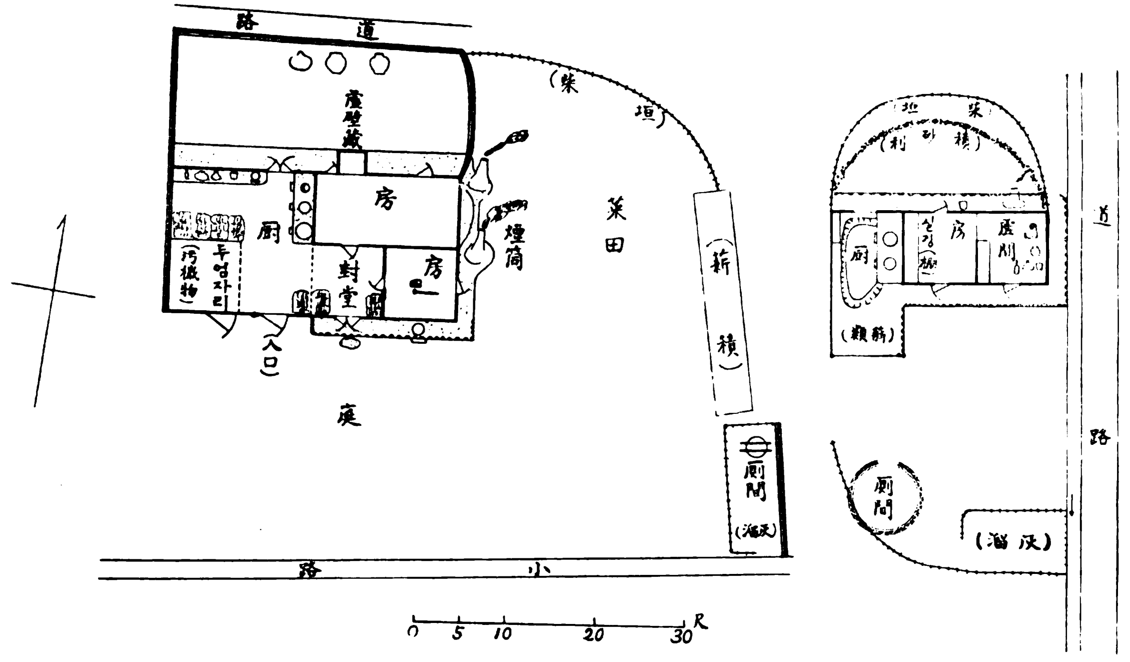
新都內鷄流山遠望



新都內新移住部落
(大南里)

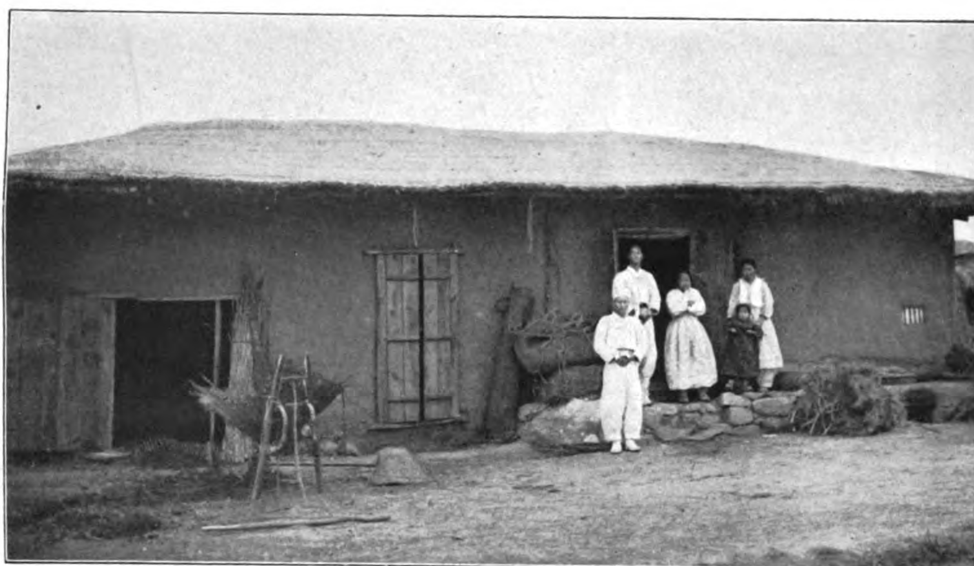
圖版第六二

Pl. 62

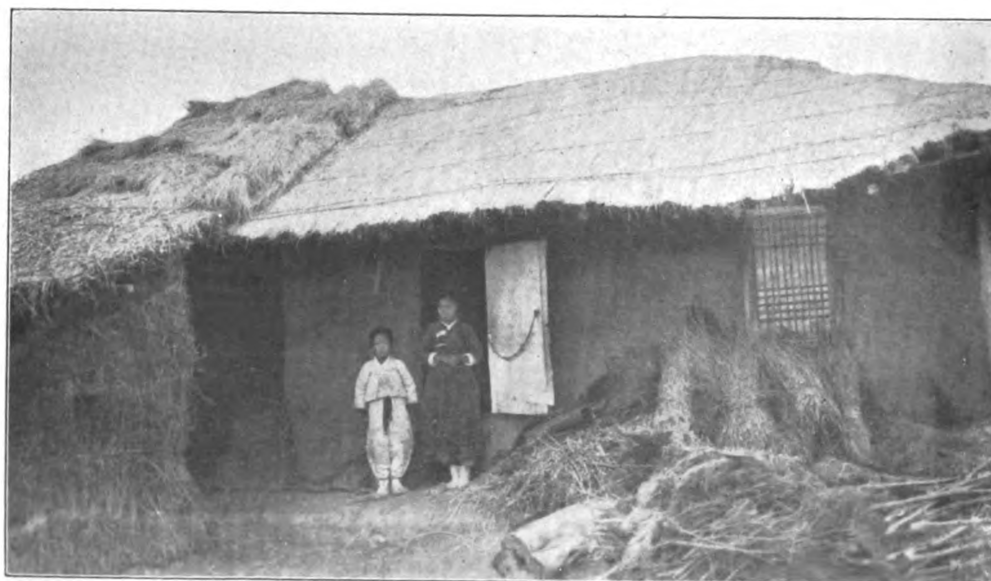


夫南里新移住小農及中農住家平面圖

圖版第六三



夫南里新移住中農住家



夫南里新移住小農住家

